法隆寺献納宝物特別調査概報 43

伎楽面X線断層（CT）調査

令和５年度

東 京 国 立 博 物 館

法隆寺献納宝物特別調査概報 43

伎楽面X線断層（CT）調査

はじめに

法隆寺献納宝物（以下、献納宝物）は、明治十一年（一八七八）に奈良・法隆寺から皇室に献納され、戦後、国に移管の後、現在は東京国立博物館が所蔵する三二六件（令和六年〈二〇二四〉三月三十一日現在。ただし未整理品については修理後に順次編入を行なっており、今後とも件数は増加する予定）からなる。東京国立博物館では昭和五十四年（一九七九）度より献納宝物の特別調査を実施しており、その成果は『法隆寺献納宝物特別調査概報』として逐次刊行してきた。

本年度は、重要文化財「伎楽面」を中心とする計三三件の仮面作品（N-２０８～２４０）を取り上げる。献納宝物の仮面については、かつて昭和五十四年度に刊行された『法隆寺献納宝物特別調査概報　Ⅰ　伎楽面』およびその内容を増補改訂した東京国立博物館編集『法隆寺献納宝物　伎楽面』（東京国立博物館、一九八四年）として詳細にわたる調査結果を刊行した。

前回の特別調査でもX線撮影や顔料分析など多角的な検討を行なったが、今日ではX線CT装置が導入され、より詳細に構造分析を行なうことが可能となった。そのため、再び伎楽面をはじめとする仮面を取り上げ、前回の調査結果を参照したうえでX線断層（CT）の所見をまとめ、ここに最新の調査成果として概報を刊行する次第である。

今後、献納宝物の諸作品については本格的な研究報告を行なう予定ではあるが、それに先立ち、本書の刊行を通じて作品研究や活用に供せられれば幸甚である。

令和六年三月二十九日

東京国立博物館

目次

はじめに……3
目次……5
凡例……6
調査日程……7
調査員の構成……7
図版……9

1 重要文化財 伎楽面 師子児（N－208）……10
2 重要文化財 伎楽面 治道（N－209）……15
3 重要文化財 伎楽面 呉公（N－210）……20
4 重要文化財 伎楽面 金剛（N－212）……25
5 重要文化財 伎楽面 迦楼羅（N－215）……30
6 重要文化財 伎楽面 崑崙（N－214）……35
7 重要文化財 伎楽面 呉女（N－211）……40
8 重要文化財 伎楽面 力士（N－227）……46
9 重要文化財 伎楽面 波羅門（N－230）……51
10 重要文化財 伎楽面 太孤父（N－216）……56
11 重要文化財 伎楽面 太孤児（N－217）……61
12 重要文化財 伎楽面 太孤児（N－218）……66
13 重要文化財 伎楽面 醉胡王（N－219）……71
14 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－220）……76
15 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－221）……81
16 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－222）……86
17 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－223）……91
18 重要文化財 伎楽面 醉胡従（未完成）（N－237）……96
19 重要文化財 伎楽面 醉胡従（未完成）（N－238）……101
20 重要文化財 伎楽面 師子児（N－224）……105
21 重要文化財 伎楽面 金剛（N－213）……109
22 重要文化財 伎楽面 金剛（N－229）……113
23 重要文化財 伎楽面 迦楼羅（N－226）……117
24 重要文化財 伎楽面 呉女（N－225）……121
25 重要文化財 伎楽面 力士（N－228）……127
26 重要文化財 伎楽面 醉胡王（N－231）……132
27 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－232）……138
28 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－233）……142
29 重要文化財 伎楽面 力士（N－234）……146
30 重要文化財 伎楽面 波羅門（N－236）……150
31 重要文化財 伎楽面 醉胡従（N－235）……154

補1 舞楽面（N－239）……158
補2 鬼面（N－240）……162

法隆寺献納宝物「伎楽面」のX線断層（CT）調査……169
用材の樹種の識別について……171
作品解説……172
法隆寺献納宝物仮面作品一覧……181
X線断層（CT）撮影データ……182
法隆寺献納宝物特別調査概報および研究図録等一覧……184

凡　例

1. 本書は法隆寺献納宝物を調査対象として、東京国立博物館が昭和五十四年（一九七九）度より継続して実施している法隆寺献納宝物特別調査の第44次調査の概報である。
2. 今回調査対象とした品目は、法隆寺献納宝物の重要文化財「伎楽面」を中心とする計三三件の仮面作品（N－２０８～２４０）である。
3. 本書の記載内容は、X線断層（CT）報告の所見とした。
4. CT画像の挿図掲載順序は、木製面については、垂直断面、水平断面、必要に応じた場面とした。N－２３４～２３６のCTデータは、左上が水平断面、右上が垂直側断面、左下は垂直正断面、右下は３Dである。また、挿図中の青線は水平断面、緑線は垂直正断面、赤線は垂直側断面の位置を示す。
5. 文中の「旧報告」は東京国立博物館編集『法隆寺献納宝物　伎楽面』（東京国立博物館、一九八四年）を指し、作品の配列はこれに準じた。
6. X線断層（CT）の撮影データは、挿図のほか、垂直（正面・側面）および水平等、各方向の動画を作成し、別途公開した。（URLは、https://youtube.com/playlist?list=PLy3tKWX6rk03vm_LKlSdmDqrxaIqEBpR1&si=8fOt9RxIk1Czh_dX）
7. 概説は浅見龍介、調書の解説は児島大輔、西木政統、増田政史、丸山士郎が執筆し、X線断層（CT）の検証は宮田将寛とともに行なった。執筆にあたり、「用材の樹種の識別について」と乾漆製面の蔓性植物については、森林総合研究所木材加工特性研究領域長・安部久氏、元森林総合研究所関西支所長・藤井智之氏から助言を得た。
8. 本書の編集は、西木が中心となって後掲の調査員と東京国立博物館学芸企画部出版企画室が担当した。

調査日程

令和5年7月3日～5日	作品のX線CT撮影調査を行なう
令和5年7月31日～8月1日	作品のX線CT撮影調査を行なう
令和5年8月2日	作品の追加写真撮影を行なう
令和5年8月22日～23日	作品のX線CT撮影調査を行なう
令和5年9月8日	調査成果の検討を行なう
令和5年10月2日	作品の追加写真撮影を行なう
令和5年11月1日	X線CT撮影データの合同検討会を行なう
令和5年12月22日	X線CT撮影データの合同検討会を行なう
令和6年3月29日	『法隆寺献納宝物特別調査概報43　伎楽面X線断層（CT）調査』を刊行

調査員の構成（所属・職名は令和六年一月当時のもの）

浅見龍介（東京国立博物館副館長）
児島大輔（東京国立博物館学芸研究部調査研究課東洋室主任研究員）
西木政統（東京国立博物館学芸研究部列品管理課登録室主任研究員）
宮田将寛（東京国立博物館学芸研究部保存修復課調査分析室専門職）
丸山士郎（文化財活用センター副センター長）
増田政史（文化財活用センター企画担当研究員／東京国立博物館学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室研究員）

図

版

図 1-1　伎楽面 師子児　正面

図 1-3　同　右側面

図 1-2　同　左側面

図 1-5　同　背面

図 1-4　同　左斜側面

図 1-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 1-7　同

図 1-8　同

図 1-9　同

図 1-11　同

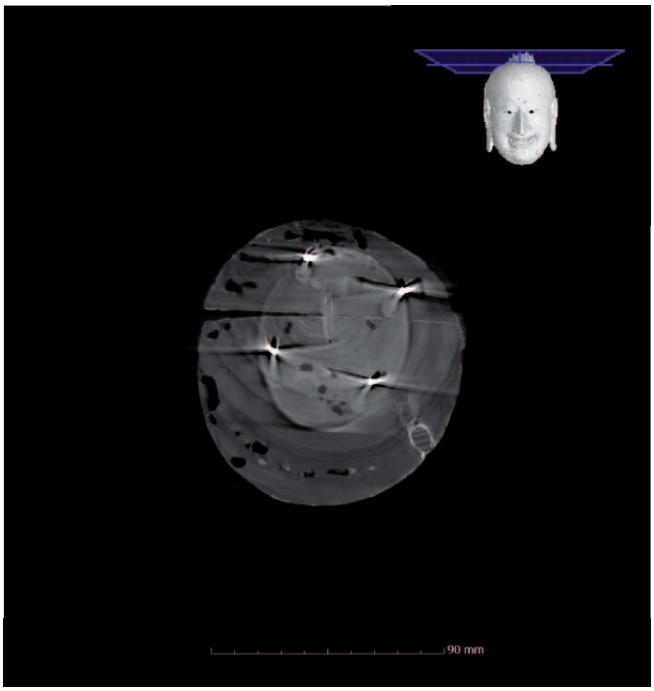


図 1-10　同　水平断面

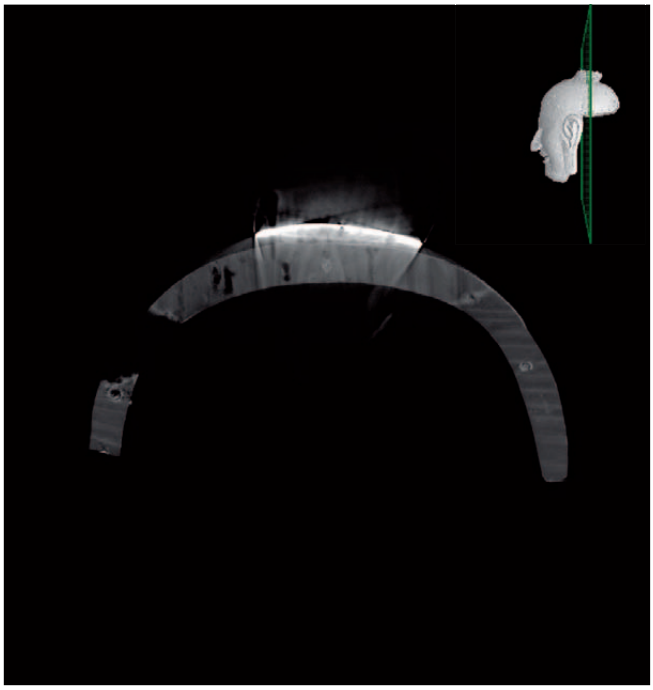


図 1-12　同　垂直正断面

図 2-1　伎楽面 治道　正面

図 2-3　同　右側面

図 2-2　同　左側面

図 2-5　同　背面

図 2-4　同　右斜側面

図 2-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 2-7　同　水平断面

図 2-8　同

図 2-9　同

図 2-10　同　垂直正断面

図 3-1　伎楽面 呉公　正面

図 3-3　同　右側面

図 3-2　同　左側面

図 3-5　同　背面

図 3-4　同　右斜側面

図 3-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 3-7　同

図 3-9　同

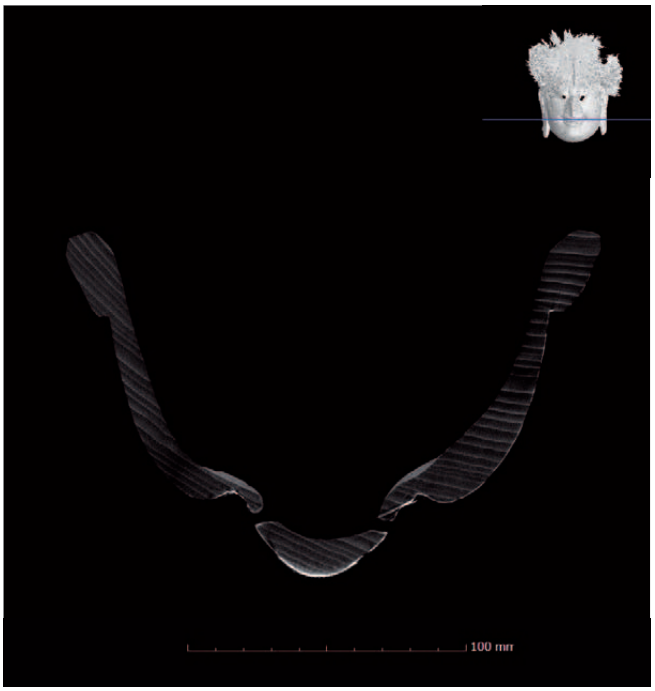


図 3-8　同　水平断面

図 3-10　同

図 3-11　同

図 3-12　同　垂直正断面

図 4-1　伎楽面 金剛　正面

図 4-3　同　右側面

図 4-2　同　左側面

図 4-5　同　背面

図 4-4　同　右斜側面

図 4-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

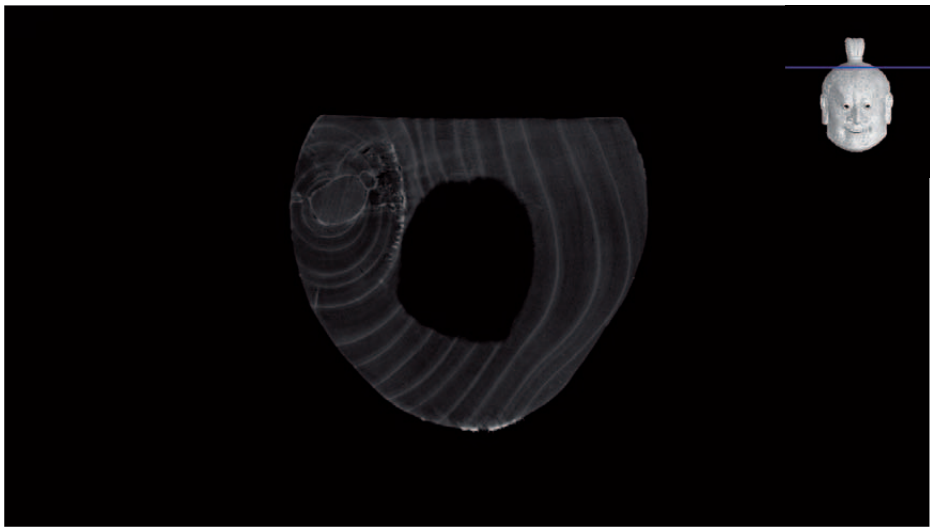


図 4-7　同　水平断面

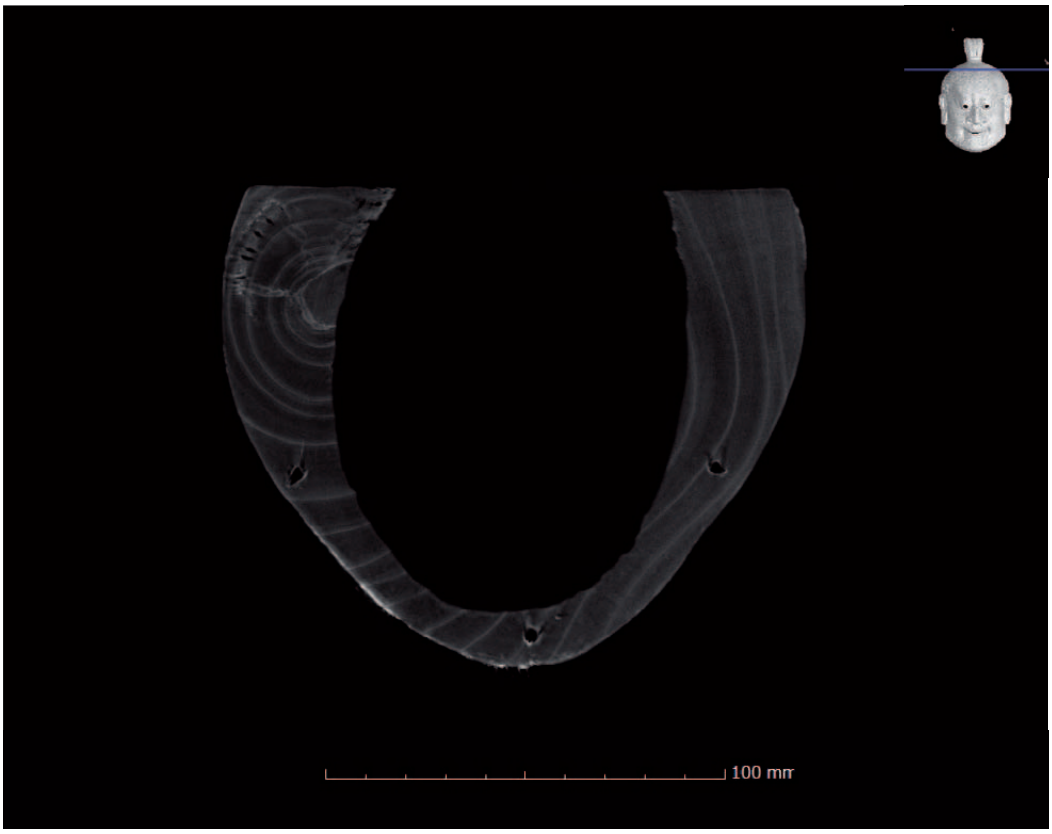


図 4-8　同

図 4-9　同

図 4-10　同

図 4-11　同　垂直正断面

図 5-1　伎楽面 迦楼羅　正面

図 5-3　同　右側面

図 5-2　同　左側面

図 5-5　同　背面

図 5-4　同　右斜側面

図 5-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 5-7　同

図 5-8　同

図 5-9　同

図 5-11　同

図 5-10　同　水平断面

図 5-12　同

図 6-1　伎楽面 崑崙　正面

図 6-3　同　右側面

図 6-2　同　左側面

図 6-5　同　背面

図 6-4　同　右斜側面

図 6-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 6-7　同

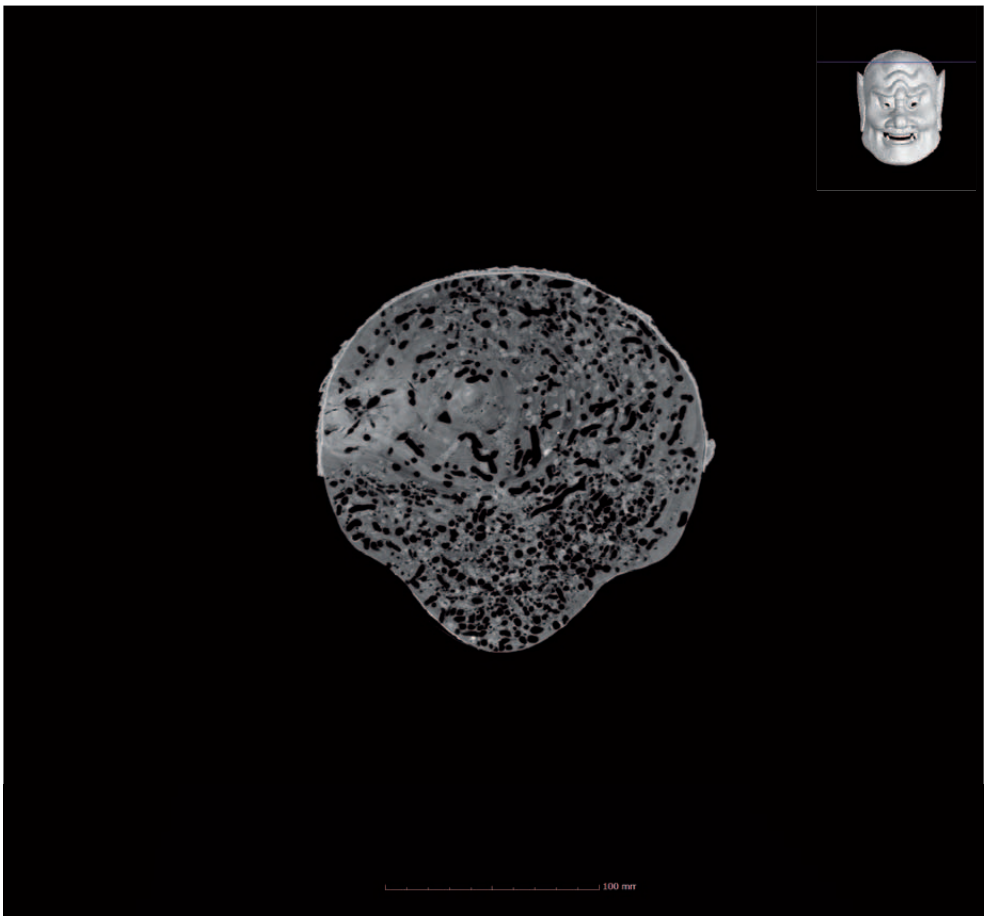


図 6-8　同　水平断面

図 6-9　同

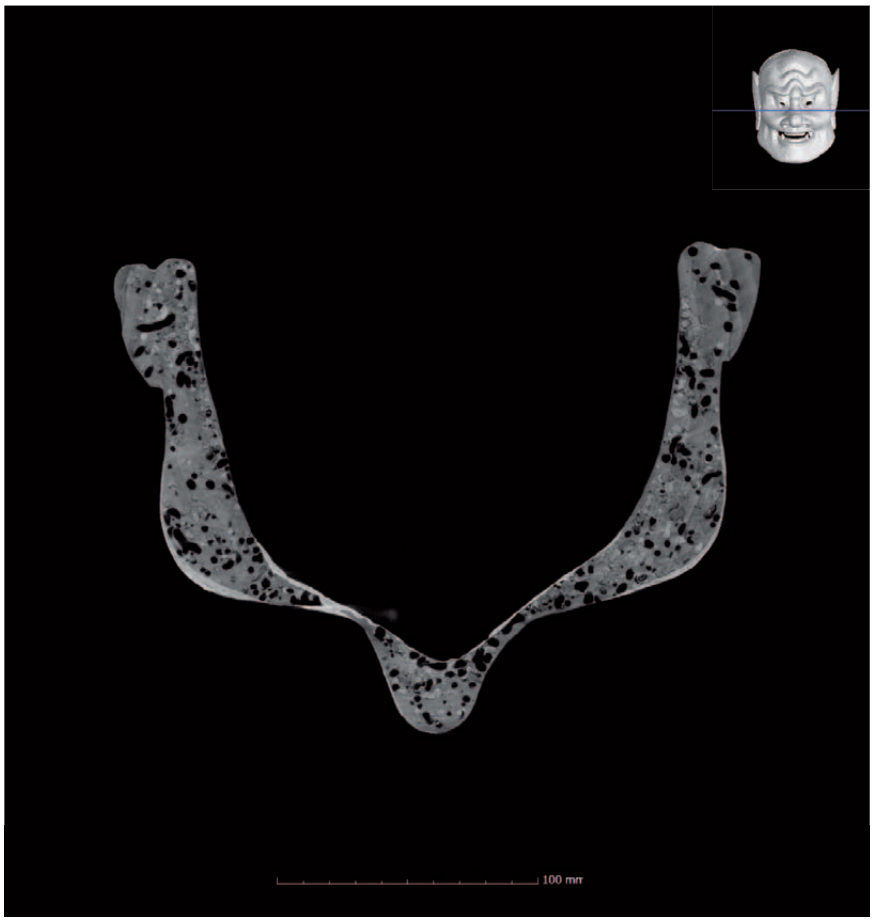


図 6-10　同

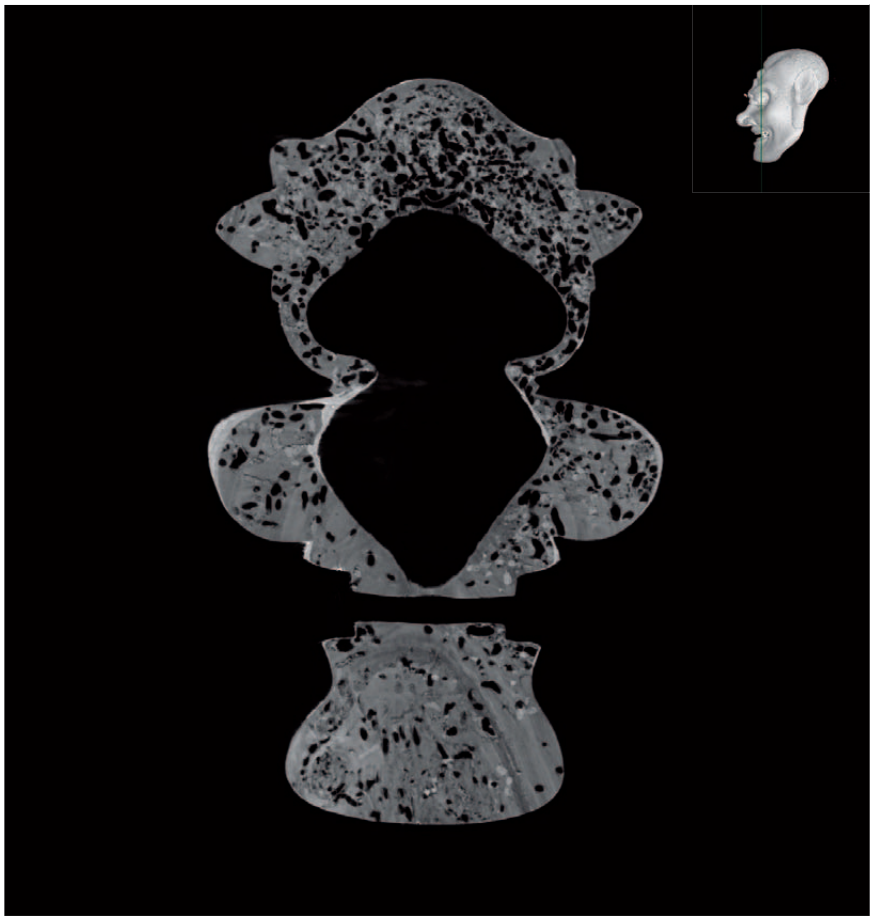


図 6-11　同　垂直正断面

図 7-1　伎楽面 呉女　正面

図 7-3　同　右側面

図 7-2　同　左側面

図 7-5　同　背面

図 7-4　同　左斜側面

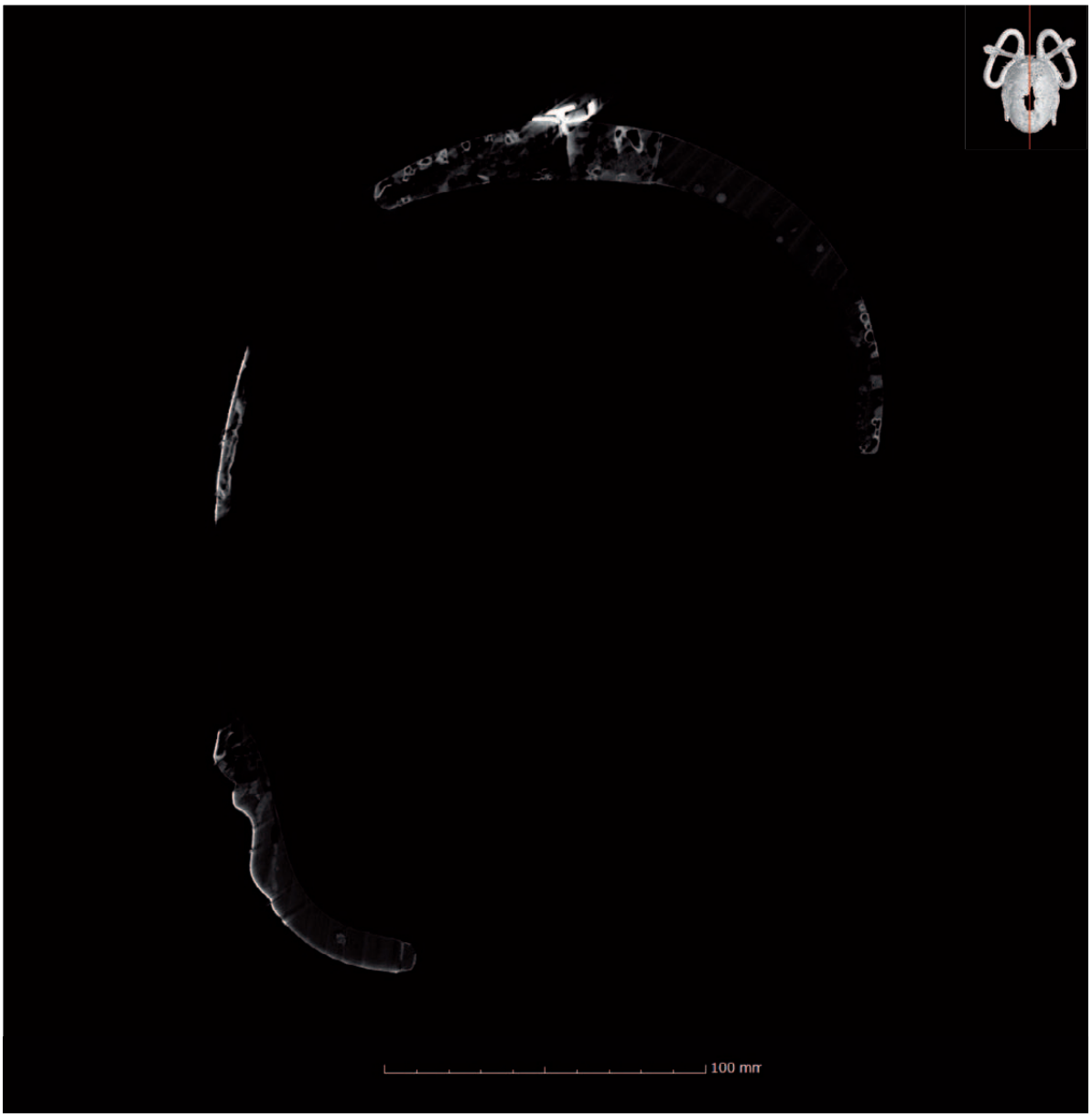


図 7-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 7-7　同

図 7-8　同

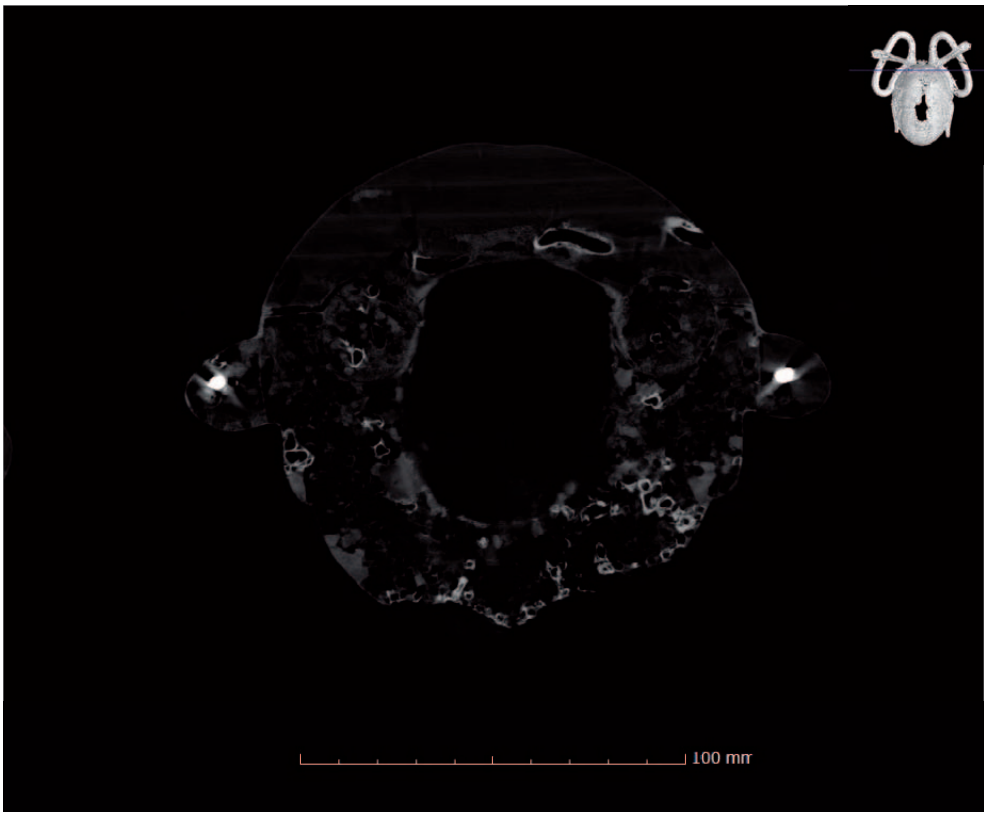


図 7-9　同　水平断面

図 7-10　同

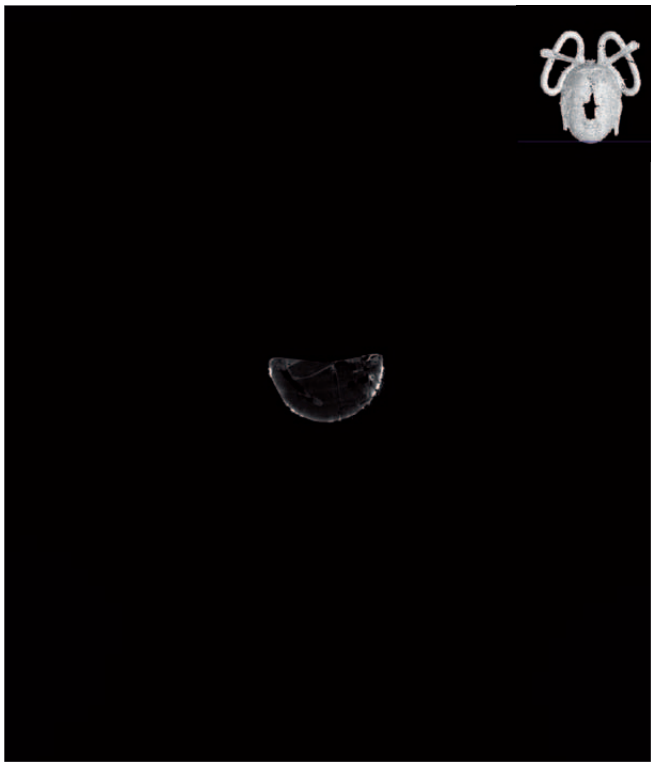


図 7-12　同

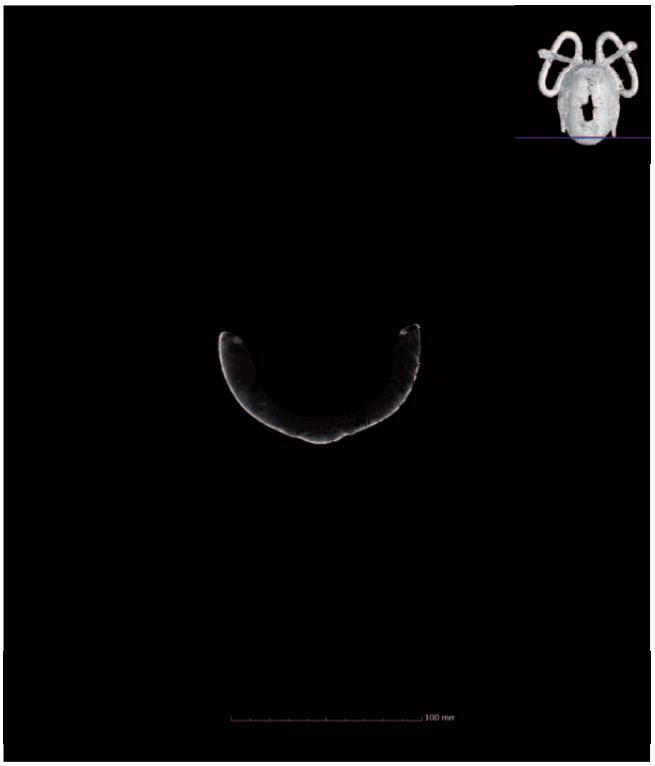


図 7-11　同

図 7-13　同　垂直正断面

図 8-1　伎楽面 力士　正面

図 8-3　同　右側面

図 8-2　同　左側面

図 8-5　同　背面

図 8-4　同　左斜側面

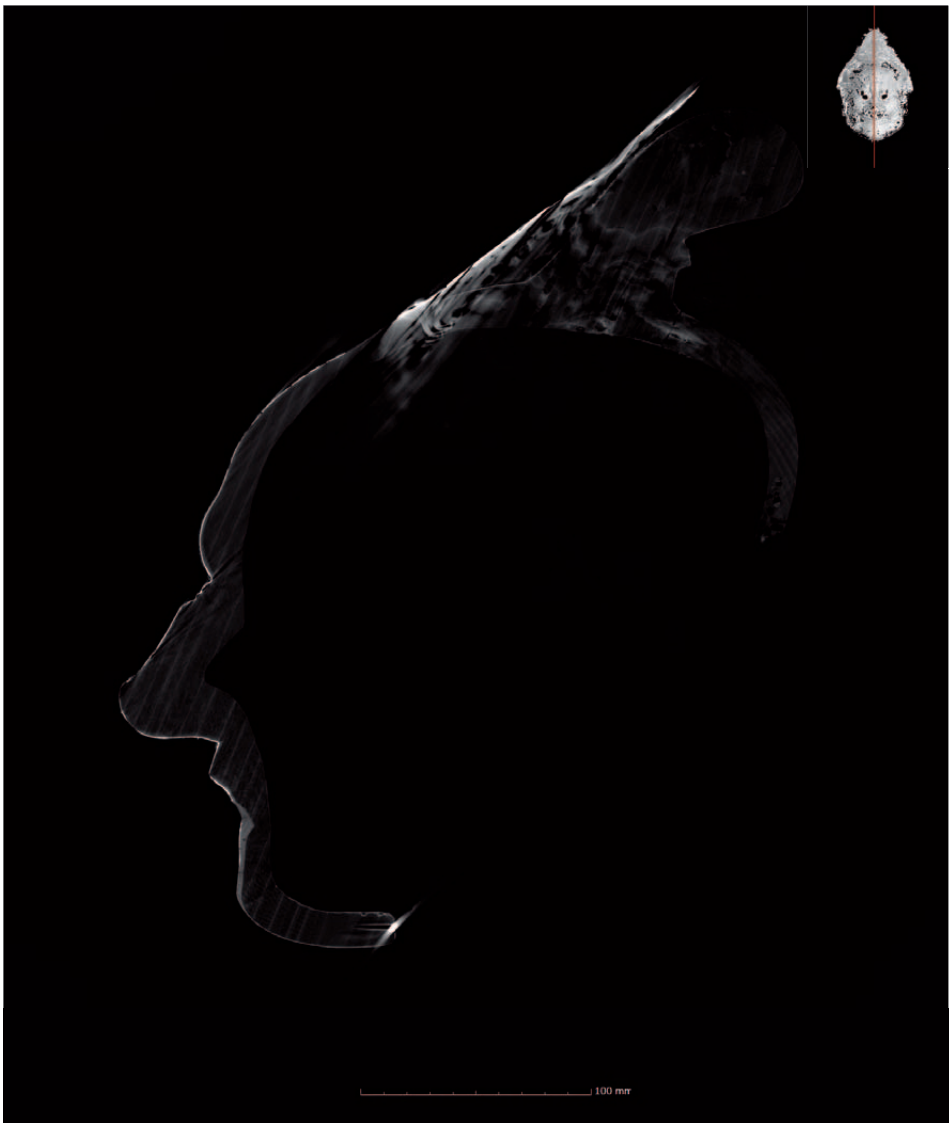


図 8-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 8-7　同

図 8-8　同　水平断面

図 8-9　同

図 8-10　同

図 8-11　同　垂直正断面

図 8-12　同

図 9-1　伎楽面 波羅門　正面

図 9-3　同　右側面

図 9-2　同　左側面

図 9-5　同　背面

図 9-4　同　左斜側面

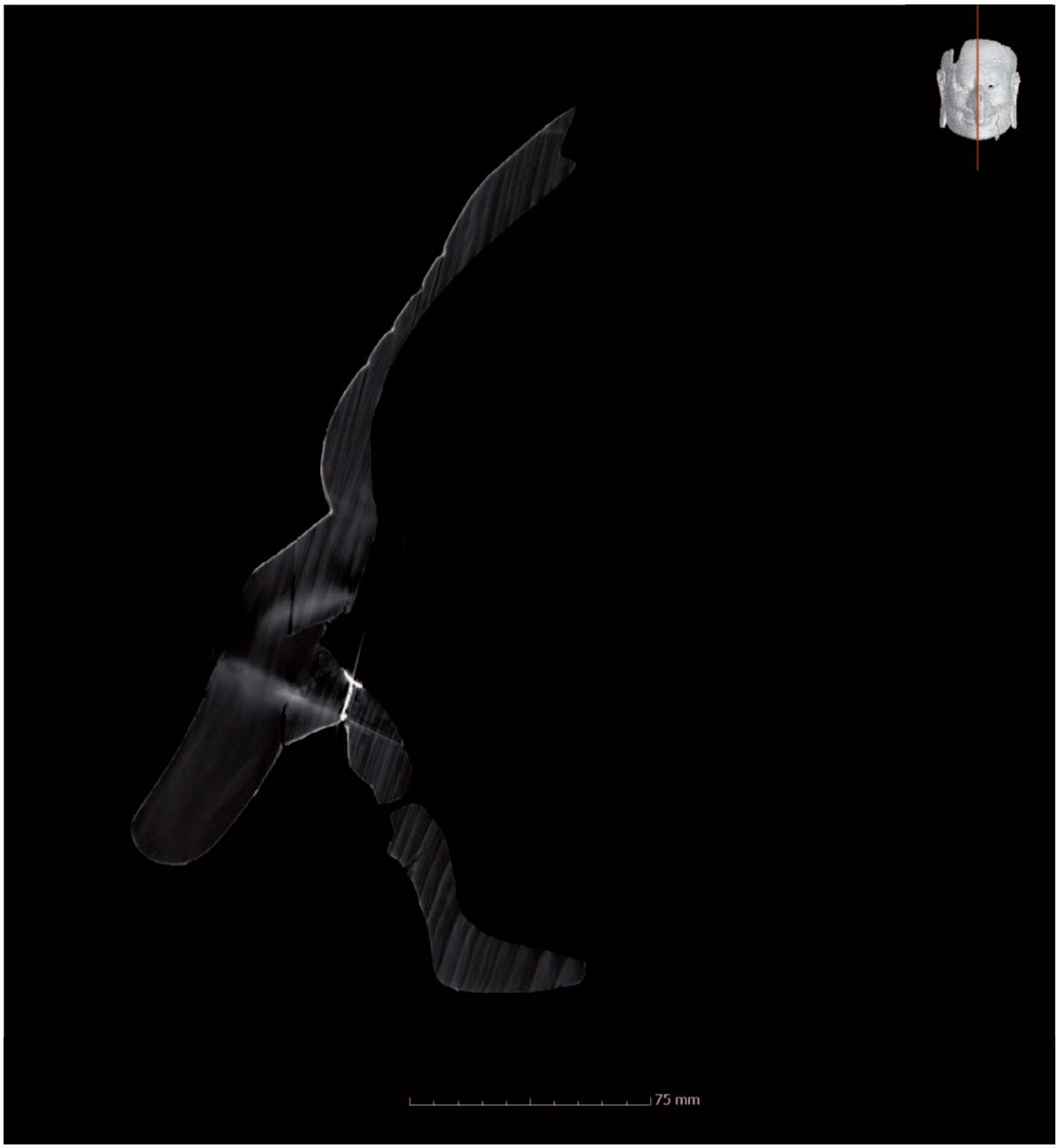


図 9-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

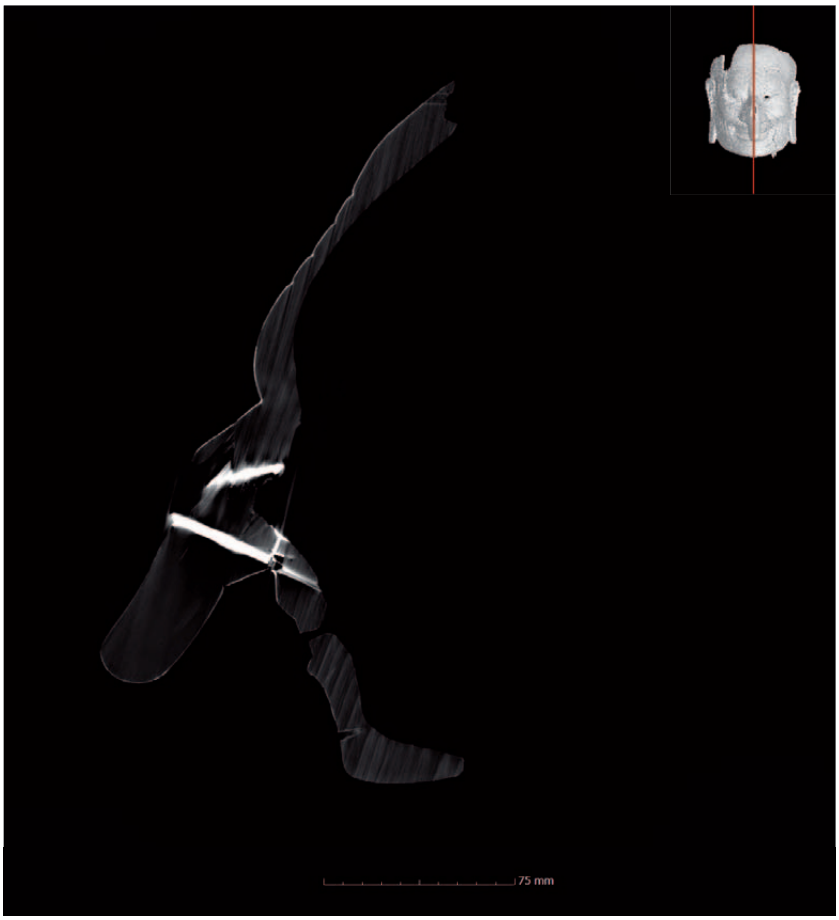


図 9-7　同

図 9-8　同

図 9-10　同

図 9-9　同　水平断面

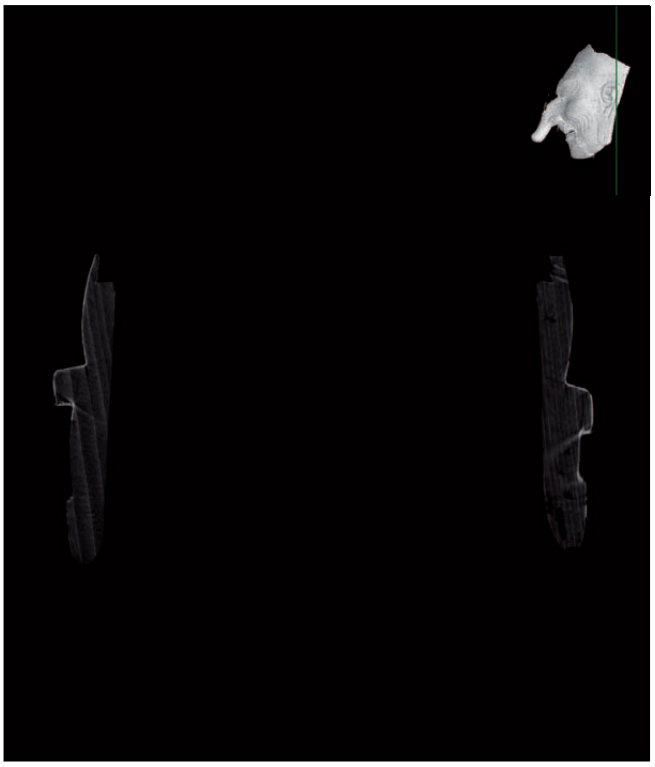


図 9-11　同　垂直正断面

図 10-1　伎楽面 太孤父　正面

図 10-3　同　右側面

図 10-2　同　左側面

図 10-5　同　背面

図 10-4　同　右斜側面

図 10-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 10-7　同

図 10-8　水平断面

図 10-9　同

図 10-10　同

図 11-1　伎楽面 太孤児　正面

図 11-3　同　右側面

図 11-2　同　左側面

図 11-5　同　背面

図 11-4　同　左斜側面

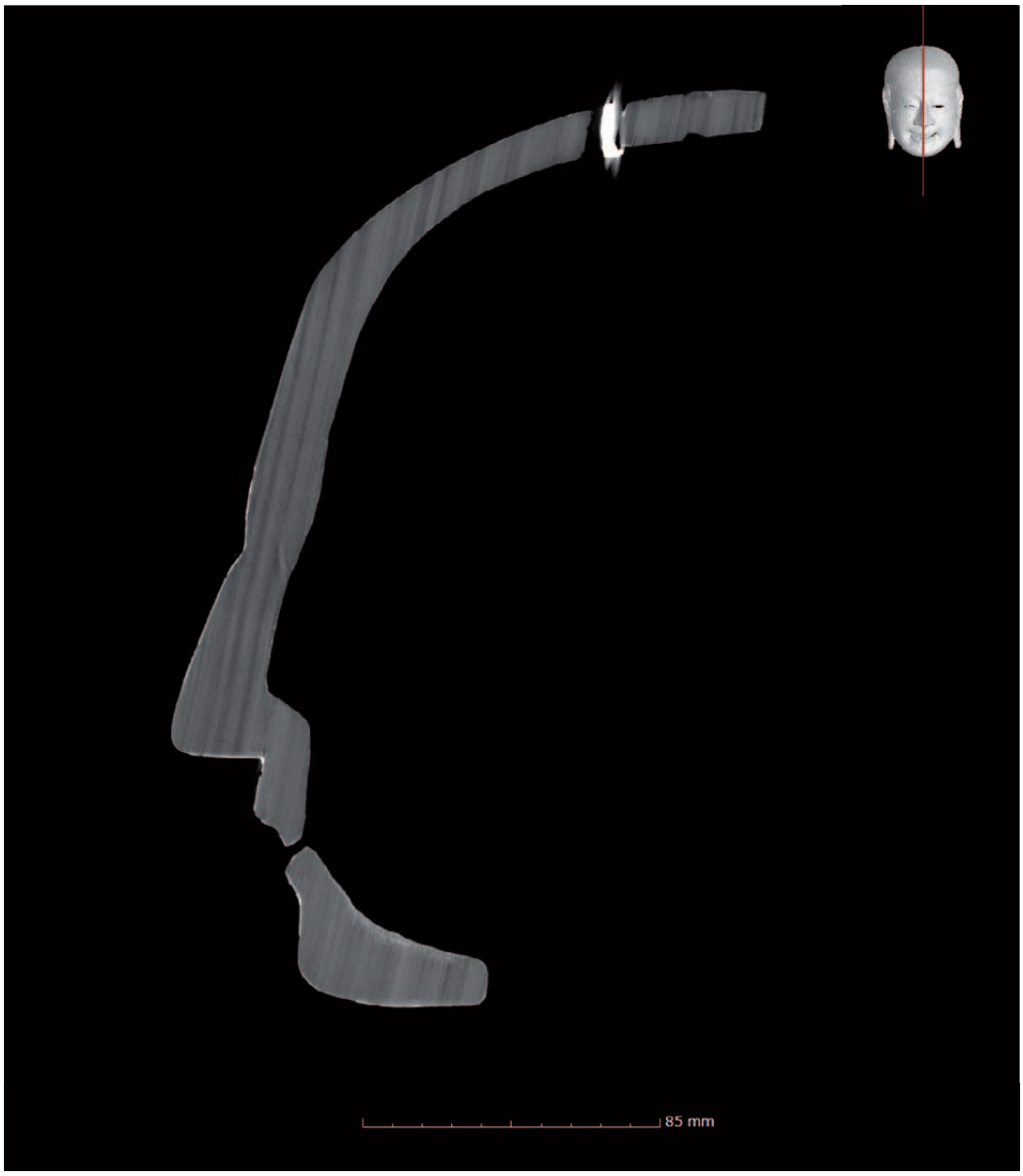


図 11-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 11-7　同　水平断面

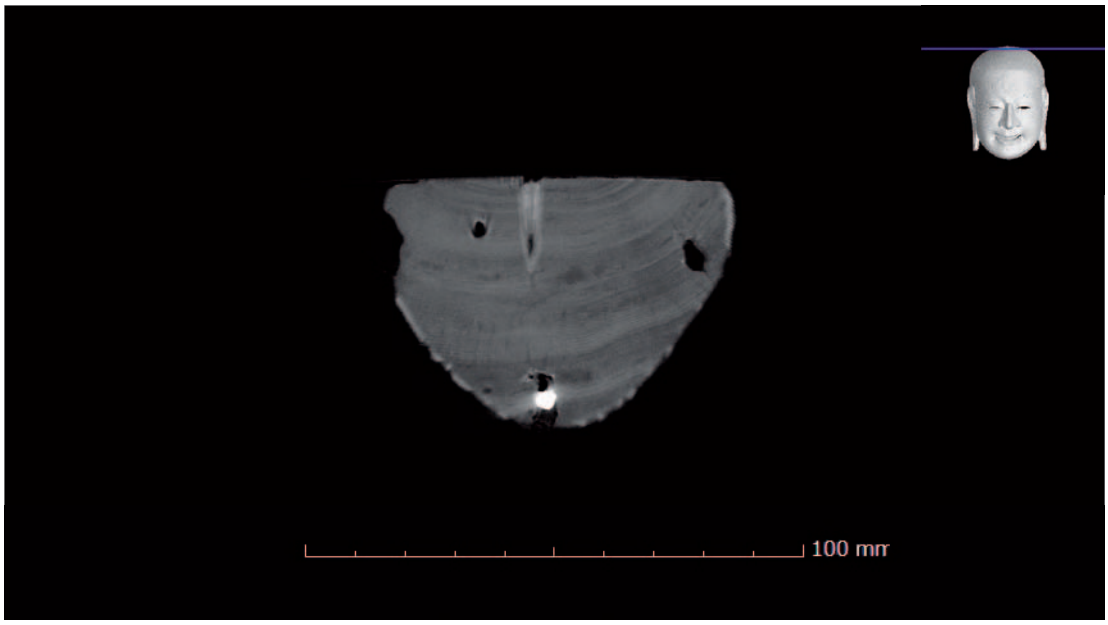


図 11-8　同

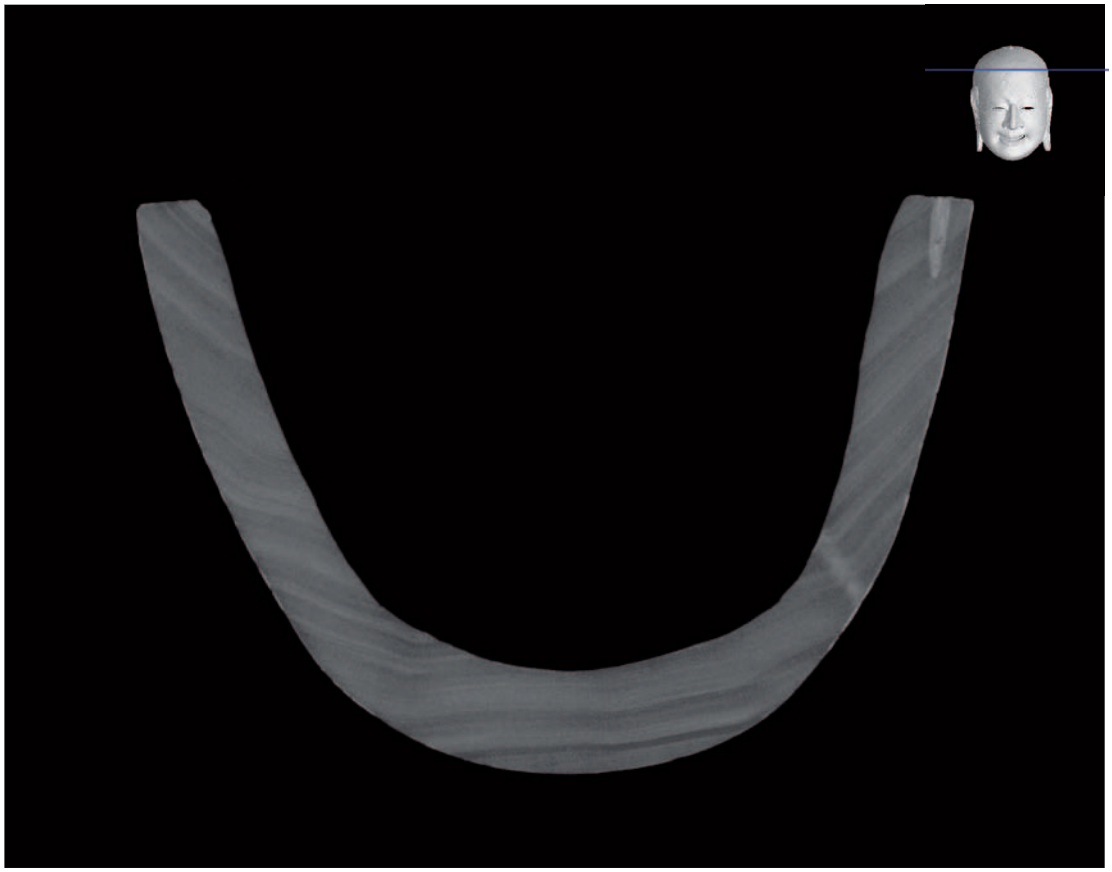


図 11-9　同

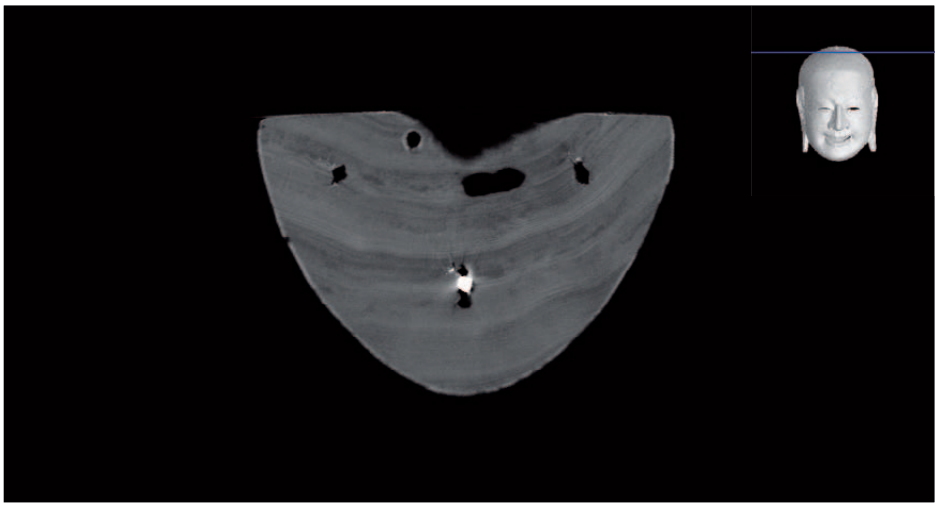


図 11-10　同

図 11-11　同　垂直正断面

図 12-1　伎楽面 太孤児　正面

図 12-3　同　右側面

図 12-2　同　左側面

図 12-5　同　背面

図 12-4　同　右斜側面

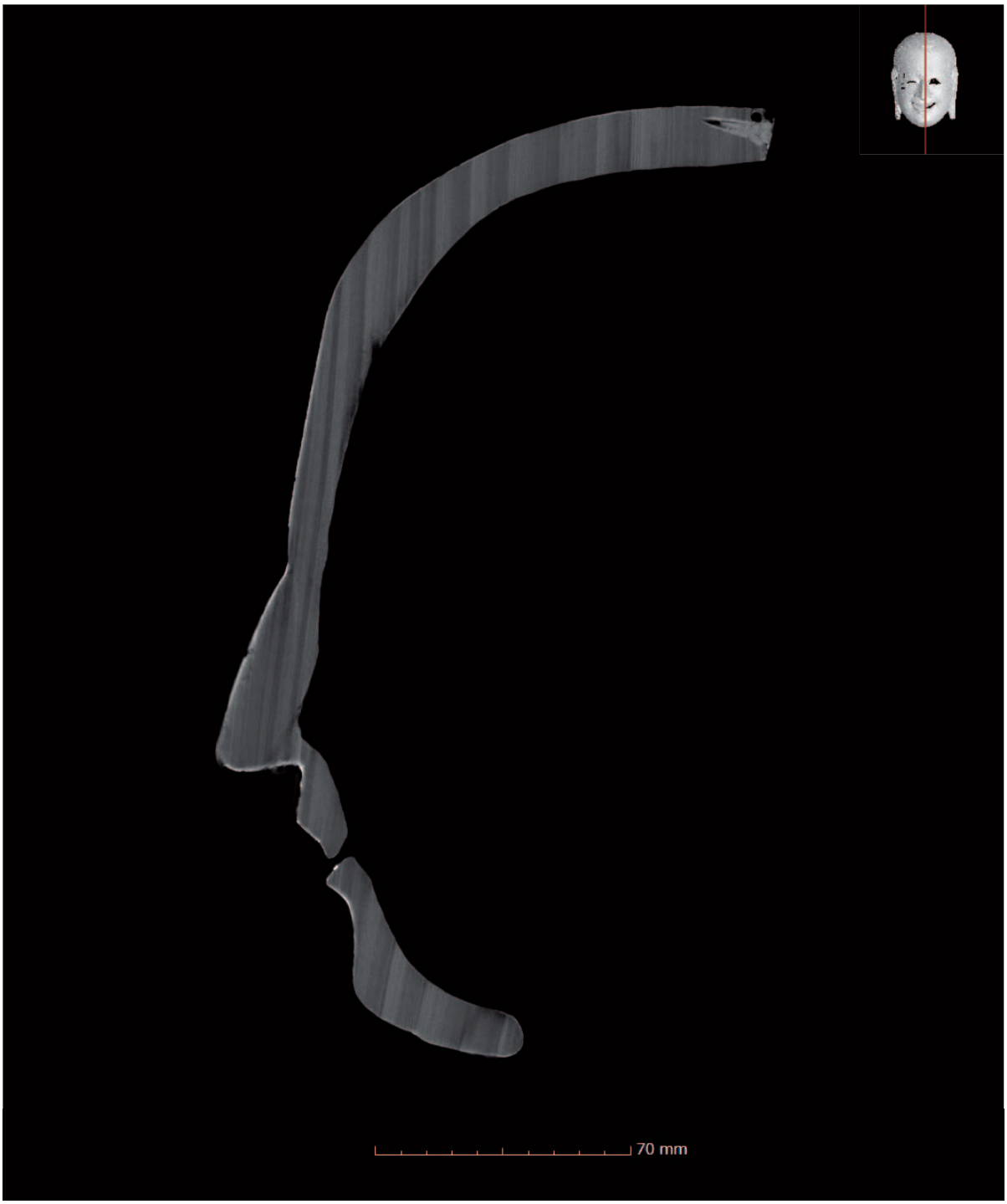


図 12-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

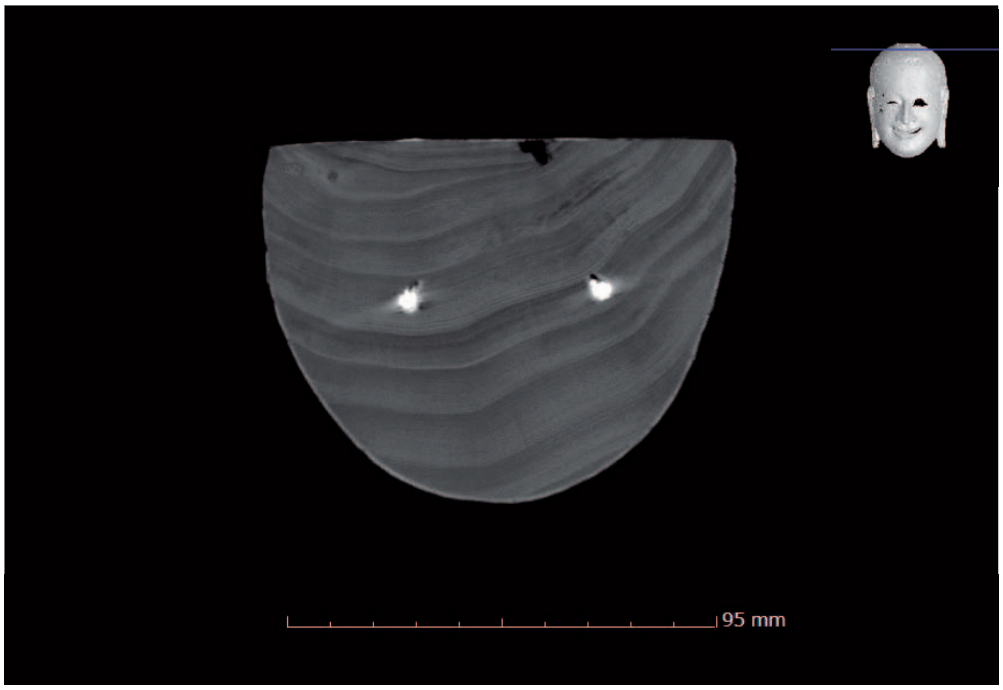


図 12-7　同　水平断面

図 12-8　同

図 12-9　同　垂直正断面

図 12-10　同

図 13-1　伎楽面 酔胡王　正面

図 13-3　同　右側面

図 13-2　同　左側面

図 13-5　同　背面

図 13-4　同　左斜側面

図 13-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 13-7　同

図 13-8　同　水平断面

図 13-9　同

図 13-10　同

図 13-11　同

図 14-1　伎楽面 酔胡従　正面

図 14-3　同　右側面

図 14-2　同　左側面

図 14-5　同　背面

図 14-4　同　右斜側面

図 14-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 14-7　同

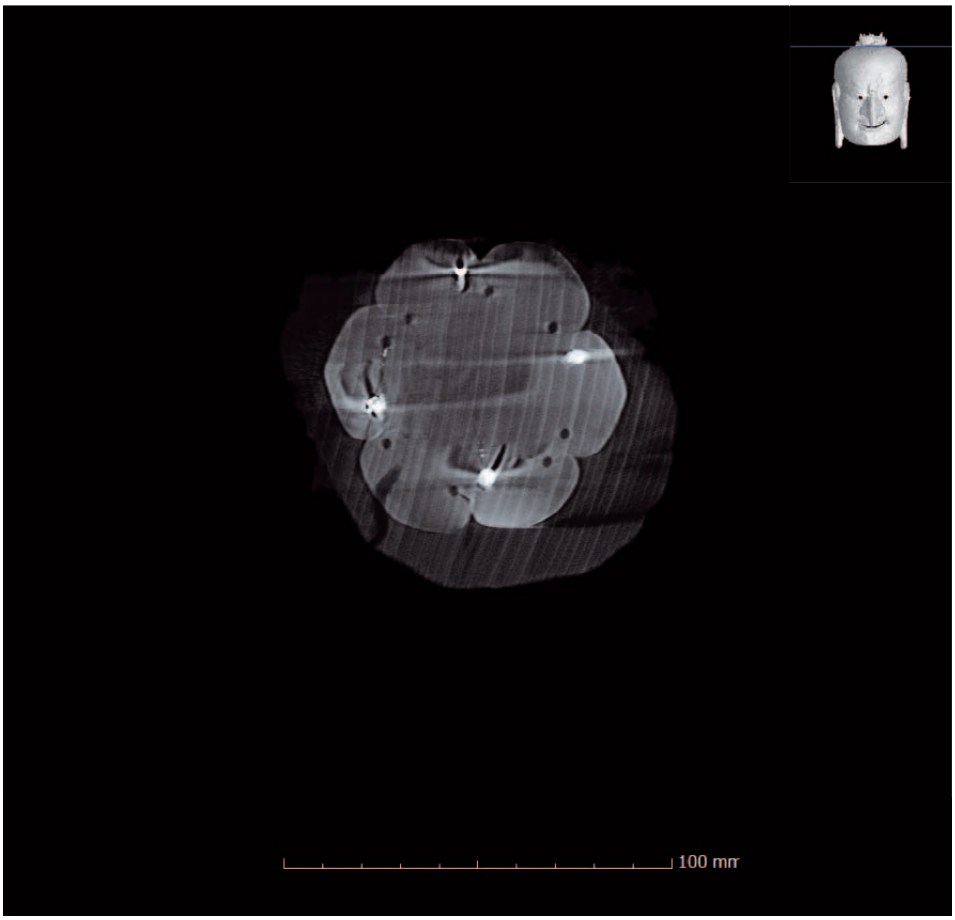


図 14-8　同　水平断面

図 14-9　同

図 14-10　同

図 14-11　同　垂直正断面

図 15-1　伎楽面 酔胡従　正面

図 15-3　同　右側面

図 15-2　同　左側面

図 15-5　同　背面

図 15-4　同　左斜側面

図 15-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

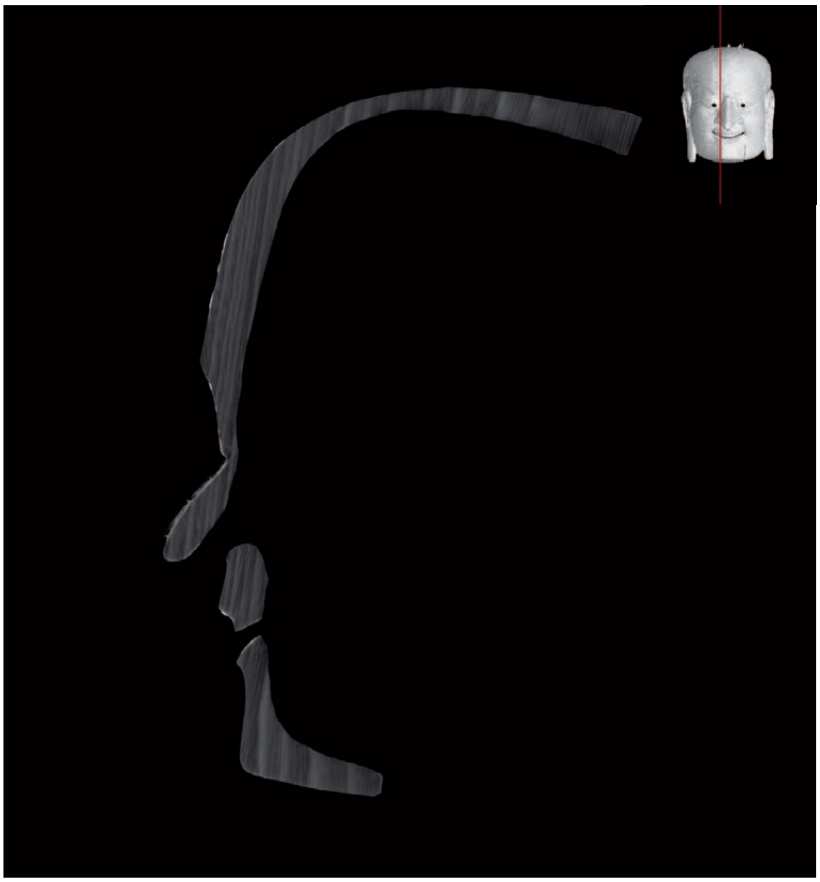


図 15-7　同

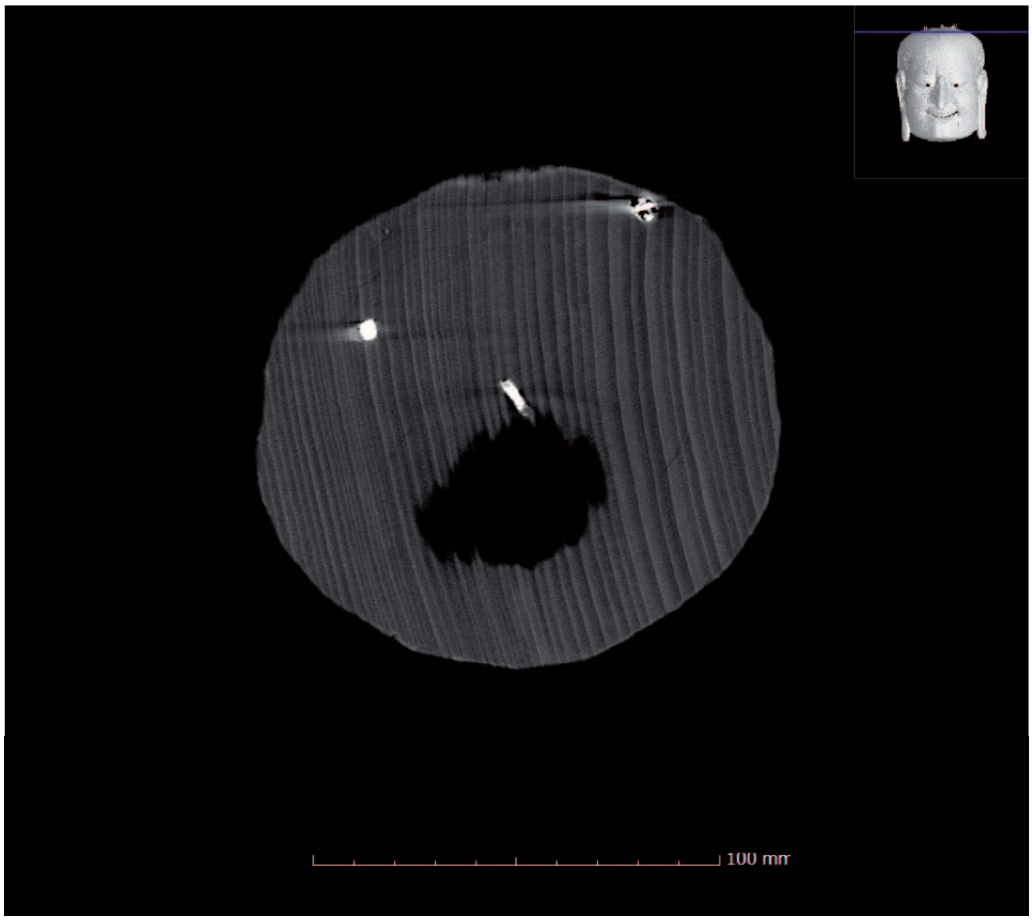


図 15-8　同　水平断面

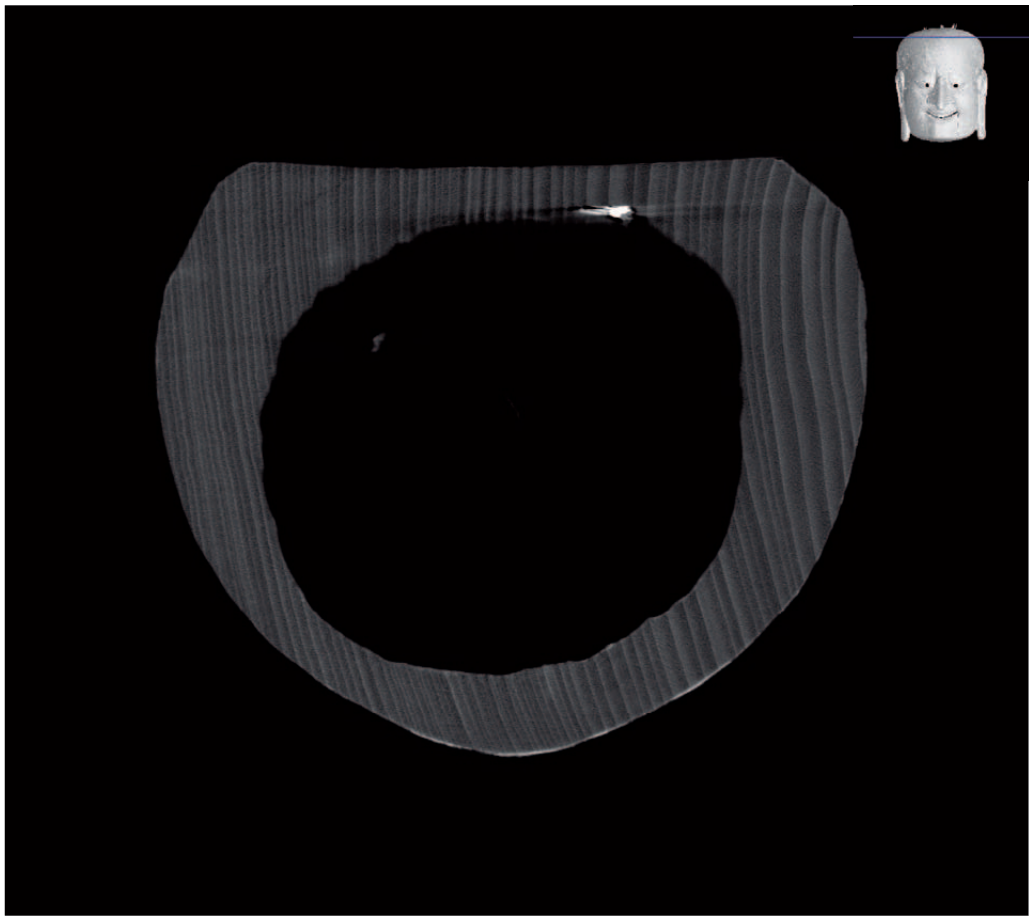


図 15-9　同

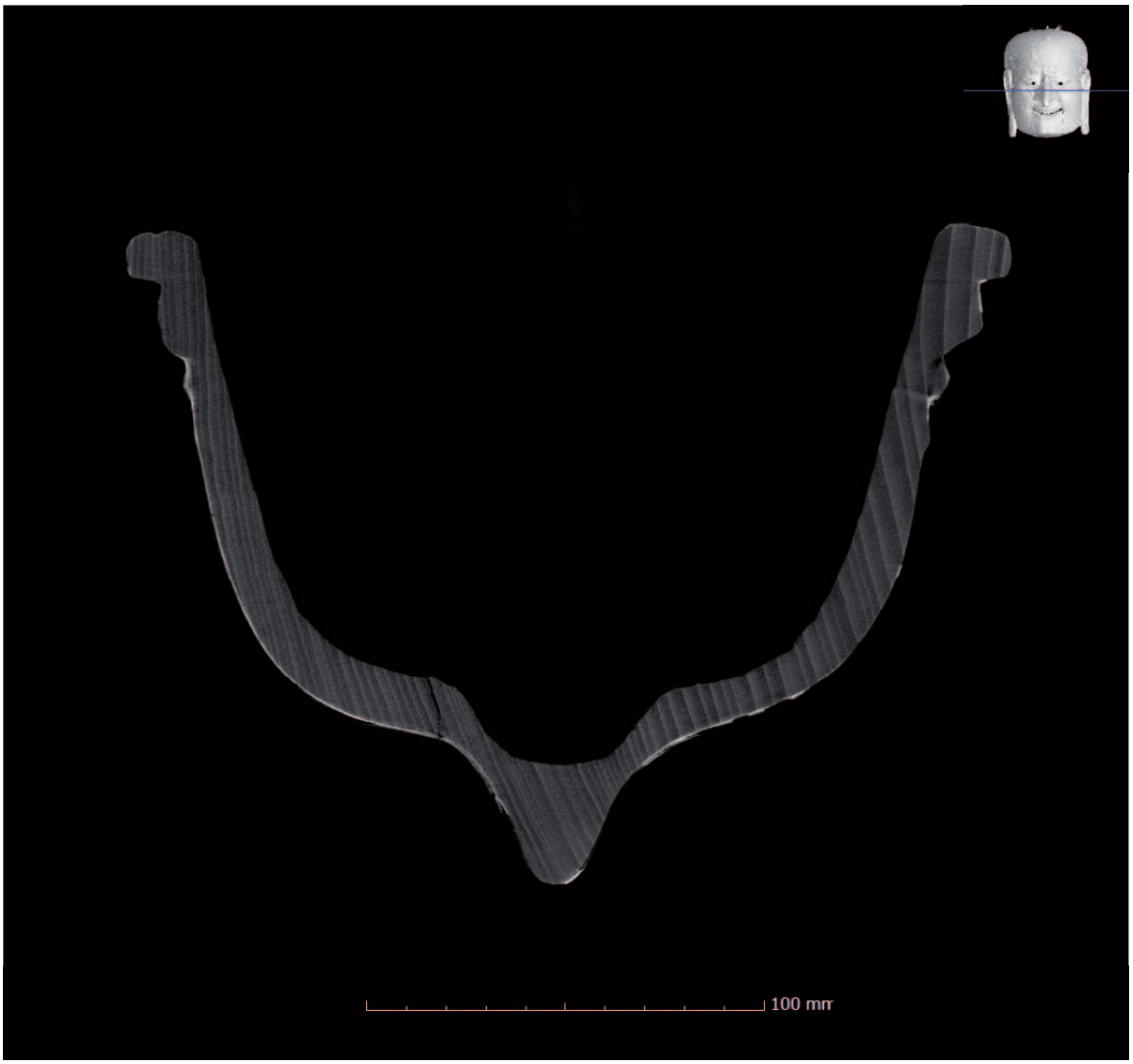


図 15-10　同

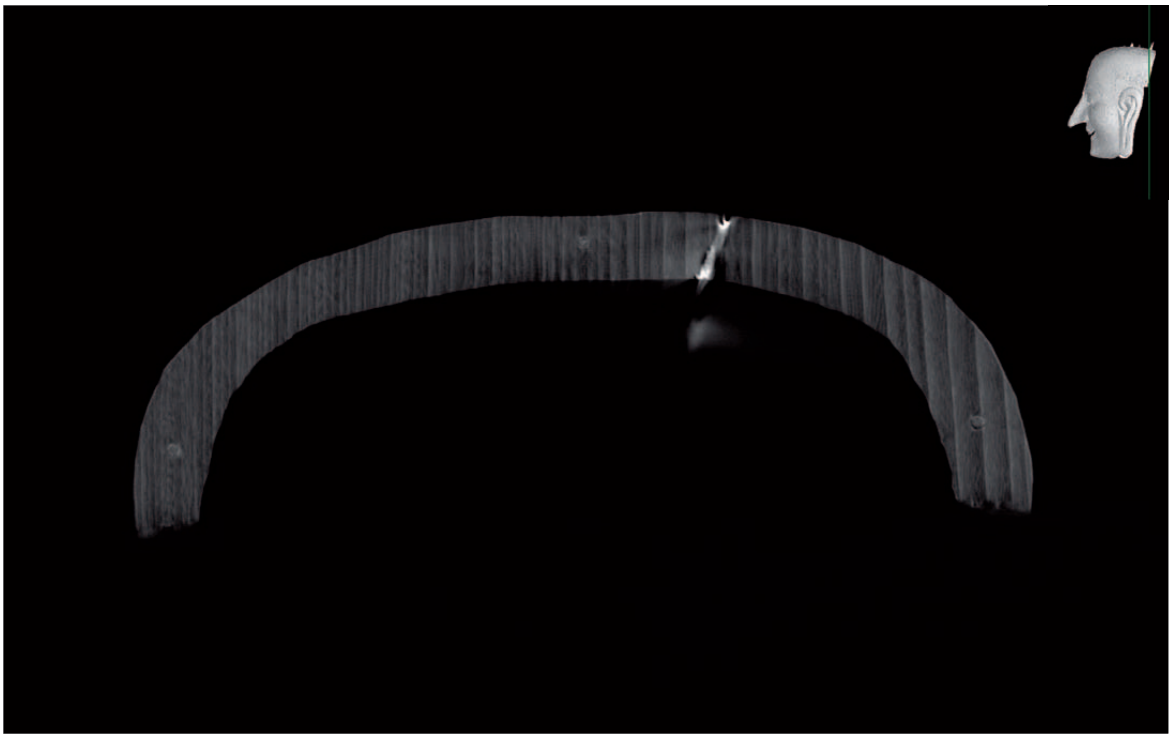


図 15-11　同　垂直正断面

図 16-1　伎楽面 酔胡従　正面

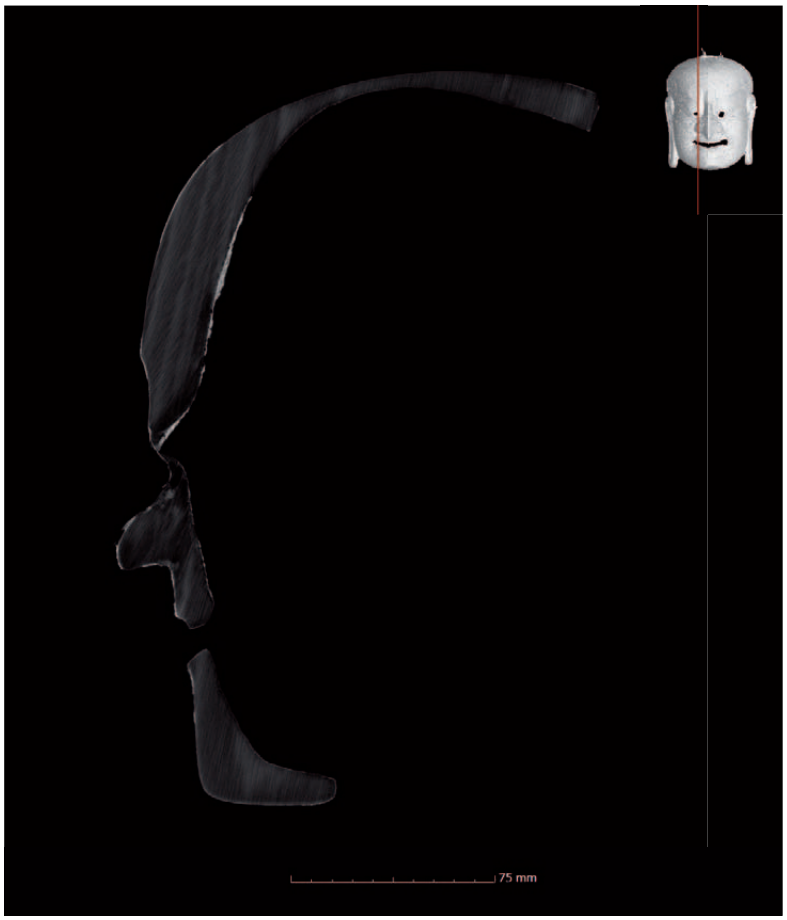
図 16-3　同　右側面

図 16-2　同　左側面

図 16-5　同　背面

図 16-4　同　左斜側面

図 16-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面



16-7　同

16-8　同

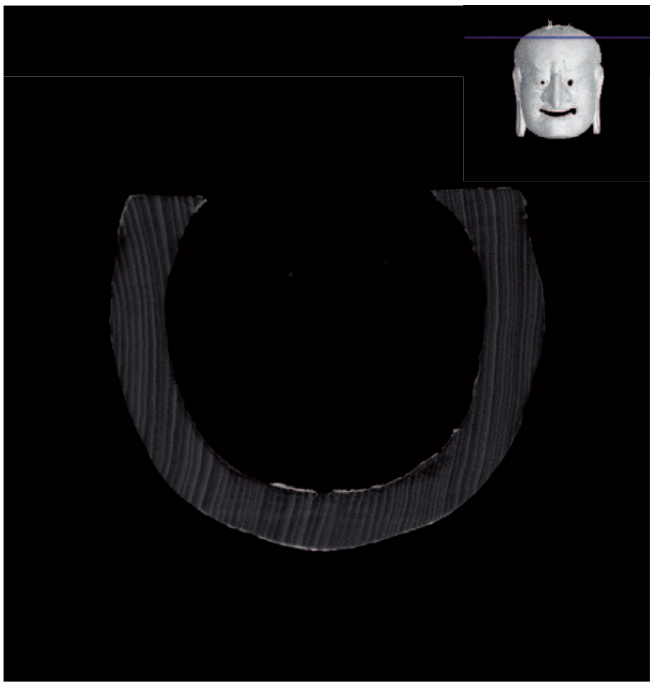


図 16-10　同

図 16-9　同　水平断面

図 16-12　同　垂直正断面

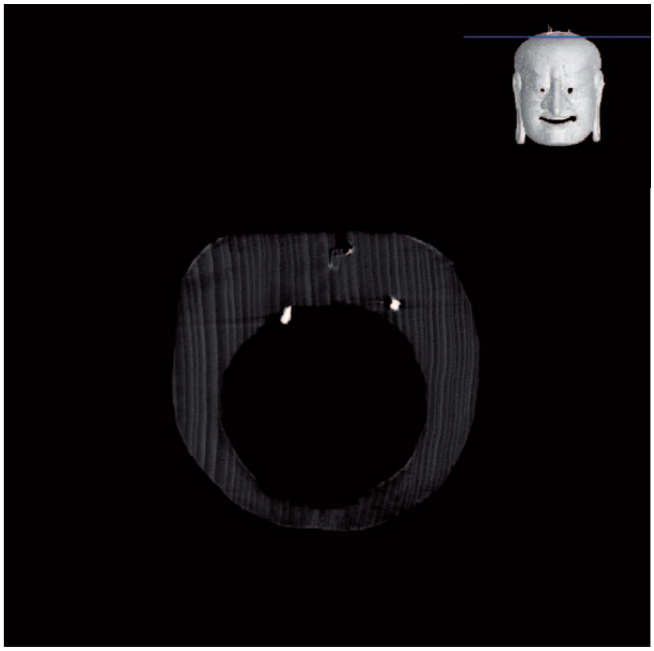


図 16-11　同

図 17-1　伎楽面 酔胡従　正面

図 17-3　同　右側面

図 17-2　同　左側面

図 17-5　同　背面

図 17-4　同　左斜側面

図 17-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 17-7　同

図 17-9　同

図 17-8　同　水平断面

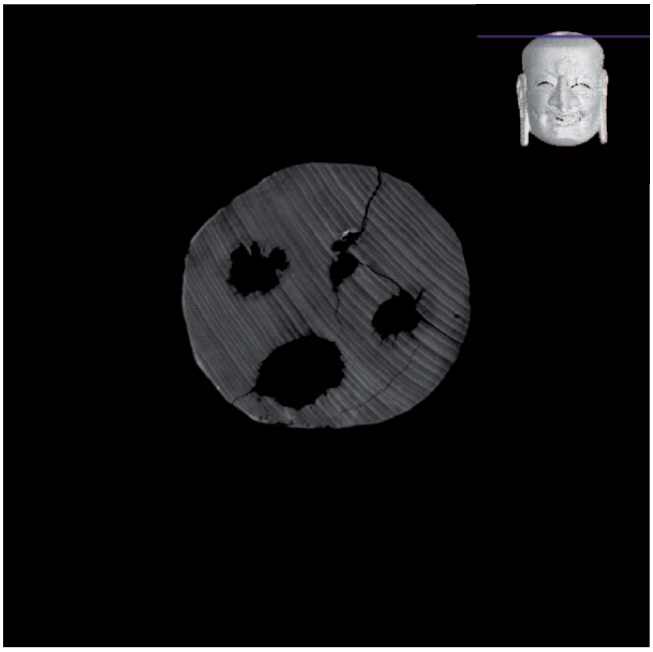


図 17-11　同

図 17-10　同

図 17-12　同　垂直正断面

図 18-1　伎楽面 酔胡従（未完成）　正面

図 18-3　同　右側面

図 18-2　同　左側面

図 18-5　同　背面

図 18-4　同　右斜側面

図 18-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 18-7　同

図 18-8　同

図 18-10　同

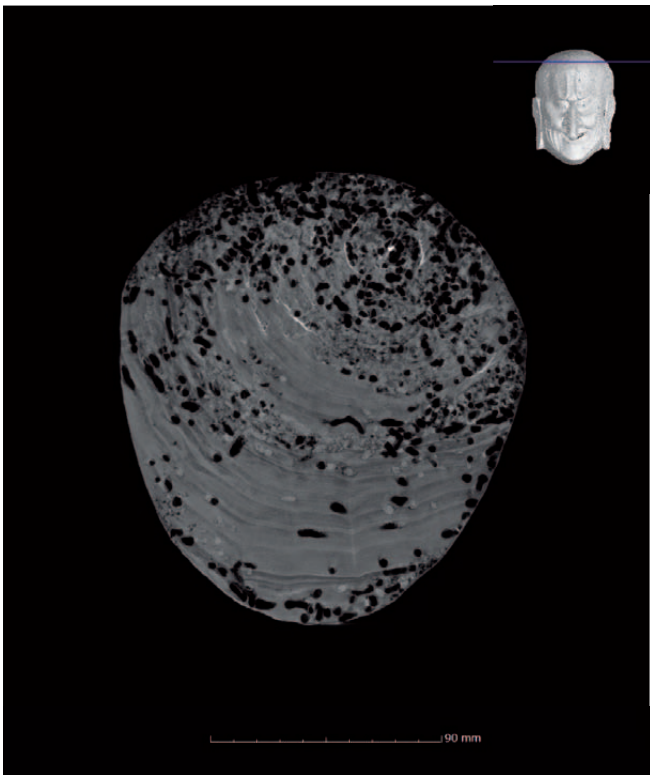


図 18-9　同　水平断面

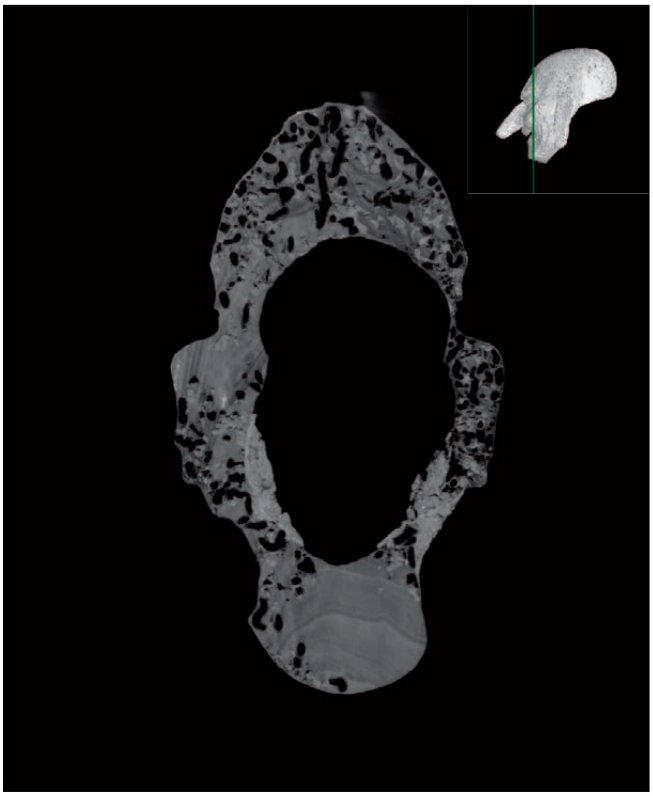


図 18-11　同　垂直正断面

図 19-1　伎楽面 酔胡従（未完成）　正面

図 19-3　同　右側面

図 19-2　同　左側面

図 19-5　同　背面

図 19-4　同　右斜側面

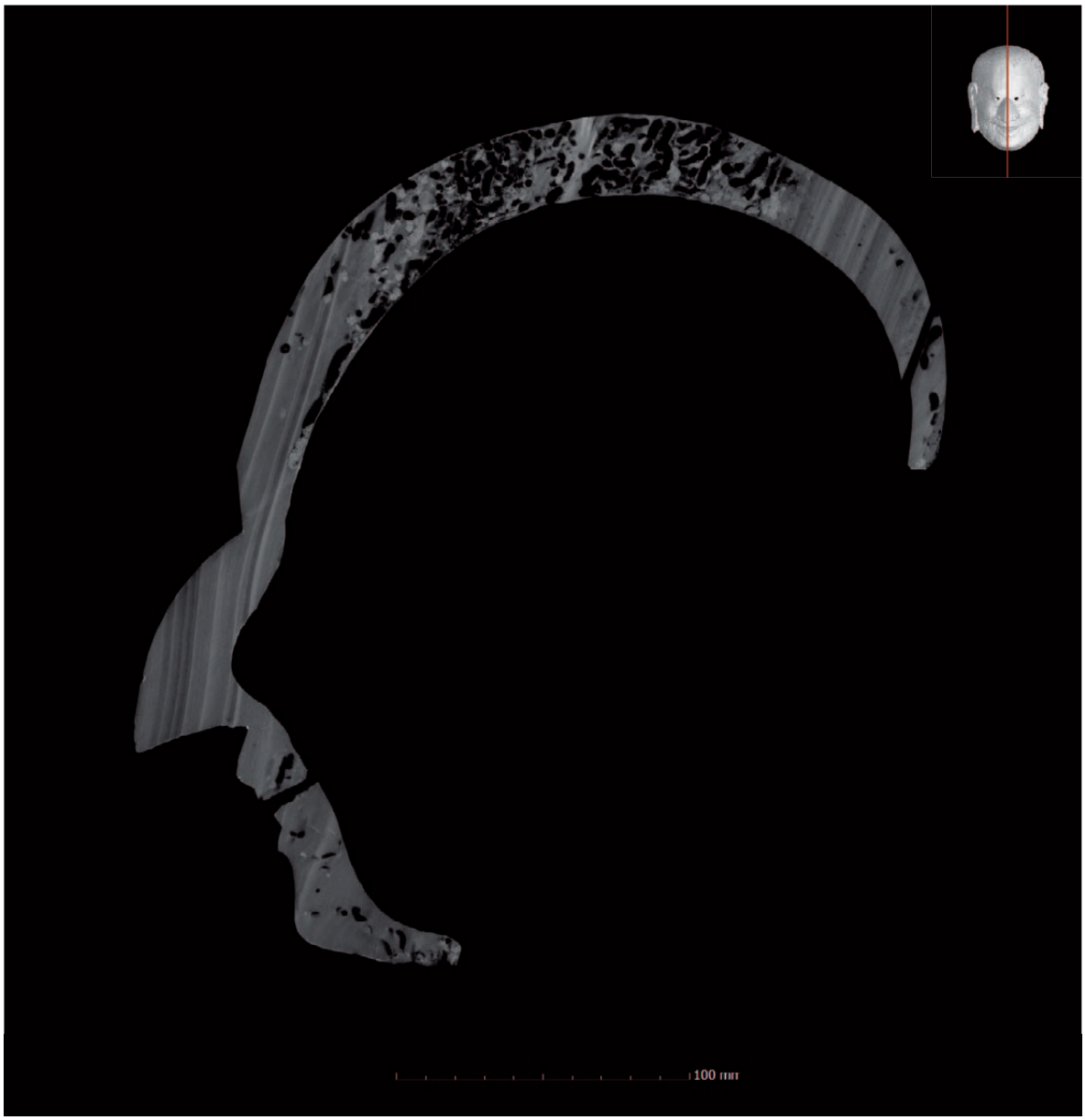


図 19-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 19-8　同

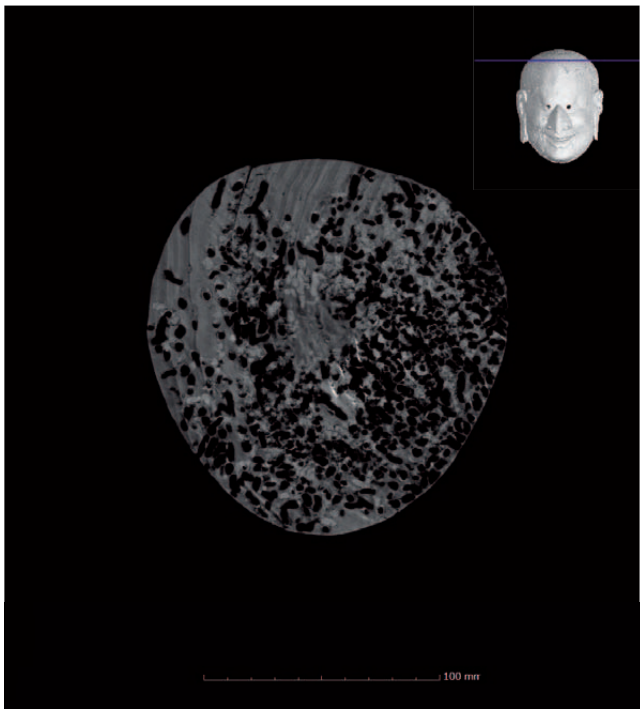


図 19-7　同　水平断面

図 19-10　同　垂直正断面

図 19-9　同

図 20-1　伎楽面 師子児　正面

図 20-3　同　右側面

図 20-2　同　左側面

図 20-5　同　背面

図 20-4　同　左斜側面

図 20-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

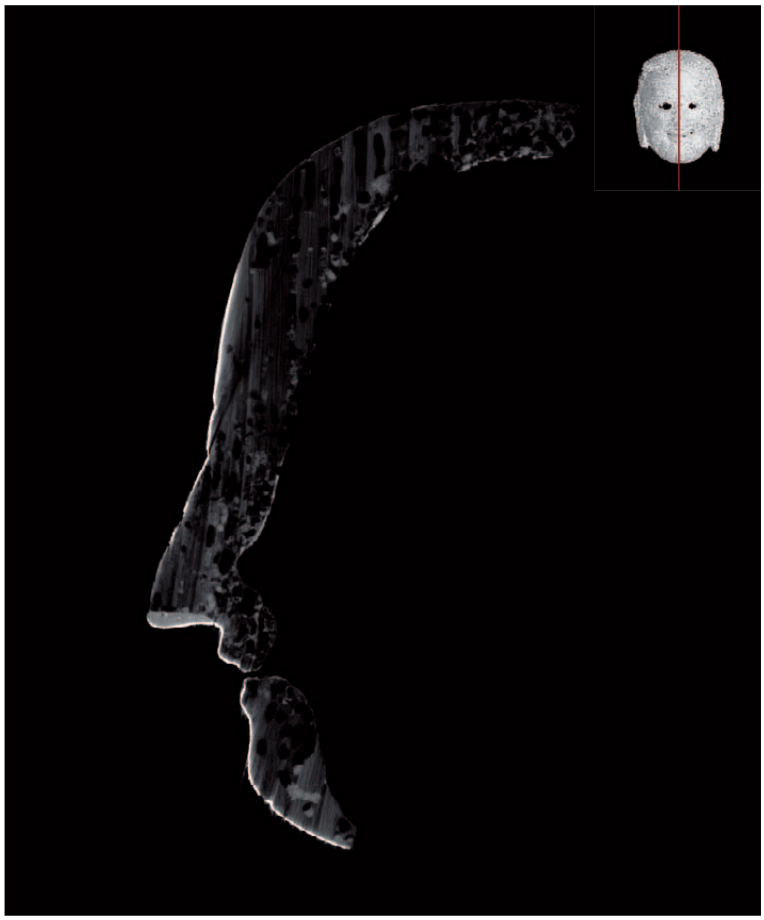


図 20-7　同

図 20-9　同

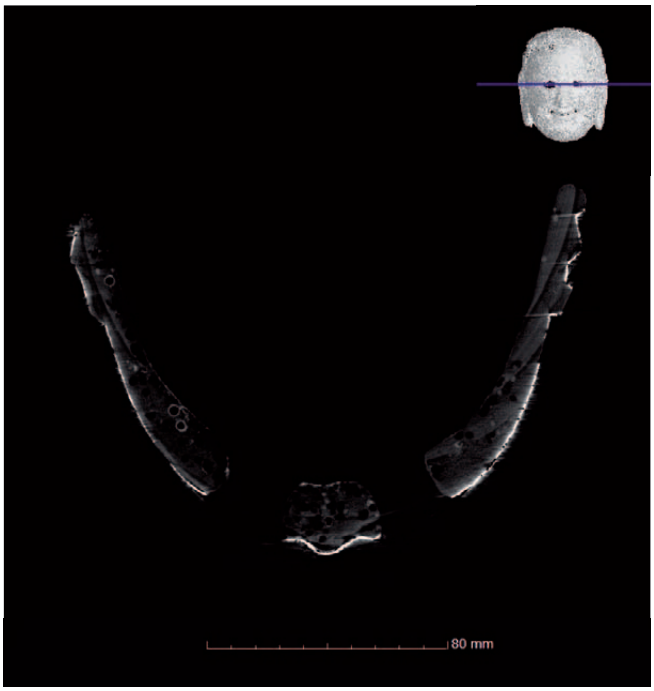


図 20-8　同　水平断面

図 20-11　同　頭頂部の金属釘

図 20-10　同

図 21-1　伎楽面 金剛　正面

図 21-3　同　右側面

図 21-2　同　左側面

図 21-5　同　背面

図 21-4　同　右斜側面

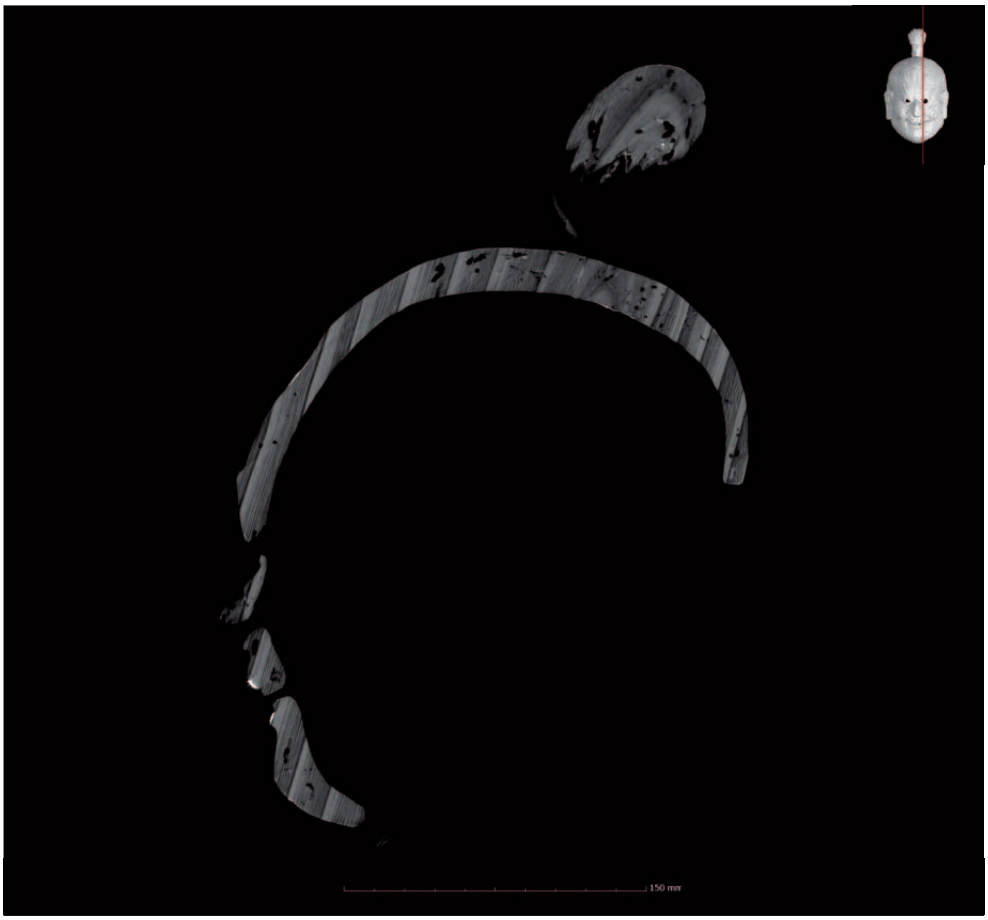


図 21-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 21-7　同

図 21-9　同

図 21-8　同　水平断面

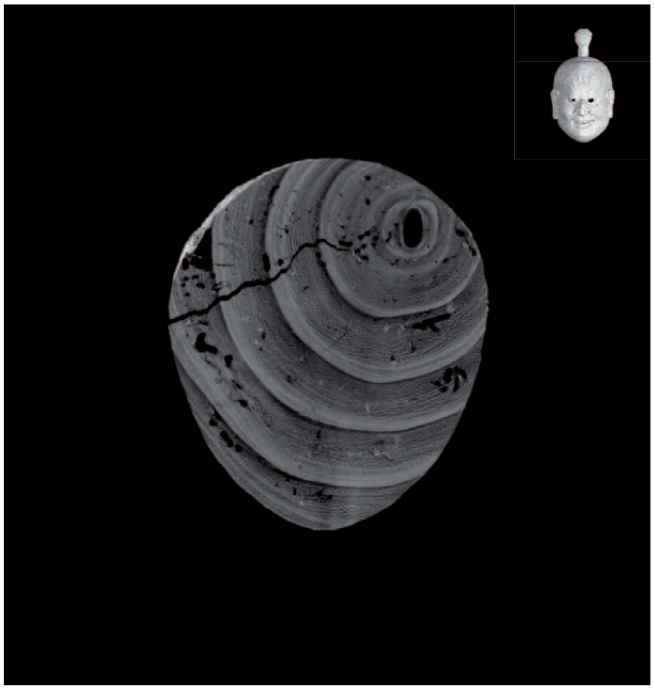


図 21-10　同

図 22-1　伎楽面 金剛　正面

図 22-3　同　右側面

図 22-2　同　左側面

図 22-5　同　背面

図 22-4　同　右斜側面

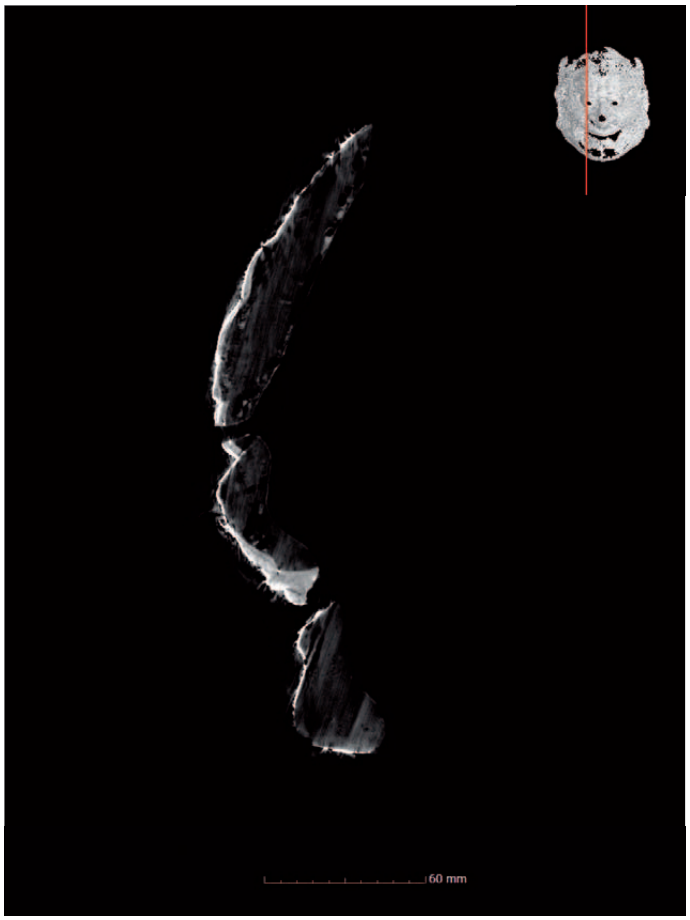


図 22-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 22-7　同

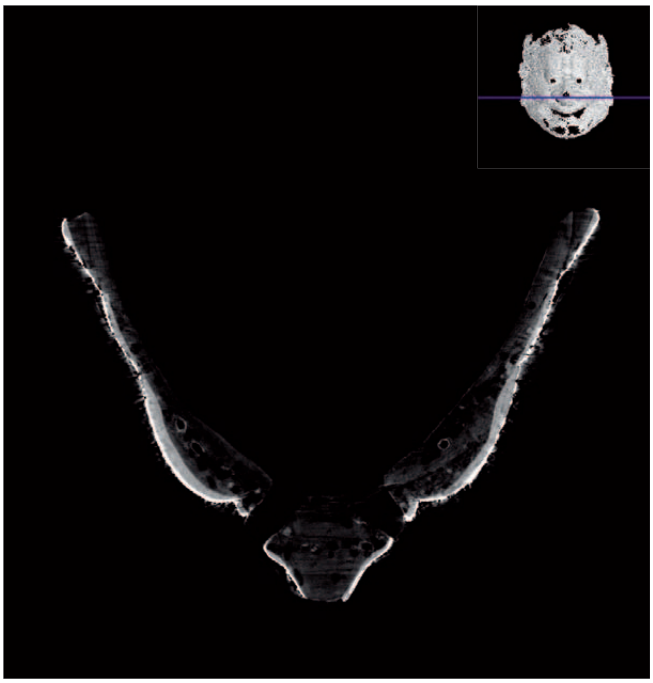


図 22-9　同

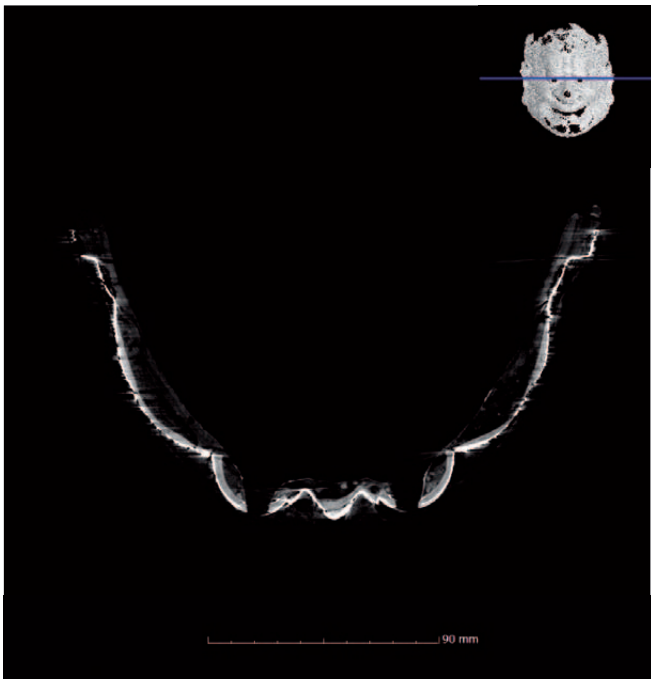


図 22-8　同　水平断面

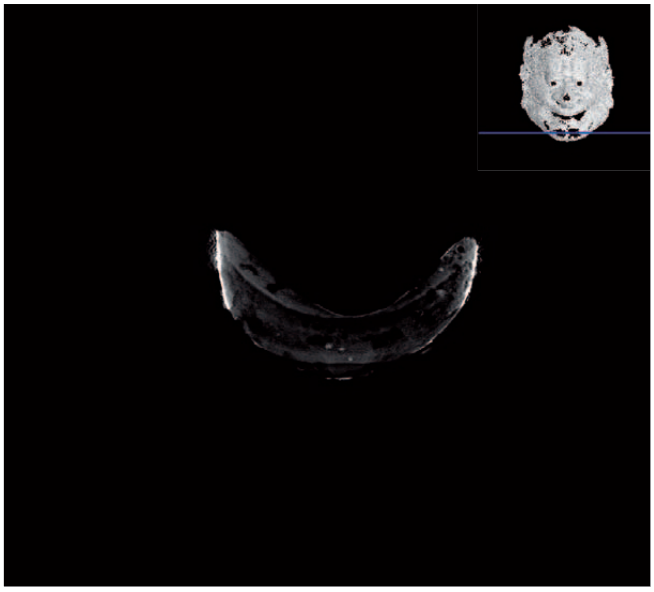


図 22-10　同

図 23-1　伎楽面 迦楼羅　正面

図 23-3　同　右側面

図 23-2　同　左側面

図 23-5　同　背面

図 23-4　同　右斜側面

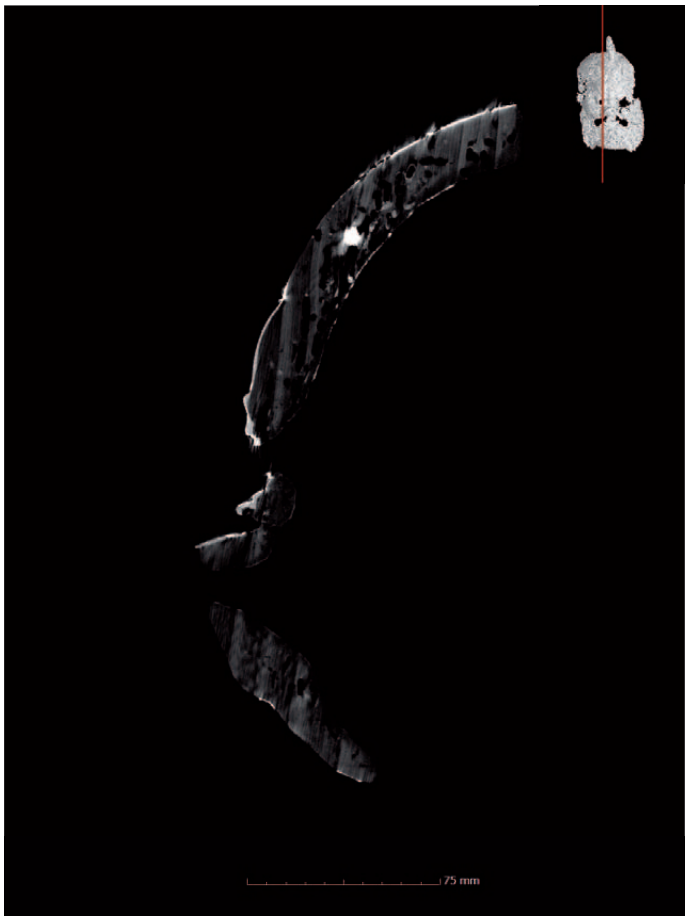


図 23-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 23-7　同

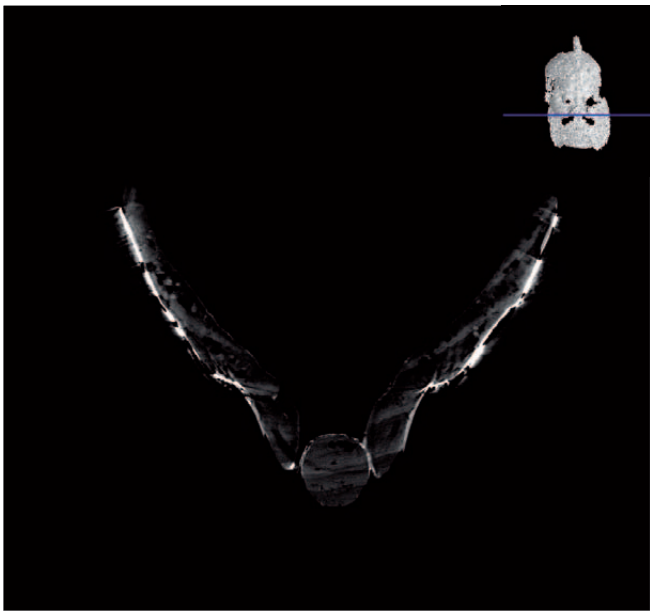


図 23-9　同

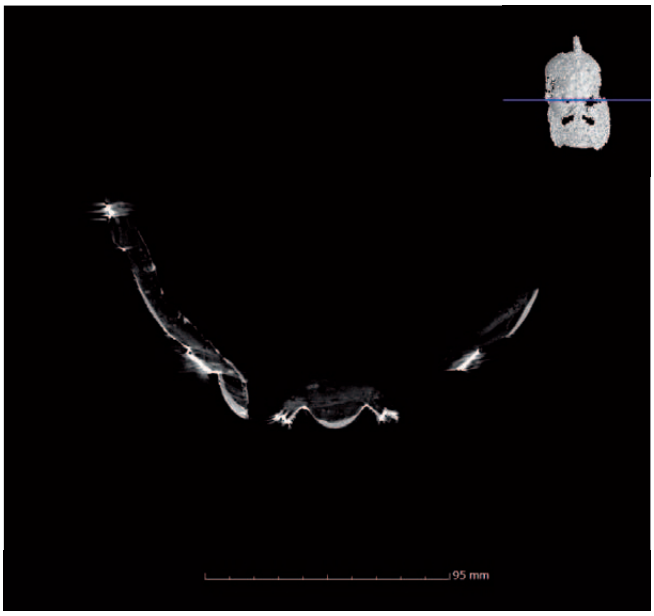


図 23-8　同　水平断面

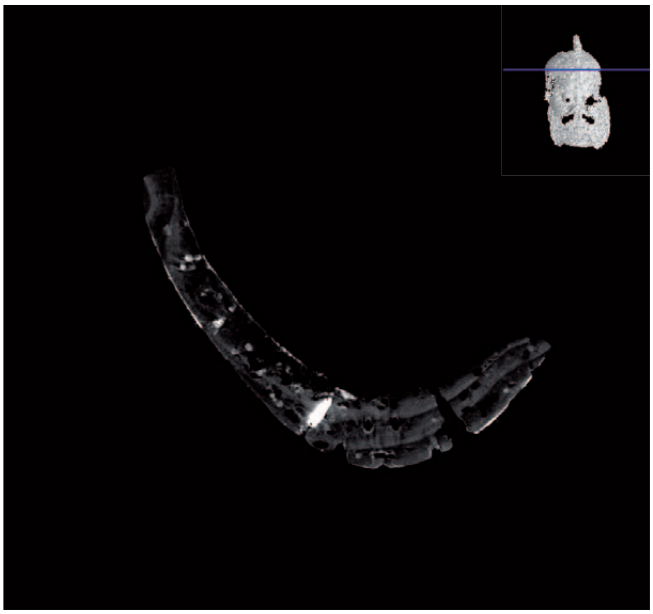


図 23-11　同　頭頂部の金属釘

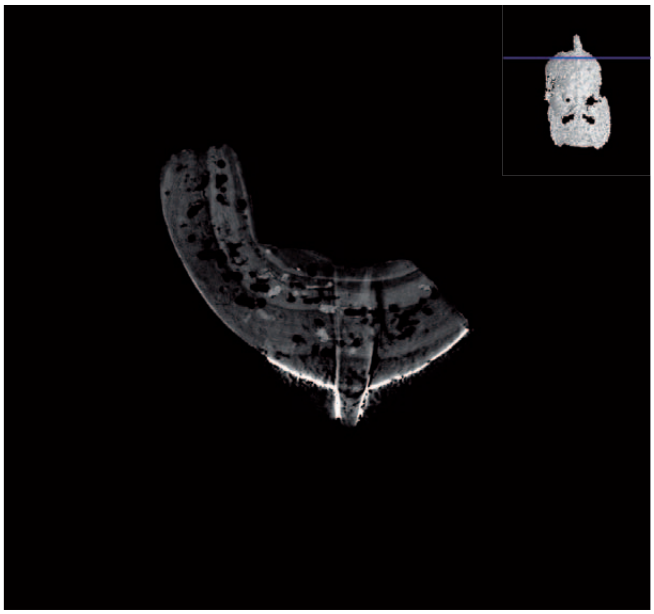


図 23-10　同

図 24-1　伎楽面 呉女　正面

図 24-3　同　右側面

図 24-2　同　左側面

図 24-5　同　背面

図 24-4　同　右斜側面

図 24-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 24-7　同

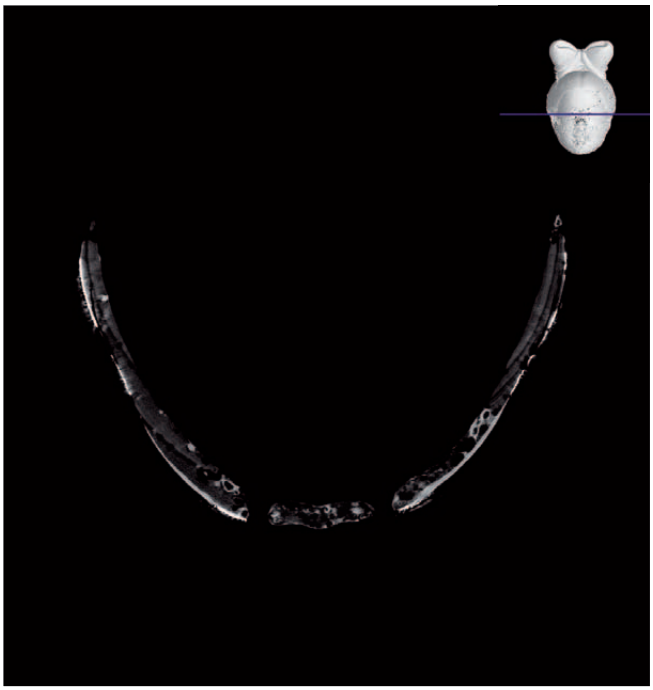


図 24-9　同

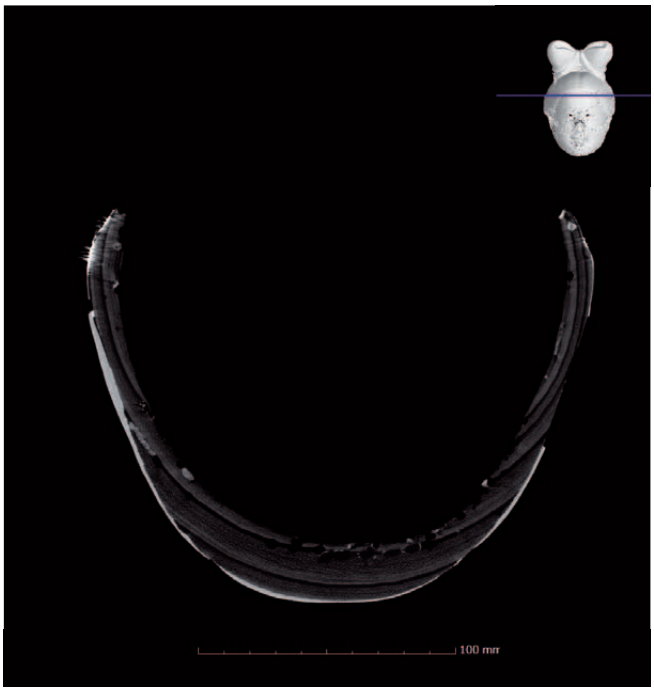


図 24-8　同　水平断面

図 24-10　同

図 24-12　同　頭頂部の金属釘

図 24-11　同　垂直正断面　頭頂部の金属釘

図 24-14　同

図 24-13　同

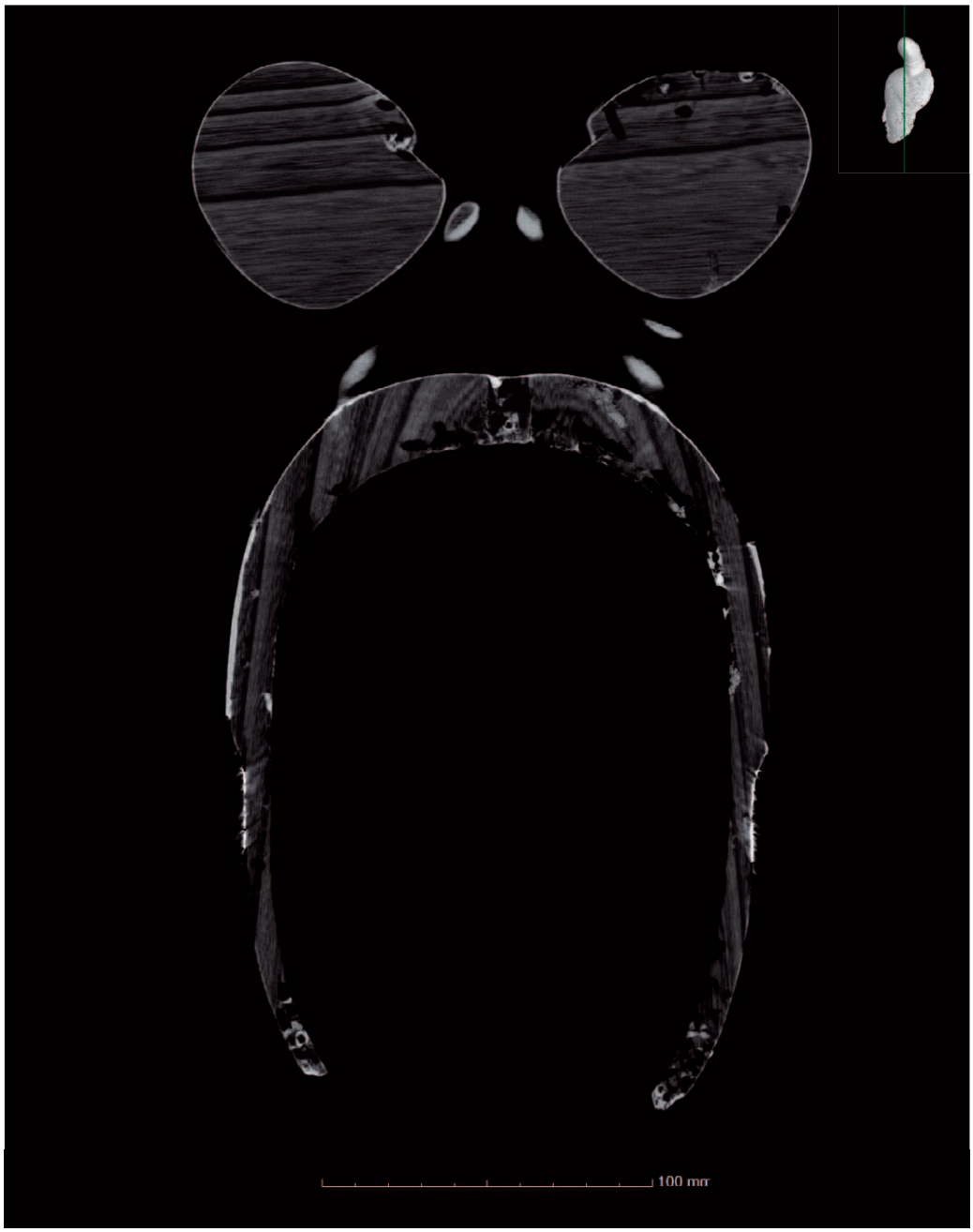


図 24-15　同　頭頂部の枘穴

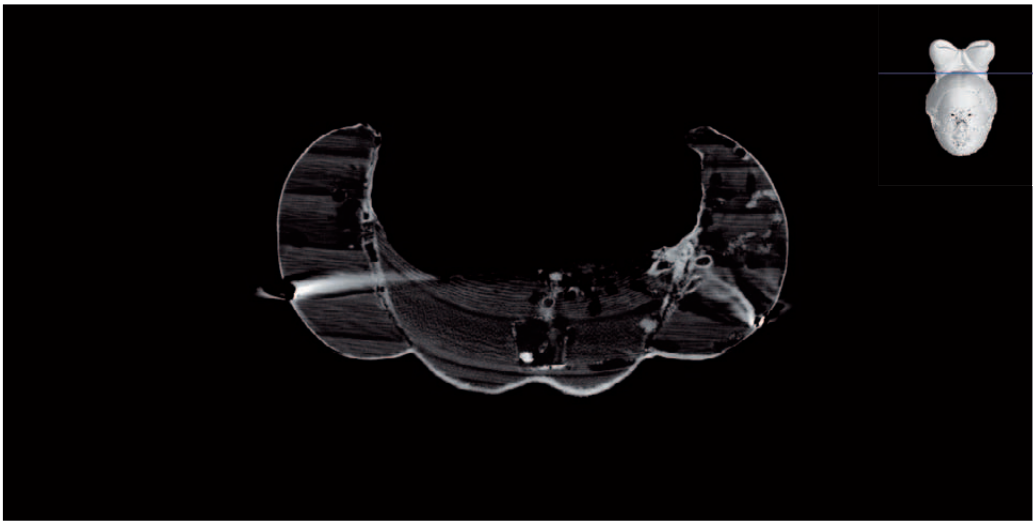


図 24-16　同

図 25-1　伎楽面 力士　正面

図 25-3　同　右側面

図 25-2　同　左側面

図 25-5　同　背面

図 25-4　同　右斜側面

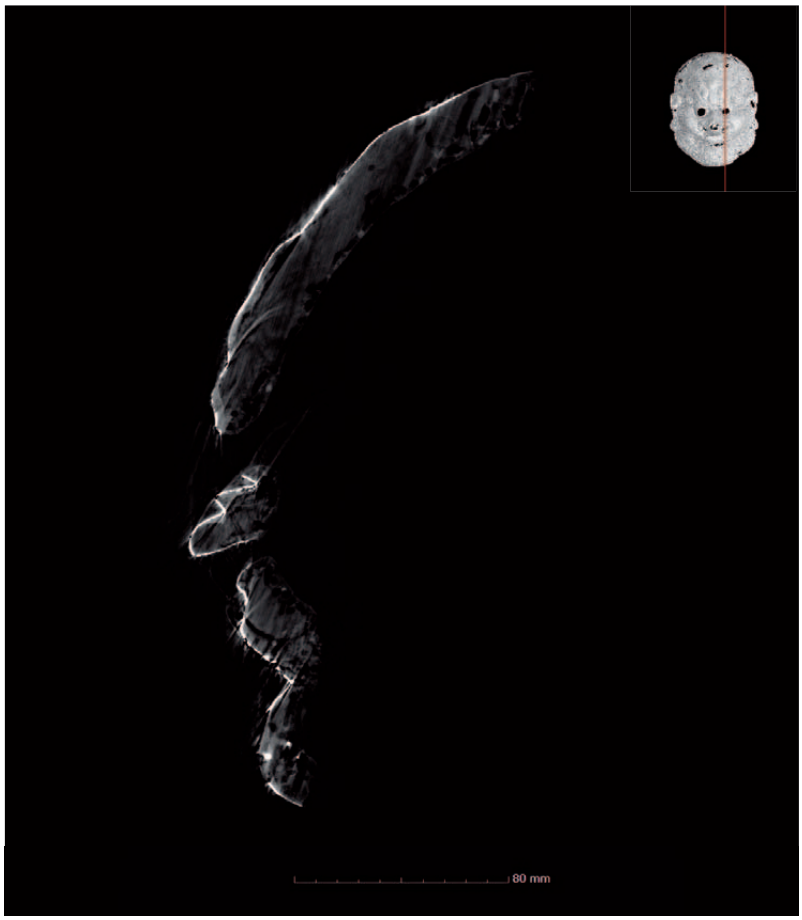


図 25-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 25-7　同

図 25-9　同

図 25-8　同　水平断面

図 25-10　同

図 25-11　同　頭頂部の金属釘

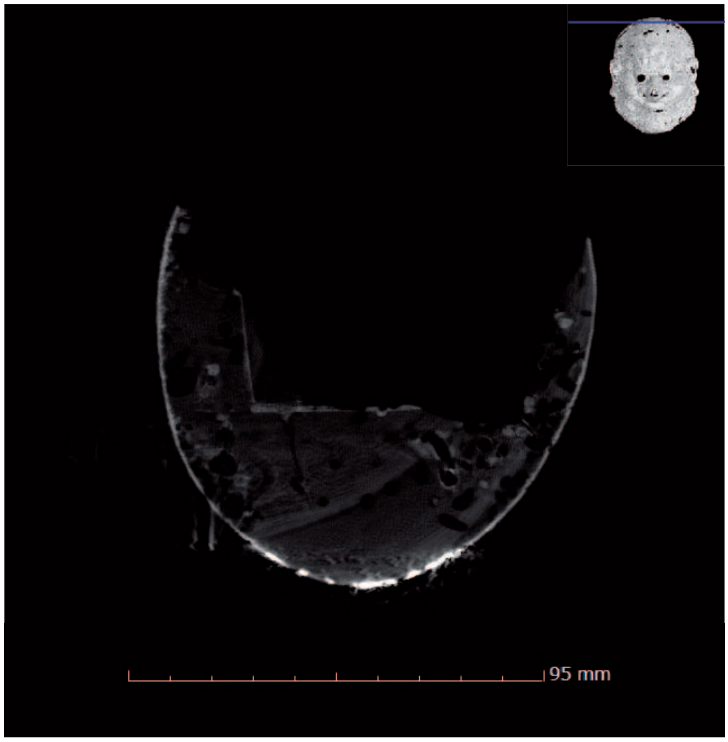


図 25-12　同　頭頂部の別材箇所

図 26-1　伎楽面 酔胡王　正面

図 26-3　同　右側面

図 26-2　同　左側面

図 26-5　同　背面

図 26-4　同　右斜側面

図 26-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

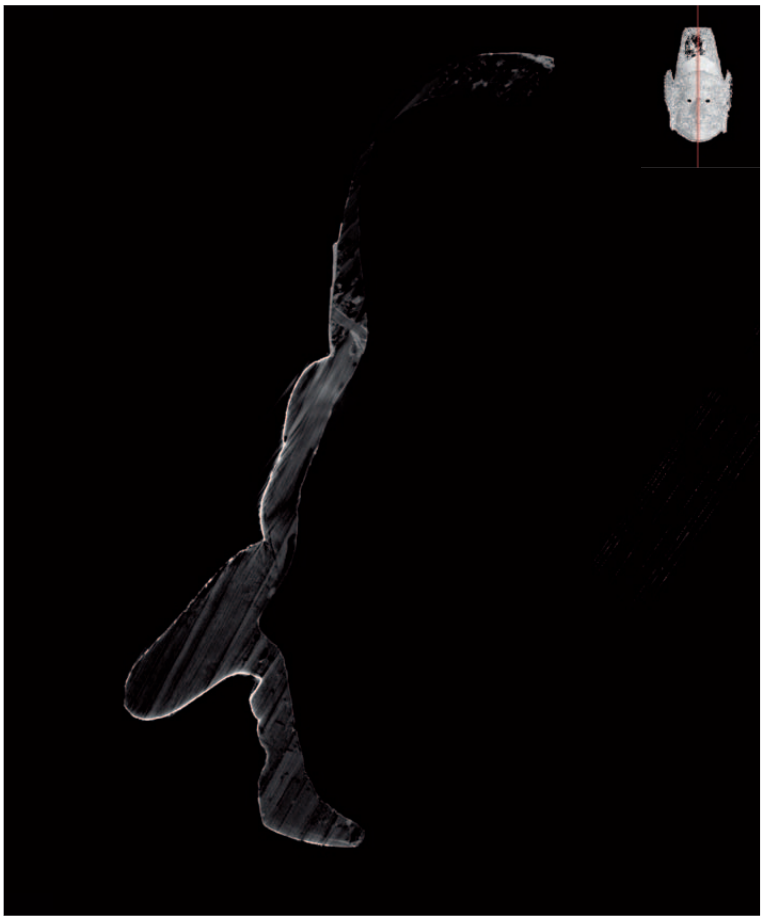


図 26-7　同

図 26-9　同

図 26-8　同　水平断面

図 26-10　同

図 26-11　同　垂直正断面　冠帽前面材

図 26-12　同　後頭部

図 26-13　同　水平断面　冠帽前面材の接合面

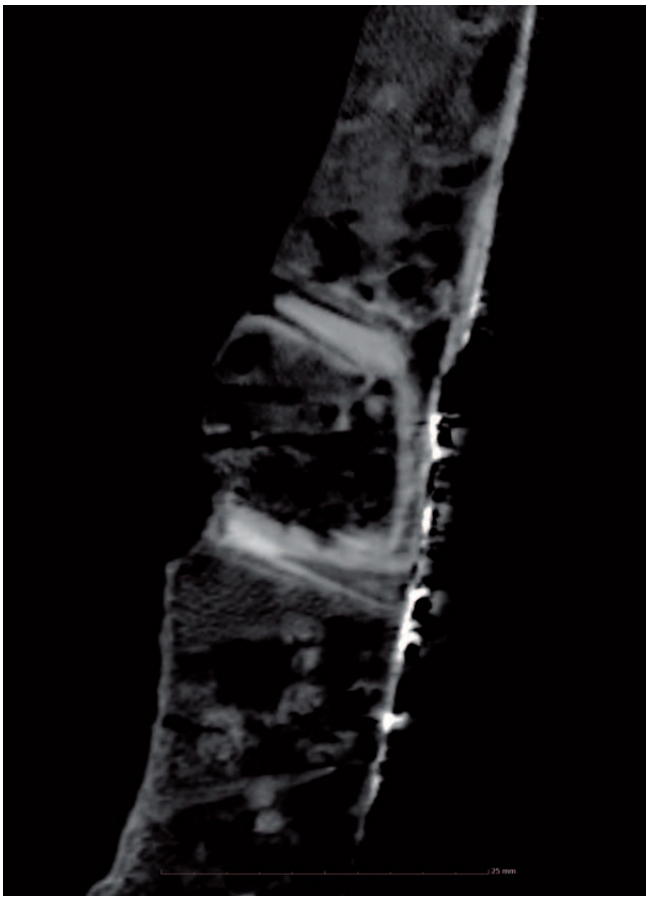


図 26-14　同　冠帽左方の鎹跡

図 27-1　伎楽面 酔胡従　正面

図 27-3　同　右側面

図 27-2　同　左側面

図 27-5　同　背面

図 27-4　同　左斜側面

図 27-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 27-7　同

図 27-9　同

図 27-8　同　水平断面

図 27-10　同

図 28-1　伎楽面 酔胡従　正面

図 28-3　同　右側面

図 28-2　同　左側面

図 28-5　同　背面

図 28-4　同　右斜側面

図 28-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

図 28-7　同

図 28-9　同

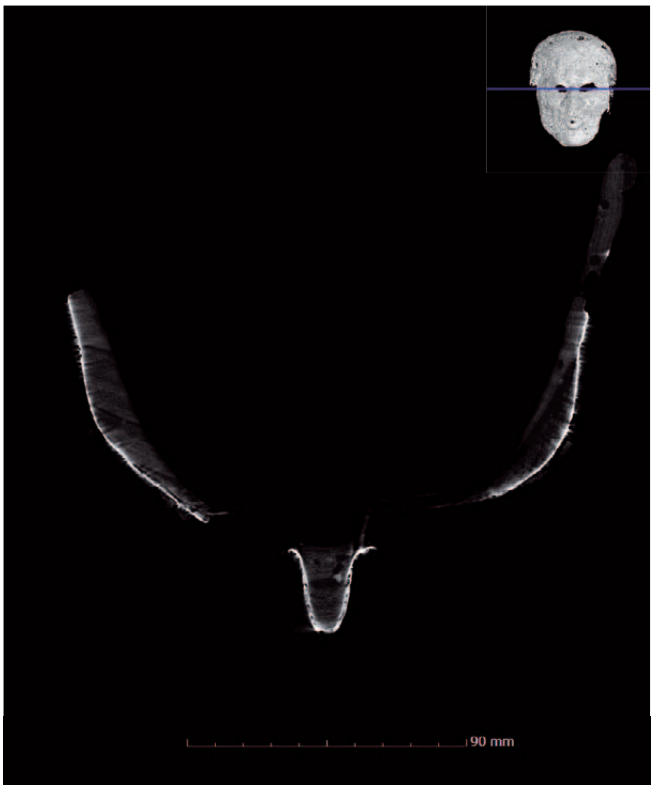


図 28-8　同　水平断面

図 28-10　同

図 29-1　伎楽面 力士　正面

図 29-3　同　右側面

図 29-2　同　左側面

図 29-5　同　背面

図 29-4　同　右斜側面

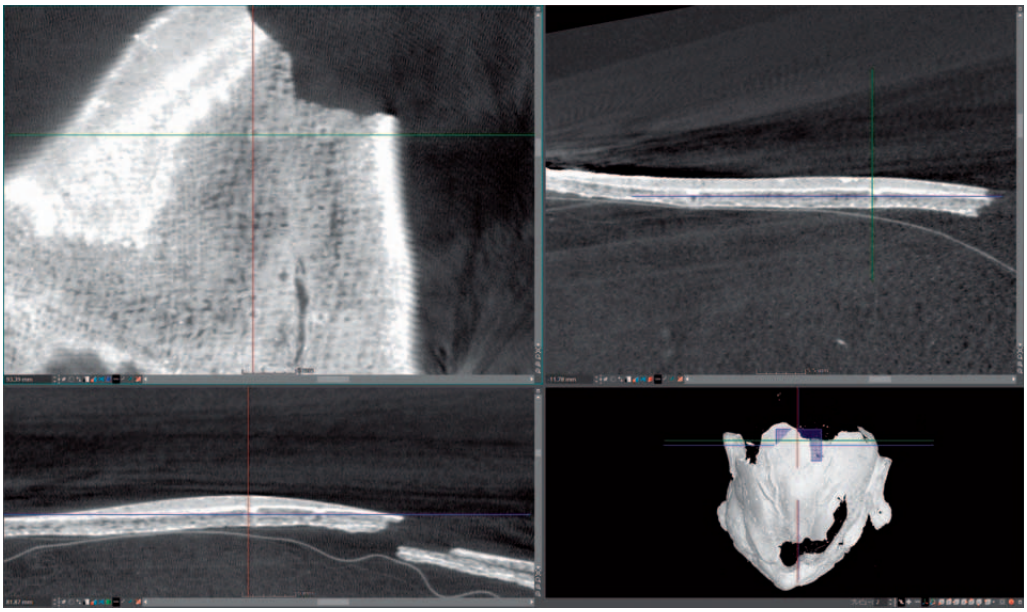


図 29-6　同　X 線断層（CT）画像　麻布①（頭頂部）

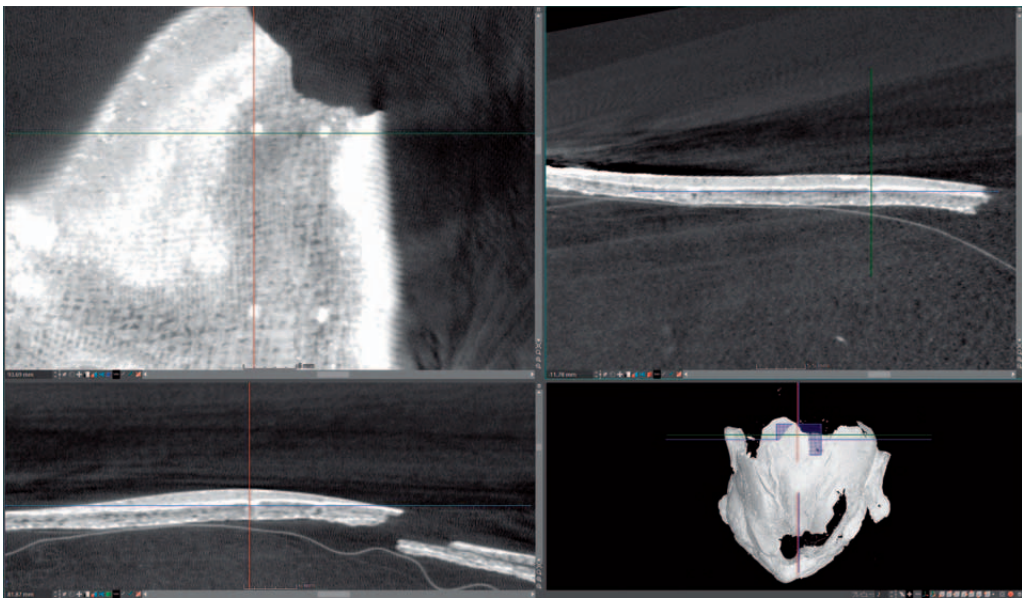


図 29-7　同　麻布②（頭頂部）

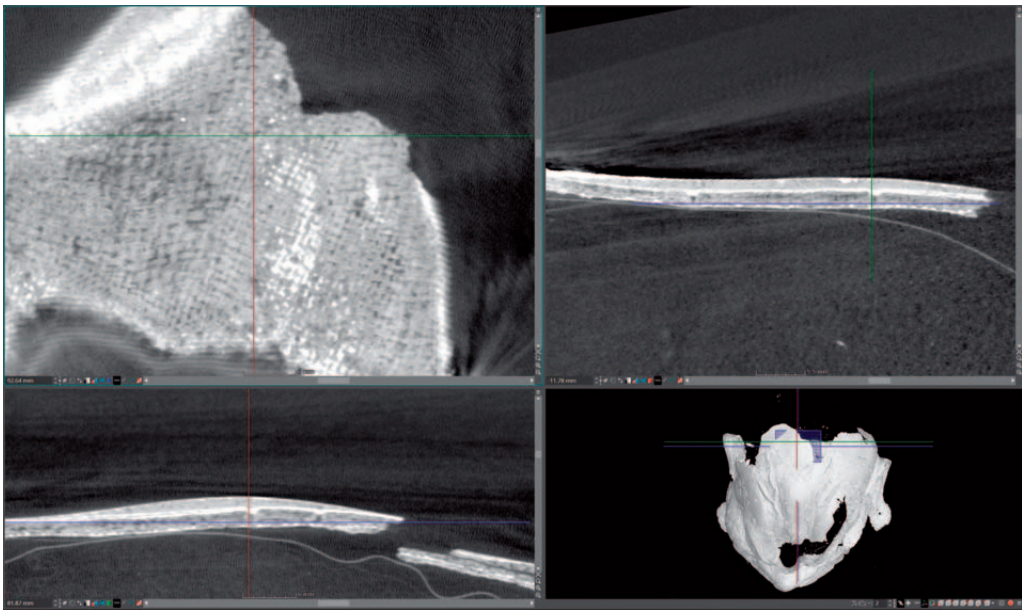


図 29-8　同　麻布③（頭頂部）

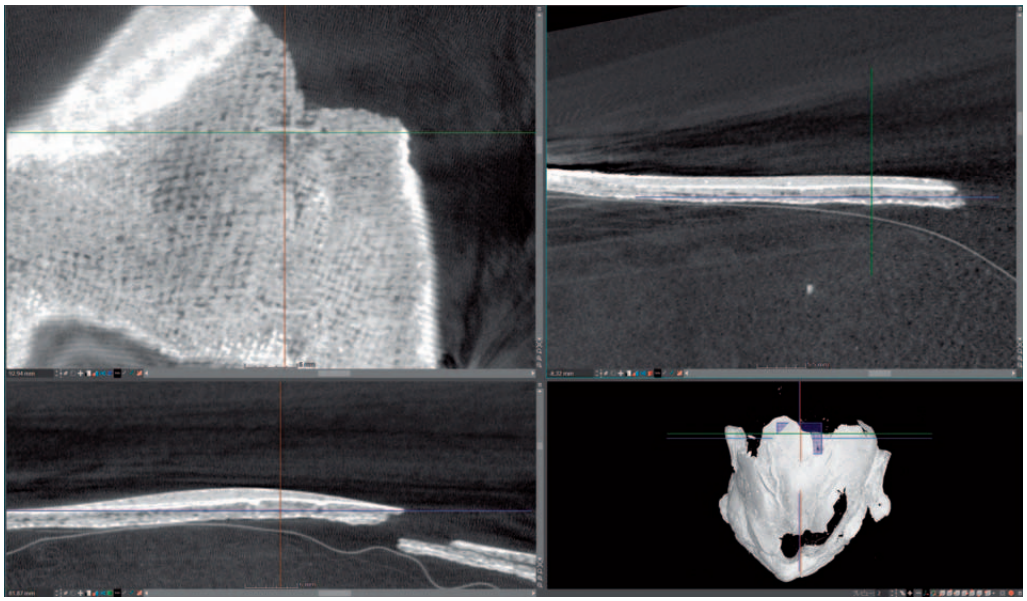


図 29-9　同　縫合糸（頭頂部）

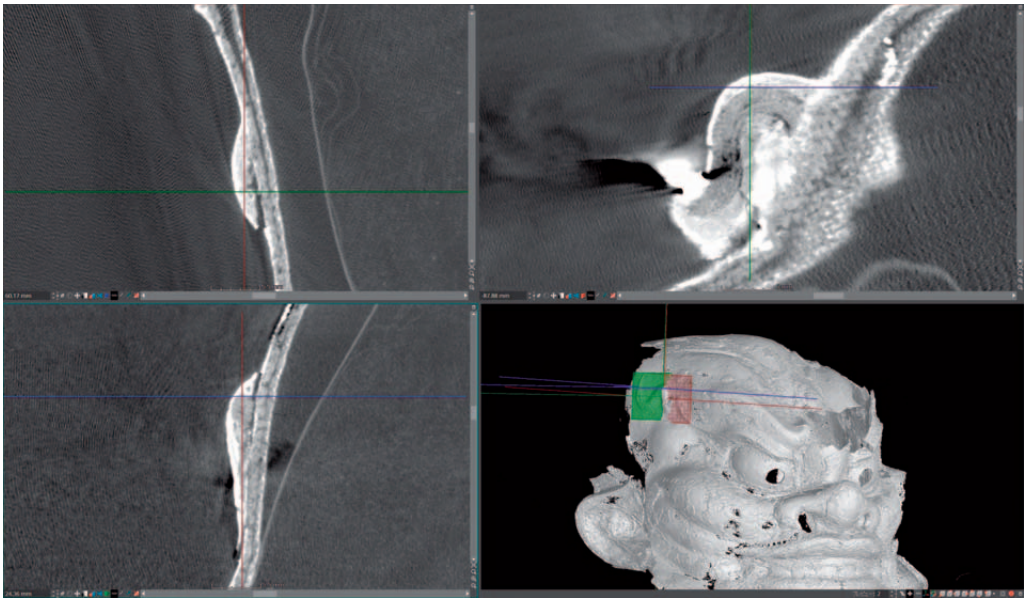


図 29-10　同　血管（右側頭部）

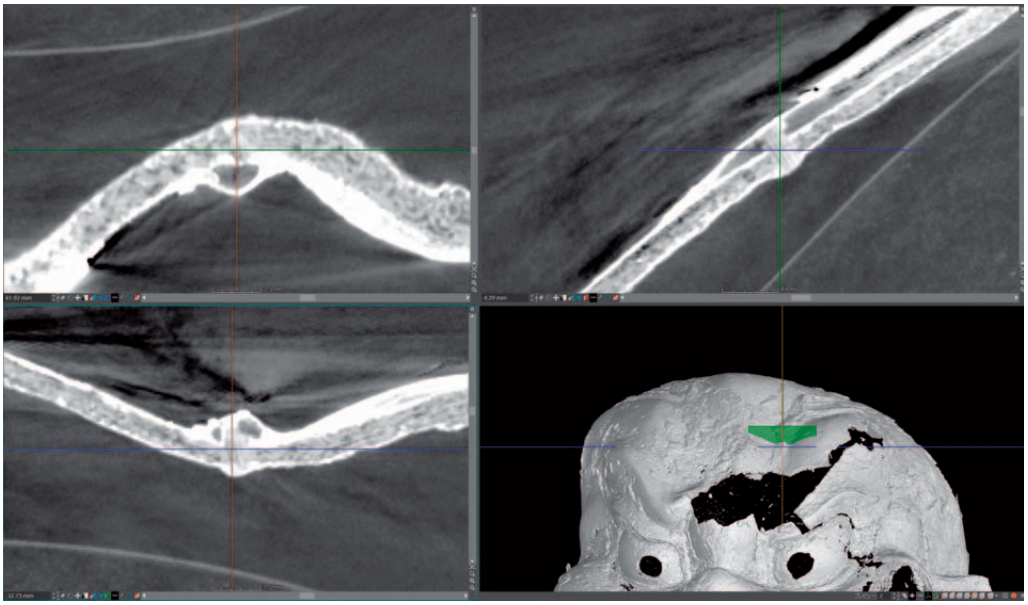


図 29-11　同　血管（額）

図 30-1　伎楽面 波羅門　正面

図 30-3　同　右側面

図 30-2　同　左側面

図 30-5　同　背面

図 30-4　同　右斜側面

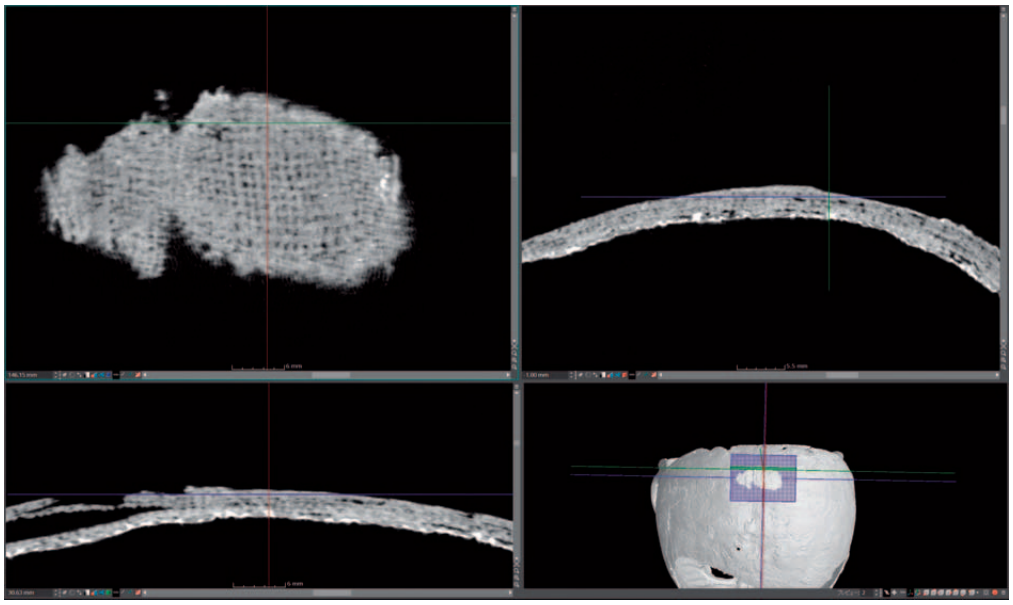


図 30-6　同　X 線断層（CT）画像　麻布①（頭頂部）

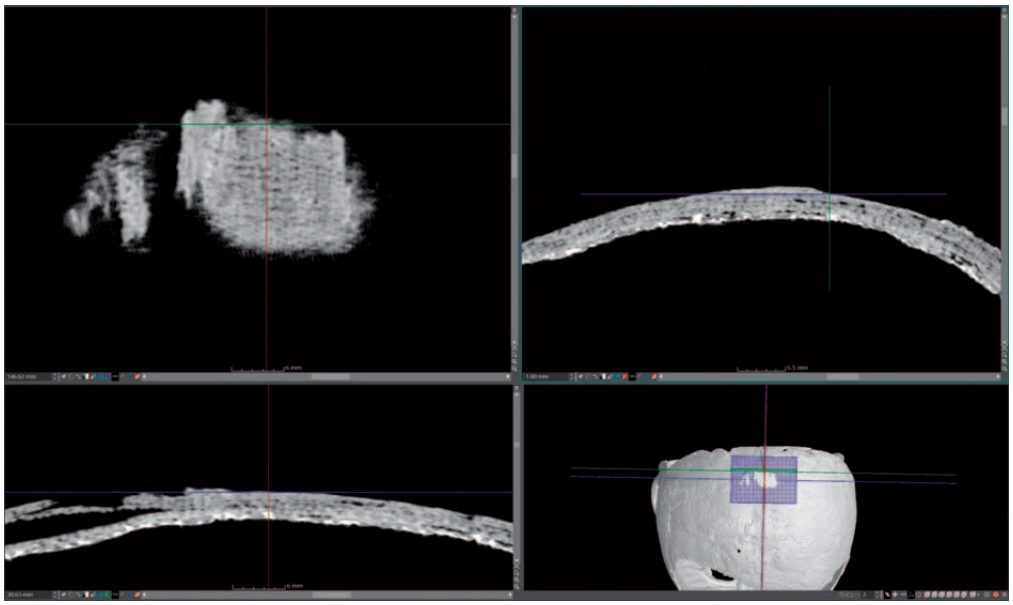


図 30-7　同　麻布②（頭頂部）

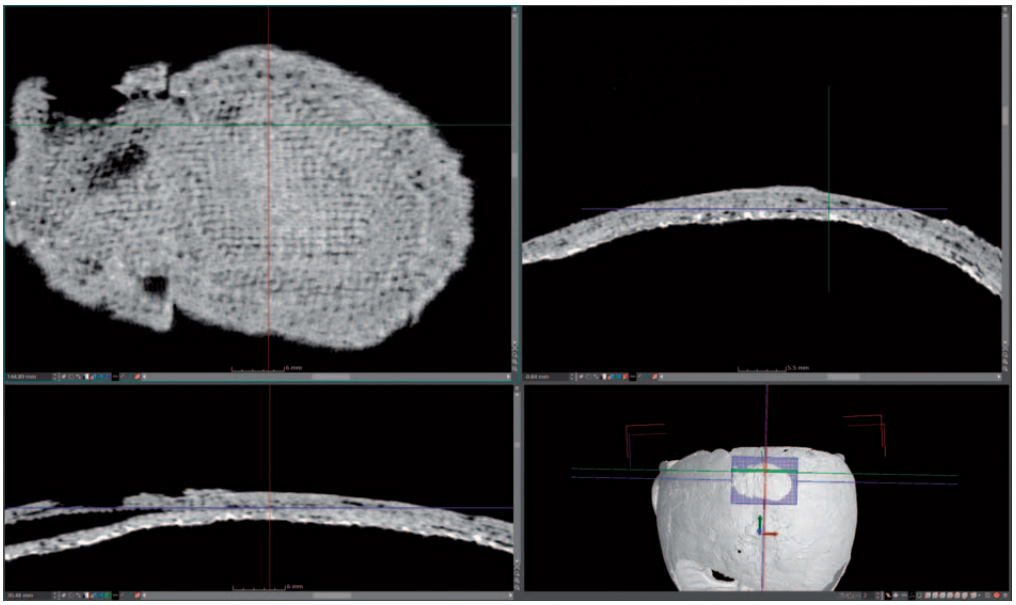


図 30-8　同　麻布③（頭頂部）

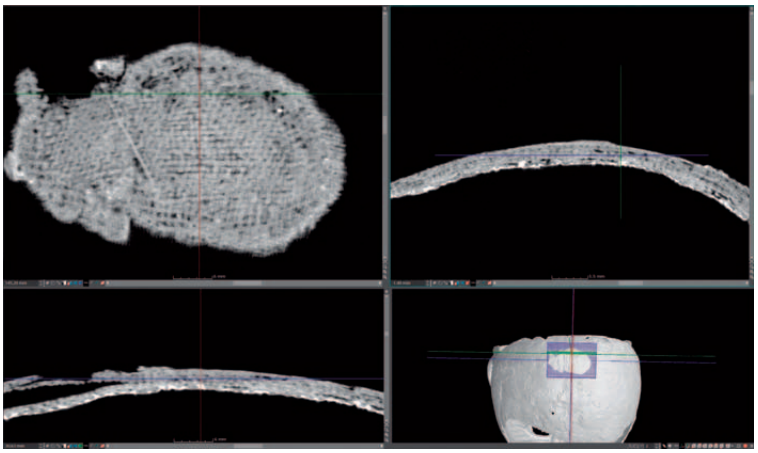


図 30-9　同　縫合糸（頭頂部）

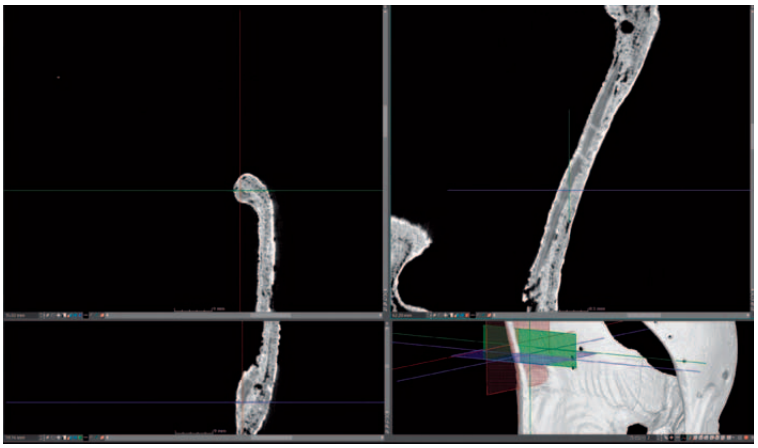


図 30-10　同　蔓性植物（左耳辺）

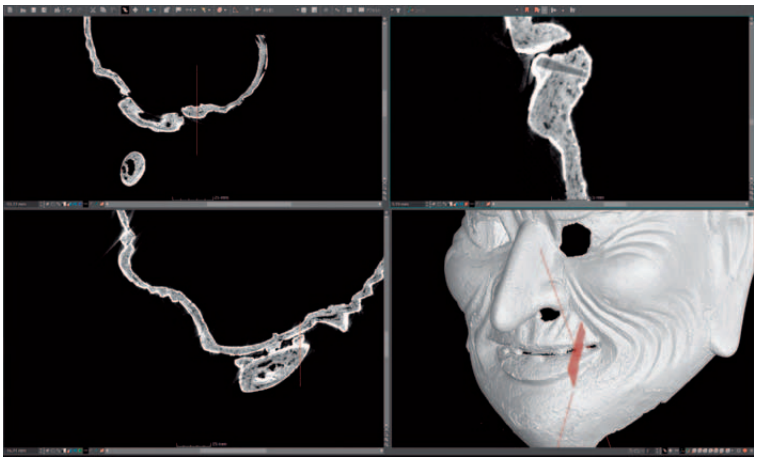


図 30-11　同　歯（左下）

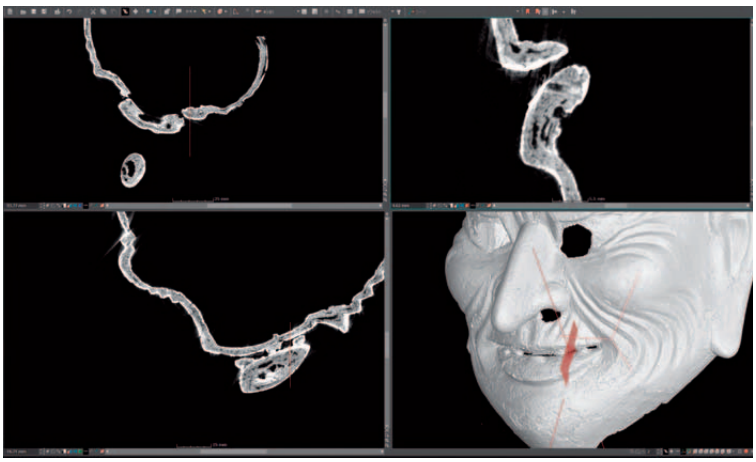


図 30-12　同　歯の取付け修正痕（左下）

図 31-1　伎楽面 酔胡従　正面

図 31-3　同　右側面

図 31-2　同　左側面

図 31-5　同　背面

図 31-4　同　右斜側面

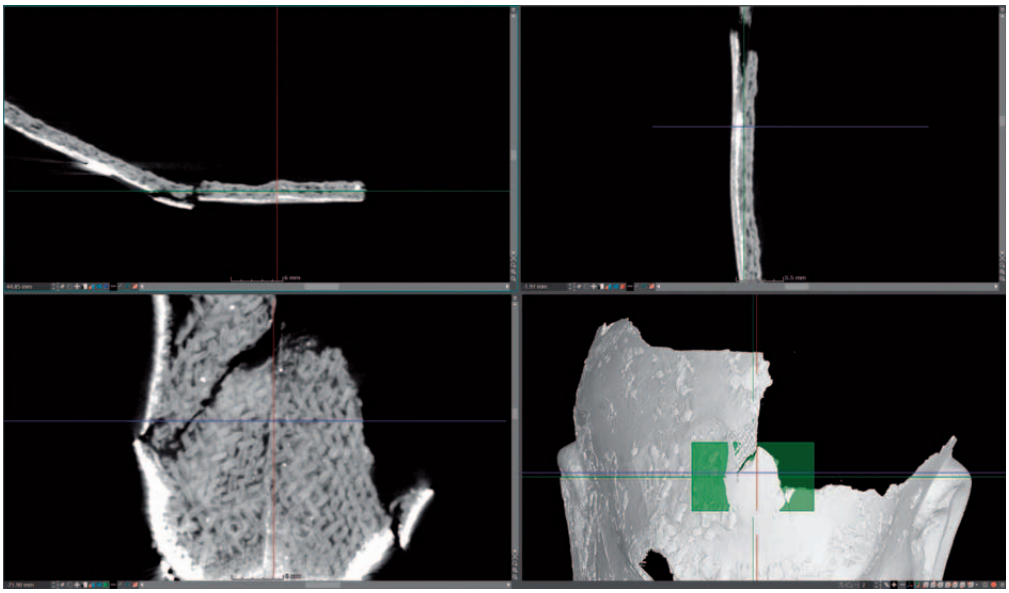


図 31-6　同　X 線断層（CT）画像　麻布①（額）

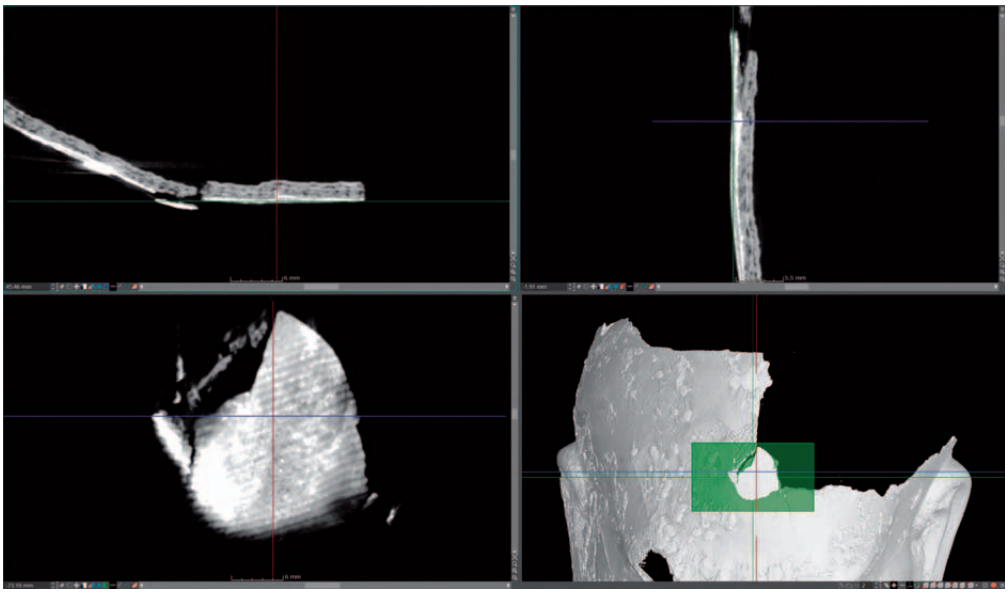


図 31-7　同　麻布②（額）

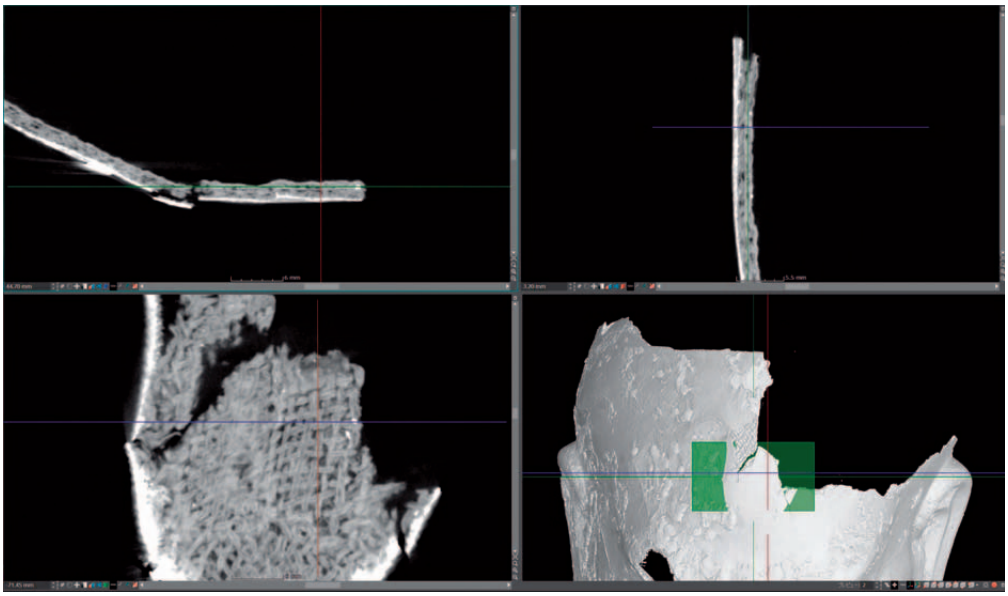


図 31-8　同　麻布③（額）

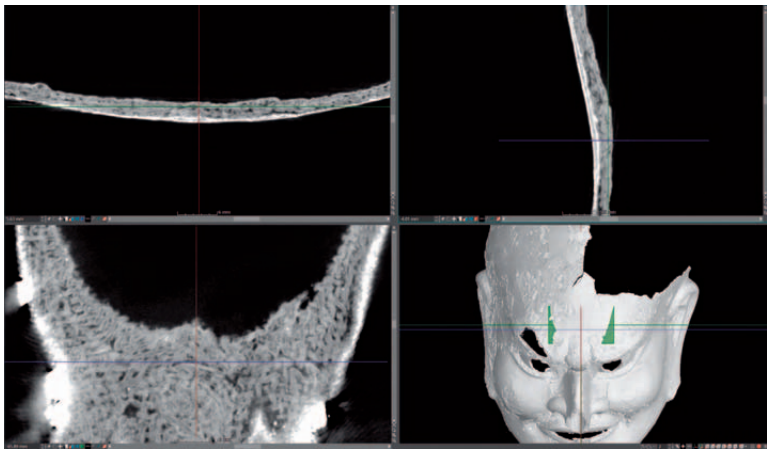


図 31-9　同　縫合糸（額）

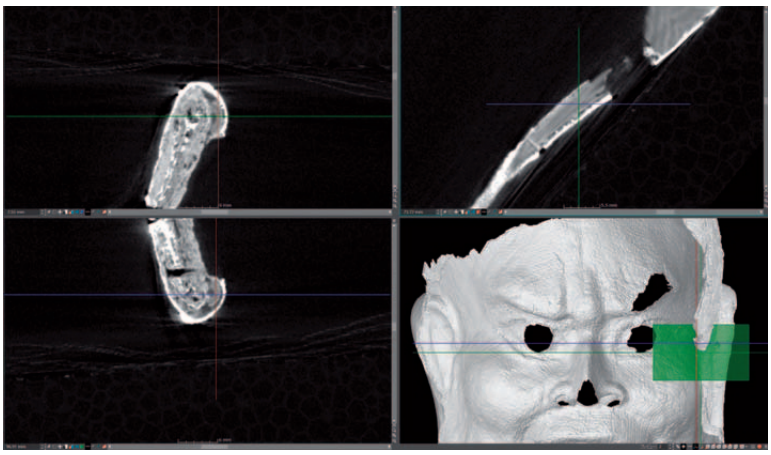


図 31-10　同　蔓性植物（右耳辺）

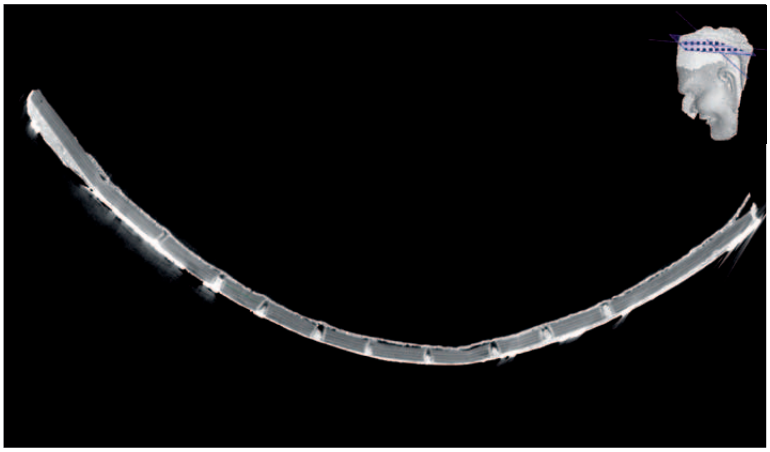


図 31-11　同　鉢周りの板（下縁の固定用孔）

図 31-12　同　カラー画像　鉢周りの板を固定する麻紐

図補 1-1　舞楽面　正面

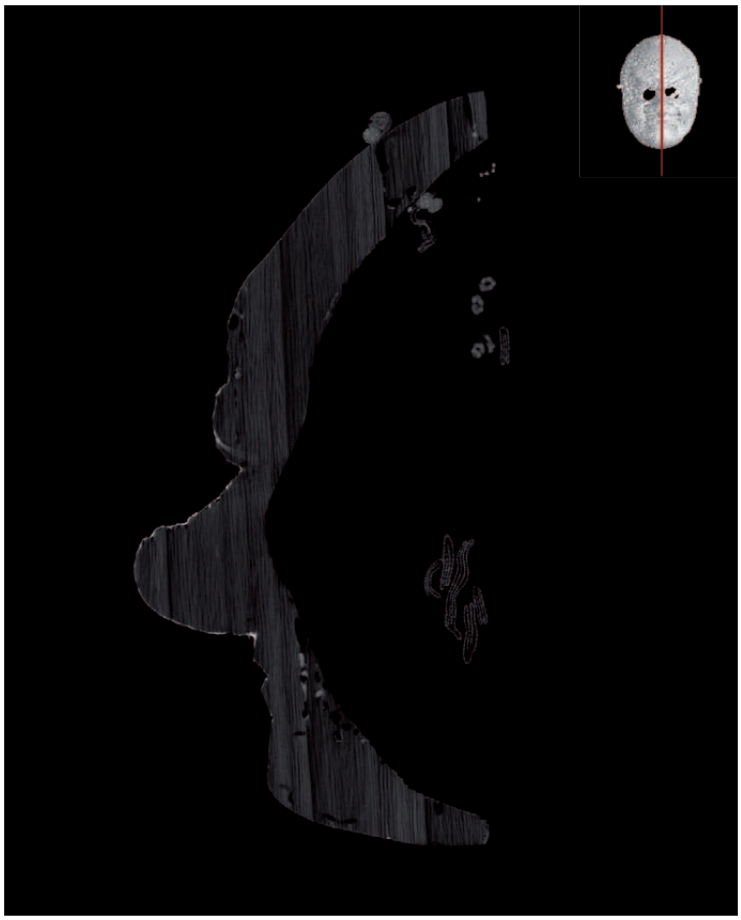
図補 1-3　同　右側面

図補 1-2　同　左側面

図補 1-5　同　背面

図補 1-4　同　左斜側面

図補 1-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面



図補 1-7　同

図補 1-8　同　水平断面

図補 1-9　同

図補 2-1　鬼面　正面

図補 2-3　同

図補 2-2　同

図補 2-5　同　裏面

図補 2-4　同　各部

図補 2-6　同　X 線断層（CT）画像　垂直側断面

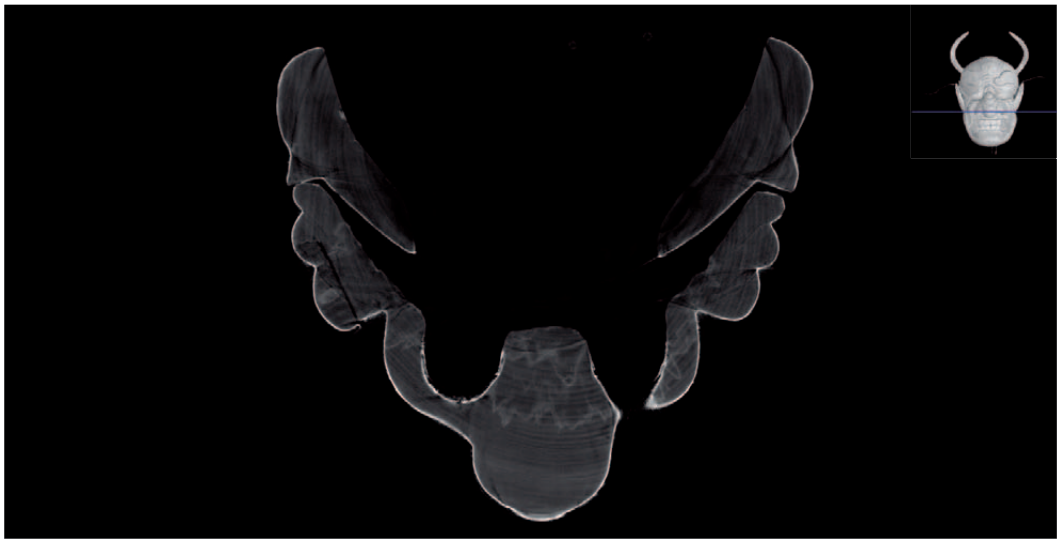
図補 2-7　同

図補 2-8　同　垂直正断面

図補 2-9　同

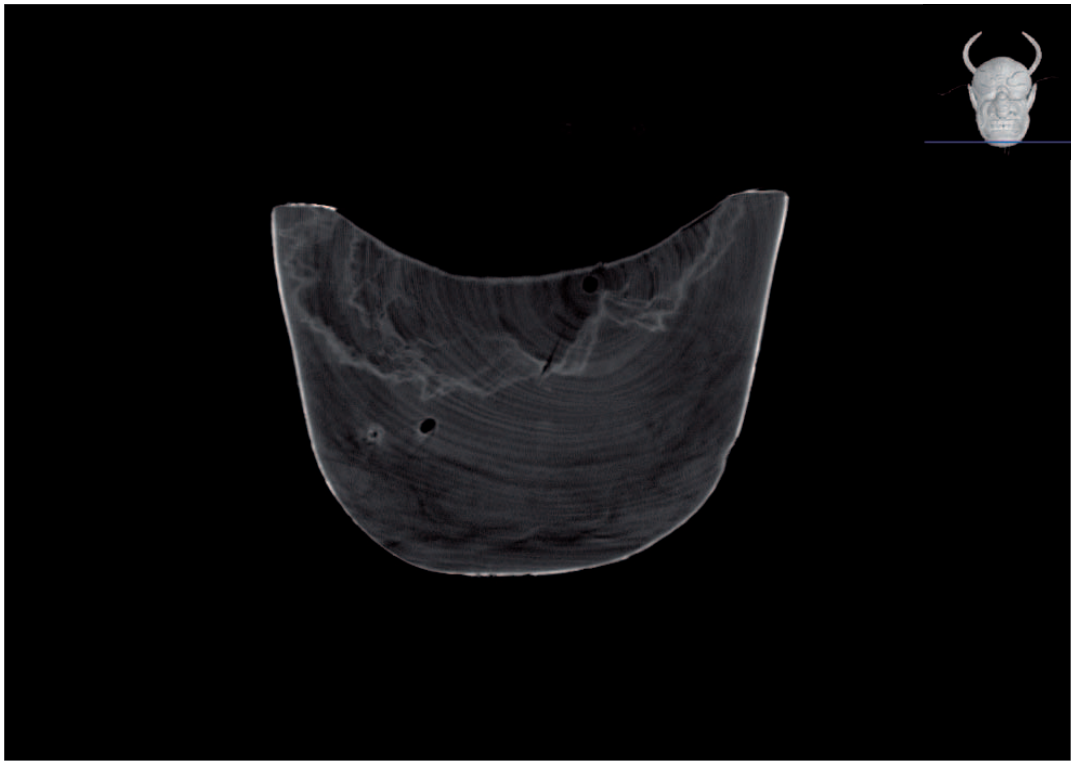
図補 2-10　同　水平断面

図補 2-11　同

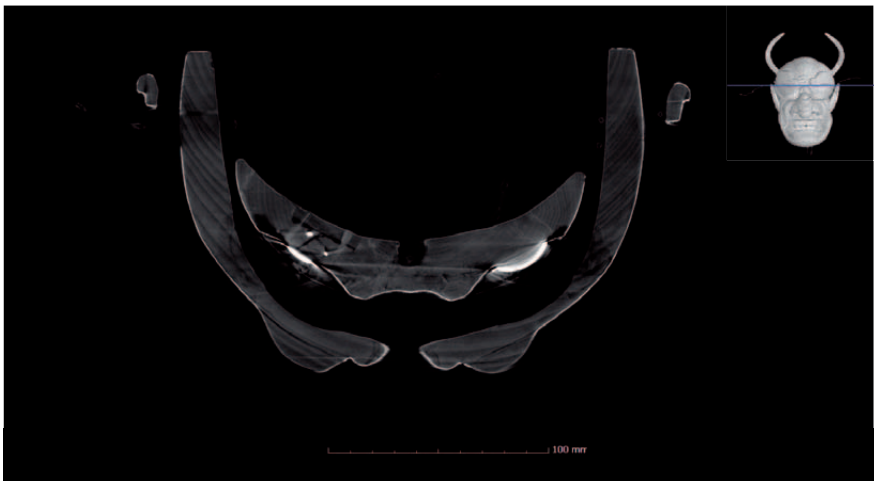


図補 2-12　同

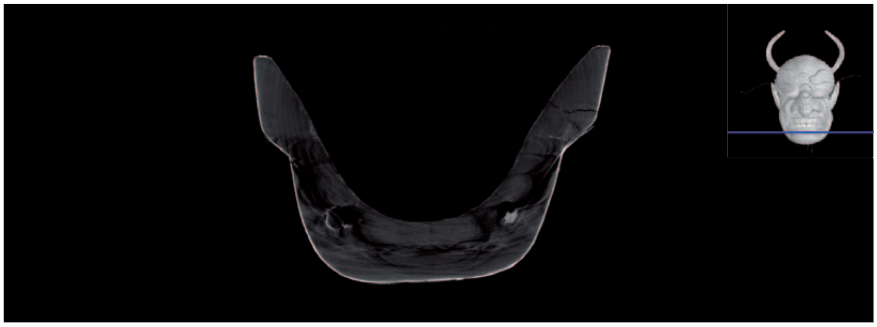
図補 2-13　同



図補 2-14　同



図補 2-15　同　右目裏面の埋木



図補 2-16　同　下牙枘穴の修正

図補 2-17　同　使用される金属板と金属釘

法隆寺献納宝物「伎楽面」のX線断層（CT）調査

浅見龍介

法隆寺献納宝物の特別調査は、昭和五十四年（一九七九）度から予算化されて以来、原則として毎年行なってきた。同宝物は、正倉院宝物より古い時代の作品が多く、保存状態を良好に保つため移動を最小限に抑える必要があり、貸出し、特別観覧は厳しく制限してきた。しかし、調査研究の成果は広く共有されるべきということで特別調査が企画された。調査は国立博物館および文化庁の研究員、調査官とそのOB等によって行なわれてきた。

昭和五十四年に行なわれた伎楽面の調査ではX線撮影、蛍光X線分析、赤外線撮影、実体顕微鏡による顔料、漆質等の調査および顕微鏡写真の撮影も実施された。その成果は昭和五十五年（一九八〇）三月に刊行された『法隆寺献納宝物特別調査概報Ⅰ　伎楽面』に収録されている。このとき、さまざまな角度から伎楽面を撮影した。その写真、X線写真、顕微鏡写真は昭和五十九年（一九八四）二月に刊行された『法隆寺献納宝物　伎楽面』（便利堂、A四判、三三八ページ、原色図版三十九図）に収録されている。

伎楽面は、昭和三十九年（一九六四）に開館した法隆寺宝物館で展示され、毎週木曜日（雨天の場合は閉館）に公開された。平成十一年（一九九九）に同館が建て替えられ、火曜日から日曜日の開館になった際も、伎楽面を展示した第三室の開室は、保存状態を考慮して春、夏、秋の各一か月とした。平成二十九年（二〇一七）には照明に人感センサーを導入することで、金、土曜日に限って通年公開している。

法隆寺献納宝物は宝物館から移動することはないという前提から、地下で構内の建物につながっていない。そのため撮影、調査等も同館内で行なっている。伎楽面については保存状態が危険なものもあるため、当館の館員でも触れることは稀であった。当館ウェブサイトのe国宝に掲出するため、平成二十七年（二〇一五）十月から二十八年（二〇一六）一月の五日間、デジタルカメラで撮影した。しかしこのとき、迦楼羅（N－226）、酔胡従（N－235）、波羅門（N－236）と面裏全体が見える写真は撮影していなかった。今回、それを補い、さまざまな角度のカラー画像を揃えることができた。なお、カラー画像はすべてColBase（国立文化財機構所蔵品統合検索システム）にて閲覧、利用が可能である（https://colbase.nich.go.jp/?locale=ja）。

当館では平成二十六年（二〇一四）よりX線断層（CT）撮影の機器を導入し、所蔵品、寄託品、特別展で借用した作品の調査を行なっているが、伎楽面は未着手だった。そこで、令和五年度（二〇二三）の特別調査を伎楽面のX線CT撮影とした。伎楽面のX線CT撮影は、月曜日に展示ケースから出して移動、木曜日に復帰という四日間で行なう必要があったため、三回に分けて実施した。法隆寺宝物館から資料館地下という数十メートルの移動ではあるが、前述したとおり地下でつながっておらず、屋根付きの廊下もないため、一面ずつ梱包し美術品専用車で輸送した。

なお、電気代の高騰、コロナ禍による減収によって調査の予算は極めて乏しく、京都・奈良・九州の各国立博物館彫刻担当研究員の旅費を負担することができず、調査日程の通知のみにとどまり、各館も旅費の支出が厳しいということで当館研究員のみの調査となった。

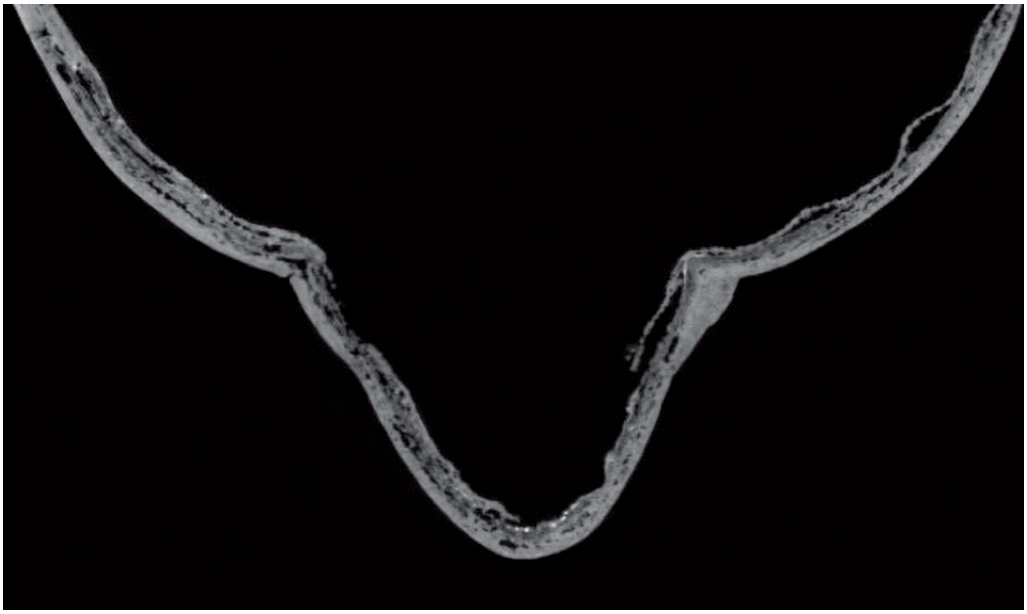
以下、X線CT画像とその所見を掲出する。調査はもとより大きな発見があるものではなく、昭和五十四年度に実施された調査の報告のうち、構造技法の記述をX線CT画像で確認し、公開するというのが主たる目的である。先輩の表面観察およびX線画像の読み込みの的確さを改めて認識することが多かった。木造面については樹種、木心の位置、木取り、後頭部を別材で作る時の接合方法等について画像で確認できた。崑崙（N－214）等の虫喰孔の甚大な点は今回初めて知るところとなり、これまで

以上に取り扱いに慎重を期す必要がある。

そのほかでは呉女（N－211）の髻（稚児輪）のうち、左方分は一材製であることがわかった。このような形のものを一材から作るのは手間がかかり材料にも無駄がでるので後補とはいいきれないだろう。その造形を左右比較して見ると、左方分背面側で基部から中央に窪みを作っている。これが右方分では見られないから、年代が異なるとみるのが自然だろう。

さらに、乾漆製面ではすでに報告されているとおり麻布二枚を重ね、表面の盛り上げ層が薄いことが断層画像で視覚的に明瞭になった。これを東大寺伎楽面酔胡従（C－1818）と比較すると、麻布を三枚重ね、表面の盛り上げは法隆寺面より厚いことがわかる（これもすでに指摘されている）。法隆寺の乾漆製面が少ないのは、薄さが原因で破損することが多く、失われたためかもしれない。その反省に立って、東大寺面が作られたと考えられ、従来の説のとおり法隆寺伎楽面は八世紀前半の作とみることができる。

この報告は主にＰＤＦとしてホームページ上で無償公開することとした。また、通常は閲覧が困難なＣＴデータを、動画形式で公開する試みも行なう。時期は未定であるが、今後データそのものを資料館閲覧室でご覧いただけるよう整備したいと考えている。



伎楽面酔胡従（C-1818） CT 部分　垂直側断面

伎楽面酔胡従（C-1818） CT 部分　水平断面

用材の樹種の識別について

児島大輔

本概報における従来の樹種識別は、すべて肉眼と一部低倍率ルーペを用いた目視での非破壊調査結果による。顕微鏡下における解剖学的見地からの識別は行なっていないため、今後訂正を要すこともあり得る。これまでの彫刻史研究における樹種識別は調査者の経験と感覚に多くを依存し、その識別拠点を示してこなかった。ここでは、今後の検証のために次の識別拠点によって判別を行なったことを明らかにしておく。

・クスノキ（クスノキ科クスノキ：*Cinnamomum camphora* Presl., LAURACEAE）

広葉樹散孔材。比較的大径の道管が年輪内にまばらに分布し、道管の周囲をやや発達した軸方向柔組織が取り囲む。早材と晩材の色の差が小さく一般に年輪界は不明瞭だが、古材では濃色の晩材によって年輪界が明瞭に現れることがままある。材はやや重量があり堅く、彫刻面は比較的つややかに仕上がる。森林総合研究所所蔵のクスノキ材標準試料（ＴＷＴｗ９０９）をＸ線ＣＴスキャナーで撮影した水平断面（木口・図１）・放射断面（板目～柾目・図２）・接線断面（板目・図３）の三断面の画像を参考として掲げる。図１、２では道管を見分けることが難しいが、図３で道管が周囲柔組織と一体となって年輪内にまばらに分布し、散孔材であることがみてとれる。

・キリ（ノウゼンカズラ科キリ：*Paulownia tomentosa* Steud., BIGNONIACEAE）

広葉樹環孔材から半環孔材。大径の道管が早材に集中して孔圏を構成する。早材は淡褐色、晩材はやや暗褐色で黒色を呈することがあり、一般に年輪界は明瞭。材は軽量で柔らかく、彫刻面は比較的肌理が粗い。森林総合研究所所蔵のキリ材標準試料（ＴＷＴｗ９３４６）をＸ線ＣＴスキャナーで撮影した水平断面（木口・図４）・斜め放射断面（追柾目・図５）・接線断面（板目・図６）の三断面の画像を参考として掲げる。図４、５で道管が孔圏に集中し、年輪界が明瞭に現れる様子がみてとれる。

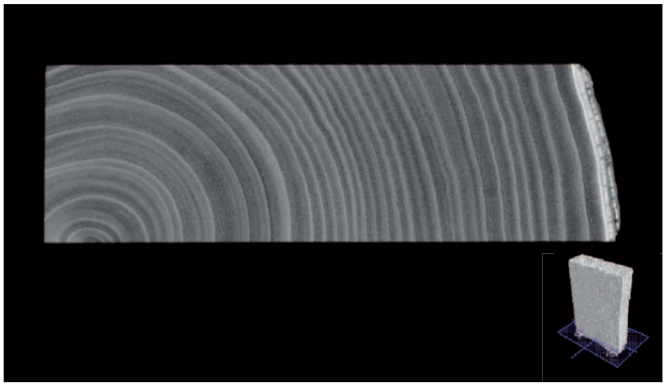


図１ クスノキ 水平断面

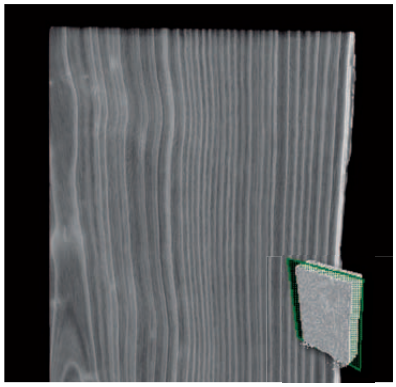


図２ クスノキ 放射断面

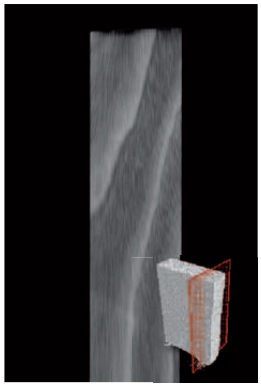


図３ クスノキ 接線断面

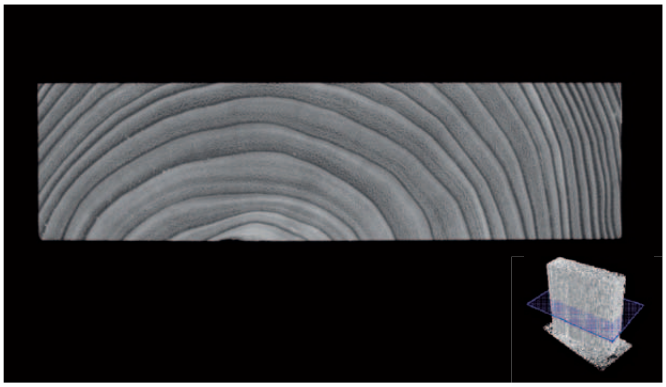


図４ キリ 水平断面

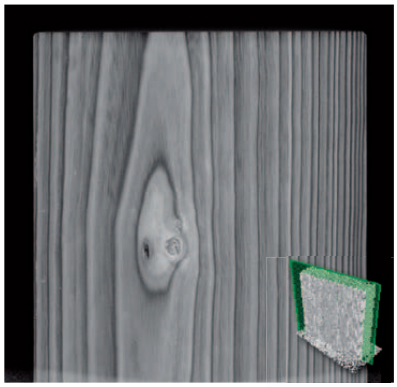


図５ キリ 斜め放射断面

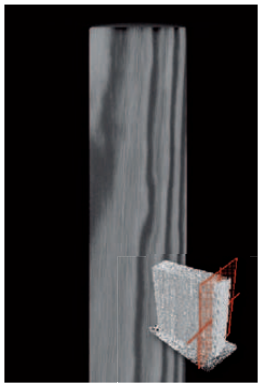


図６ キリ 接線断面

作品解説

1　伎楽面 師子児（N-208）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材を半裁して彫出し（図1－6）、旧報告では不明とされていた木心を頭頂に込めていることがわかる（図1－10）。木表（樹皮の側。以下同様）に彫刻を施す。後頭部もクスノキとみられる広葉樹の横一材製で木心を前方にはずす（図1－7、11）。後頭部材の矧ぎ付けは頭頂部（図1－10）および左右両側頭部（図1－8、9）の計三か所に設けた径約〇・三センチの木製丸枘を雇枘として用いる。また、両材の矧目のうち、左側に麻布を漆で貼り付ける（後補か）。頭頂部には径六・五センチ、厚〇・一センチ程度の金属製円盤を置き、頭髪を植える（図1－6、12）。金属板は金属釘四本で固定する（図1－10）。

（児島）

2　伎楽面 治道（N-209）

前面部は鼻先を含めて（図2－6）クスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心を頭頂に込める。樹皮側の木表に彫刻を施す。別材製の後頭部を欠失する。前頭部と側頭部に釘孔が残り、このうち前頭部・右側頭部にそれぞれ金属釘二本ずつが残る（図2－6～11）。頭部は彩色を施さず、毛髪を植えたような痕跡がないことから、旧報告でも「頭全体が何かで覆われていた旧状が想定され」（274頁）ていたが、いまは失われた頭部を覆う別素材のものがこの釘によって固定されていたものと推定される。

（児島）

3　伎楽面 呉公（N-210）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出する（図3－6）。旧報告では不明とされていたが、木心を左後方に外し、木表に彫刻を施す（図3－9）。別材製の後頭部を欠失する。前面部材と後頭部材は中央・左右の計三か所に設けた枘穴に、木製丸枘を雇枘として用い固定したものと想定される（図3－11）。旧報告に指摘されるとおり「両眼下と口角部には裏面から黒褐色の漆木屎状のもので補塡されている」（275頁、図3－6、7、12）が、同質のもので鼻孔内も整形する（図3－8）。金属製宝冠をつけ、五本の金属釘で固定する（図3－10）。頭部には動物質の短い繊維を数段に重ねて貼り、毛髪とする。

（児島）

4　伎楽面 金剛（N-212）

前面部は頭頂の髻を含んでクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出する（図4－6）。旧報告で指摘されるとおり木心は頭頂右に込められるが（図4－7）、木心が顎の右方へ抜けることが確認できる（図4－10）。木表に彫刻を施す。別材製の後頭部を亡失する。前面部材と後頭部材は中央・左右の計三か所に設けた枘穴に、木製丸枘を雇枘として用いて固定したものと想定され、いま三本の木製丸枘が残る（図4－9）。小鼻の成形には旧報告で「黒色の漆地粉」（275頁）とする漆状のペーストを盛り上げる（図4－9）。旧報告では同様の技法が額の血管等の塑形にも用いられていることを認めたうえで、血管の「主脈は或いは彫出か」（同頁）としているが、鼻の整形程大掛かりな造作ではないこともあり、CT画像では木彫によるのかあるいはペーストを盛り上げたものか判然としない

（図4－11）。頭頂付近には五か所の釘孔が残り、宝冠を留めた跡と推定される（図4－8）。

（児島）

5　伎楽面　迦楼羅（N－215）

前面部は鶏冠から嘴先の宝珠および左右の肉髯を含み、クスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、別材の後頭部は亡失する。

旧報告では「木芯は前頭部後方やや右寄りにはずしているようである」（276頁）とするが、CTでは前頭部の右後方にはずしていることがわかる（図5－12）。木表に彫刻を施す。前面部と後頭部の矧ぎ目について、旧報告では「左右二本の木釘枘の遺存からみて、樟材製面の通例のごとく三本の木釘枘と漆とで留めたものと思える」（同頁）とするが、木釘枘は両耳上の左右二本（図5－7～8）に加えて頭頂部左方寄りにもあることから（図5－9）、旧報告のとおり計三本で後頭部を留めていたか、あるいは左方寄りと対になる右方寄り一本を合わせた計四本で留めていた可能性もある。矧ぎ目の表裏両面から帯状の麻布を貼る。

旧報告で指摘される「下嘴のつけ根附近にも左右二箇所に鉄釘跡がある」（同頁）のうち、右方には金属釘が残存する（釘頭は裏面に露出する）。下瞼と小鼻の間の表面に木屎漆を盛り付けて整形する。上嘴について旧報告では「裏面右側の一部にも削り過ぎを補塡したような若干の盛上げがある」（同頁）とするが、CTでは彩色下地より厚みのある物質を確認できない。

（増田）

6　伎楽面　崑崙（N－214）

後頭部を含んでクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出する（図6－6）。旧報告で指摘されるとおり木心および節を頭頂右に込める（図6－8）。木心は顎中央に（図6－9）、節は右側頭部へ抜けることから（図6－7）、頭頂が原木の根元側、顎が梢側にあたり、用材の元・末を逆にした、いわゆる逆木に用いたことがわかる貴重な例である。木表に彫刻を施す。頭頂部、頬、面裏等に漆木屎かと思われるペースト状のものを盛り上げて整形するが、右眼窩下方を彫り抜いたらしく、このペースト状のもので補塡している（図6－10、11）。表面から知られる以上に内部の虫蝕が著しい（図6－6～11）。顎背面部は剝離した後に修理で接合したようである（図6－9）。

（児島）

7　伎楽面　呉女（N－211）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、後頭部および左右稚児輪は別材を矧ぐ。旧報告では「前面部材の木芯は不明であるが、顎の干割れからみると後方にはずした可能性が強い」（278頁）とするが、CTでは木心は中央後方にはずしていることがわかる（図7－11）。木表に彫刻を施す。

旧報告で指摘される「後頭部には横材を用いるか」（同頁）について、CTではこれが認められ、木心は中央後方下方にはずすとみられる（図7－6、9）。前面部との矧ぎ目について、旧報告では「稚児輪の後方二箇所に鉄鋏と鉄釘各一ずつを打ち、矧ぎ目を留める（当初の作業かどうか疑問）」（同頁）とするが、CTでは稚児輪の後方を含めた両耳上に金属釘枘が認められ（そのうち左方には別の枘穴跡がある）（図7－7、10、13）、また中央やや右方寄りに木釘枘を設けていることがわかる（図7－8）。左右稚児輪はそれぞれ基部で前面部材に丸枘挿しとし、基部の頭部に沿う部分には金属釘を各二つずつ打つが、右の一つは生きていない。

旧報告では「頭部との接合部から稚児輪頂上にかけての外側部分は左右とも後補の可能性が強い」（同頁）とするが、左方の稚児輪は一材製で、右方の稚児輪は基部から頂上やや内側にかけての外側部分は別材である（図7－13）。頭部前面から額、鼻に至る中央部を大きく欠失し、旧報告で

「髪際のやや上方から上瞼の少し上に至る間の正中線右寄りの一部は、右黒目やや内側の部分で割損した断片となって残存する（最大長九・四センチ、最大幅二・三センチ）」（同頁）と記される断片は、現在は本来の位置に復位されている。裏面の顎下に埋木をする（図7－12）。（増田）

8　伎楽面　力士（N－227）

前面部は髻を含んでクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図8－6）、金属製宝冠を戴く。木心を頭頂（図8－8）・髻左方（図8－9）に込めて木表に彫刻を施す。木心は顎の中央に抜け、生じた割れを鎹で留める（図8－10）。後頭部に同じくクスノキ製の横一材を寄せ、木心を前方下方に遠くはずす（図8－6、7）。前面部と後頭部は頭頂付近で木製丸枘を雇枘として接合する（図8－6、11）。旧報告で指摘されるとおり「浮き出しの血管は概形を彫出し、さらに黒色の漆地粉をわずかに盛って整形」（279頁）しているようである（図8－12）。（児島）

9　伎楽面　波羅門（N－230）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、旧報告で「木芯は不明」（280頁）とされるが、CTでは木心は右方後方にはずしていることがわかる（図9－10）。木表に彫刻を施す。頭頂部から後方が欠失するため後頭部がもともとあったか不明だが、両耳上方で額と頭頂部の間を横切るように水平に切り、矧ぎ面の裏側に一段の段差を設けており、この箇所に頭頂部から後方を合欠式で接合していたとみられる。ただし後頭部まで含むかは不明。矧ぎ面の正面と左方に木釘枘が残存し（図9－7、11）、右方には枘穴のみ残る。裏面に帯状の平絹が貼られていた痕跡がある。額右方の一部を欠失する。

旧報告では「鼻は小鼻の先から矧いである」（同頁）とするが、CTでは小鼻より前の位置で矧ぎ、短い丸枘で付け根に挿し込んで小材を挟んでいることがわかり（図9－6）、枘孔は裏面へ貫通している。上下に二本の金属釘を打ち込んで留める（図9－7）。旧報告では「鼻の先端から小鼻、鼻の下から上唇や歯にかけての鼻の周辺部に、黒色の漆地粉がごく薄くかけてある」（同頁）とするが、鼻の先端には確認できず、鼻梁や右小鼻に薄い木屎漆が確認できる。（増田）

10　伎楽面　太孤父（N－216）

前面部は鼻先を含んでクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心を右後方にはずして木表に彫刻を施す（図10－6、8）。旧報告では鼻先に別材を矧いでいるとみるが、鼻先が剝離した後に修理で接合したようで、鼻先も同材と認められる（図10－6、9）。頭頂部に四か所の孔が大きく開く。頭頂に頭髪を固定する円盤状の押さえ板を取り付けた釘孔が広がったものだろう（図10－8）。後頭部は横材製で木心を前方にはずすが、右側頭部にわずかに断片を残し（図10－7、10）、そのほとんどすべてを亡失する。前面部と後頭部は頭頂部および両側頭部の計三か所で木製丸枘を雇枘として接合する（図10－7、10）。（児島）

11　伎楽面　太孤児（N－217）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心を中央後方に外して木表に彫刻を施す（図11－6、7）。後頭部は亡失する。前面部材と後頭部材は、中央・左右の三か所に設けた枘穴に、木製丸枘を雇枘として用い固定したものと想定され、いま中央（図11－8）および左側頭部（図11－9、11）の木製丸枘が残る。頭頂に頭髪を固定する部材（亡失）を取り付けた釘孔が残り、中央前方には金属釘が一本残る（図11－6）。また、頭頂にこの釘の鉄錆によるとみられる腐食孔が開く（図11－10）。（児島）

12　伎楽面　太孤児（N－218）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図12－6、9）、木心をやや右寄り後方に外して木表に彫刻を施す（図12－7）。後頭部は亡失する。前面部材と後頭部材は、中央・左右の三か所に設けた枘穴に、木製丸枘を雇枘として用い固定したものと想定され、いま中央（図12－9）および右側頭部（図12－8、10）に木製丸枘が残る。頭頂部に金属釘が二本残る（図12－7、9）。今は失われる頭髪をおさえた部材を固定したものだろう。（児島）

13　伎楽面　酔胡王（N－219）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図13－6）、木心をやや左寄り後方にはずして木表に彫刻を施す（図13－10）。頭頂部を繰り抜く。後頭部材を接続した痕跡が認められないため、当初より後頭部は造られず前面部のみであったものと推定される。鼻に木屎漆を盛り上げて整形する（図13－7、9）。眉（図13－8）、口髭（図13－7）、顎鬚（図13－6、7）を木製の釘で植え込む。右耳上方に金属釘一本を残す（図13－9）。金属製宝冠等の頭飾を留めたものであろう。（児島）

14　伎楽面　酔胡従（N－220）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図14－6）、旧報告で指摘されるとおり木心を右方やや後方寄りにはずす（図14－8）。後頭部は亡失する。前面部材と後頭部材は中央・両側頭部の三か所に設けた枘穴で木釘状の木製丸枘を雇枘として接合し、中央と右側頭部に木釘状の枘が残る（図14－7、11）。鼻を漆状のペーストで整形し、鼻根にはやや厚く盛る（図14－10）。頭頂に六花形の金属板を取り付け、植えた毛髪をおさえる。この金属板には釘孔一二個を穿ち、うち四本の金属釘が残る（図14－8）。（児島）

15　伎楽面　酔胡従（N－221）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図15－6、9）、木心を左方やや後方にはずす（図15－8）。後頭部は亡失する。前面部材と後頭部材は頭頂・両側頭部の三か所で木釘状の木製丸枘を雇枘として接合する（図15－6、11）。漆状のペーストを盛り上げて鼻を整形する（図15－7、10）。頭頂に三本の金属釘が残る（図15－8）。もとは頭髪を固定するための金属製飾板を留めていたものだろう。（児島）

16　伎楽面　酔胡従（N－222）

前面部はクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図16－8、12）、木心を右方にはずす（図16－9、10）。後頭部は亡失する。前面部材と後頭部材は、中央・左右の三か所に設けた枘穴に、木製丸枘を雇枘として用い固定する（図16－6、9）。旧報告では「矧面中央部は欠失し、枘の有無は不明」（285頁）とするが、図で示すとおり枘の存在を確認できる（図16－6）。また、旧報告では「裏面は素地のまま」（同頁）とするが、眼窩上部から面裏額部にかけてペースト状のものを塗る。このX線透過度の低い素材と、塗布された目的は明らかではない（図16－6～10、12）。頭頂を欠損する。旧報告では「一箇所に鉄釘が残」る（同頁）とするが、いま頭頂に金属釘を二本確認できる（図16－11）。頭髪を固定するために取り付けた板（亡失）を留めたものだろう。（児島）

17　伎楽面　酔胡従（N－223）

後頭部を含んでクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し（図17－6、12）、木心を左後方にはずす（図17－10）。同図に見られる直線上に連なる小孔は、後頭部の覆い布を固定した釘孔である。左こめかみ周辺は薄く、厚さは〇・二センチに満たない（図17－9、12）。額・眉間から鼻・唇にかけて木屎漆で整形する（図17－7、8）。頭頂に朽損による孔が四か所開く（図17－11）。頭髪を固定するために取り付けた金属板（亡失）を留めた釘から発生した錆を原因とするものだろう。（児島）

18　伎楽面　酔胡従（未完成）（N－237）

後頭部を含みクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心を後頭部中央やや左方に込める（図18－9）。木心周辺に十文字の切り込みをつける。木表に彫刻を施す。紐孔や小連孔などは認められない。額の一部、眉の上、鼻梁、上唇、頬などに木屎漆を盛り付けて整形する。口の両端は表裏両面から木屎漆を補塡する（図18－7、8、11）。旧報告では、「左眼尻にある節穴にもそれ（筆者注・前文の「漆木屎」を指す）が塡められ、裏面から荒目の麻布が貼られている」（286頁）とするが、節穴は確認できない。金属釘は残存しない。（増田）

19　伎楽面　酔胡従（未完成）（N－238）

後頭部を含みクスノキとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心は左側頭部の耳上方に込める（図19－7）。木表に彫刻を施す。紐孔や小連孔などは認められない。右小鼻の脇や左頬下の節穴に木屎漆を塡している（図19－8～10）。金属釘は残存しない。（増田）

20　伎楽面　師子児（N－224）

前面部はキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、後頭部は現存しないが、別材製だったかどうかは判断できない。木心は、旧報告では「頭頂の中央やや左寄りに籠める」（287頁）とする。CTでは確認できないものの、中央後方に位置することは想定される（図20－10）。木表に彫刻を施す。左耳朶、鼻下、下唇および下歯列の左右に木屎漆を盛り付けて整形する（図20－6～7）。下唇などは、口角の修正に伴う処置である可能性がある。

旧報告でも指摘のあった「左上瞼の上辺に円形の埋物（径七ミリ）」（同頁）の材質は木屎であろう。旧報告では「頭頂部の中央やや左寄り（木芯の少し前方）に鉄釘一を打込」（同頁）み、「頭飾取付け用とみなされる」（同頁）とあるが、CTではその隣にも金属釘が一本（釘頭は露出しない）確認できる（図20－10～11）。（西木）

21　伎楽面　金剛（N－213）

髻から後頭部も含みキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心は左後方に込める。中心部は脱落し（図21－10）、表裏とも麻布を漆で貼って塞ぐ。木表に彫刻を施す。右後方に干割れがあり（図21－10）、これも布で塞ぐ。額の血管が浮き出る箇所は木屎漆を盛り上げて整形する。金属釘は残存しない。（西木）

22　伎楽面　金剛（N－229）

前面部はキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、後頭部は現存しないが、別材製だったかどうかは判断できない。木心は中央後方に想定される（図22－10）。木表に彫刻を施す。額、眉間、眉、頬、唇の両端、下顎の両

端、耳朶などに木屎漆を盛り付け整形する。金属釘は残存しない。（西木）

23　伎楽面　迦楼羅（N－226）

鶏冠から後頭部も含みキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心は中央後方に想定される（図23－10）。木表に彫刻を施す。

旧報告では「鶏冠は前半部だけを別材で作り、前頭部に嵌め込まれている」（288頁）と指摘されるが、その大きさは縦五六ミリ、横八ミリ、奥八ミリである（図23－7）。京都国立博物館やMIHOミュージアム所蔵面のように、本来は眉間近くから鶏冠を備えていたのだろう。その周辺には小孔が複数あり、旧報告では「一部には鉄錆がついている」（同頁）と指摘されるが、CTでは右方の一つに金属釘が一本確認できる（図23－11）。

旧報告で「何かを着装していた跡」（同頁）とされるが頭飾の可能性がある。眉、眼、頬の周辺に木屎漆を盛り付け整形する。（西木）

24　伎楽面　呉女（N－225）

後頭部も含みキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、旧報告では「木芯は後方左寄りにはずしてある」（289頁）とされるが、CTでは中央後方に籠め、内刳りにより取り除くことがわかる（図24－8）。木表に彫刻を施す。双髻は別材製で、旧報告では「頭頂に枘状に挿込み、漆で接着し、さらに鉄釘で留められている。X線写真で見ると釘足は切断されている」（289頁）とされるが、おそらく正面のX線写真で枘と判断された方形の影は、CTで確認すると双髻の前方、地髪部中央に位置しているため、縦一五ミリ、横一四ミリ、奥一七ミリの枘穴に埋木をしたものと考えられる（図24－15～16）。双髻前方に頭飾を固定した痕跡とも思われるが、用途は特定できない。前面中央で金属釘二本、左右から金属釘二本で主材に固定する（図24－11～14）。髪際を木屎漆で整形する。（西木）

25　伎楽面　力士（N－228）

前面部はキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、後頭部は現存しないが、別材製だったかどうかは判断できない。頭頂の破損部に製作当時とみられる別材の一部が残存するが、当初の形状や意図はわからない（図25－12）。木心は右後方に込め、内刳りにより取り除くことがわかる（図25－10）。木表に彫刻を施す。額、眉間、眉、頬、唇の両端、下顎の両端、耳朶などに木屎漆を盛り付け整形する。

旧報告では「両こめかみ上の頭頂部左右にそれぞれ数箇所の釘穴がある。右側は鉄釘三が残り、また別に比較的新しい銅釘二も存在」（290頁）し、「宝冠取付けのための仕様」（同頁）とされるが、CTでは頭頂部右方の表面から金属釘を二本打ち付け、裏面に貫通した部分を曲げることが確認できる（図25－11）。また、左方にも金属釘が一本確認できるが、釘頭は露出しない。（西木）

26　伎楽面　酔胡王（N－231）

冠帽から左右の頭髪、鼻も含みキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、後頭部は現存しないが、残存する木釘枘から別材製だったとみられる。木心は中央後方に想定される（図26－8）。木表に彫刻を施す。

冠帽前面部での別材の矧ぎ方について、旧報告では「左右側面のほぼ中央で幹部材に鉄鎹各一（左側の鎹足が幹部材裏面に出、右側鎹は痕跡のみ残る）で留め、また下方中央の二箇所に木釘状の雇枘も認められる」（290頁）とあるが、CTでも左方分は確認できる（図26－14）。また、前方地髪部との境にて木釘三本で固定する（図26－13）。金属釘は残存しない。（西木）

27　伎楽面　酔胡従（N－232）

後頭部も含みキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心は中央に込め、内刳りにより取り除く。木表に彫刻を施す。

旧報告では「木芯は頭頂ほぼ中央にあるが、今は円形に大きく抜け落ちている」（291頁）とされるが、他例を参照すると木心が脱落したものとは思われず（図27－10）、頭飾を留めた痕跡の可能性もあろう。また、同じく「ほかに右側頭部に二個、左側頭部に一個、頭頂やや左寄りに一個の節穴がある」（同頁）と続くが、右側頭部の孔の一つと左側頭部分は対称の位置にあるため、紐孔の可能性もある。右側頭部分の一つは節穴と認められる。金属釘は残存しない。（西木）

28　伎楽面　酔胡従（N－233）

後頭部も含みキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、木心は右後方に込め、中心部が脱落する（図28－10）。木表に彫刻を施す。両耳は主材を一段削ぎ落したうえ別材を矧ぐとみられるが、左方分は主材ごと欠失し、右方分は別材を亡失する。右前方で脱落した節の中心部には木屎漆を充塡する。

旧報告では「頰や眼の周辺に黒褐色の漆木屎を薄く盛って整形」（292頁）とあるが、CTでは彩色下地より厚みのある物質は確認できない。金属釘は残存しない。（西木）

29　伎楽面　力士（N－234）

原型は目、鼻、口など完成形に近い形状まで塑土でつくるが、CT画像で塑土の残存は識別できなかった。原型の上に粗目（四本／五ミリ）の麻布①（図29－6）を貼る。麻布①は作品の内面側（以下、作品の表面側をA面、内面側をB面と呼ぶ）に漆が多い。

麻布①のA面に細目（一〇本／五ミリ）の麻布②（図29－7）を貼る。麻布②は仮面全体に及ぶとみられる。麻布①②が、それぞれ何枚で構成されているかは確認できなかった。麻布を切って塑土を除去する。正中で額の血管の前端やや後ろから欠損部縁まで麻布の切断が確認できる。除去後、切断箇所両側にあけた小孔の間を糸で縫い合わせる（図29－9）。糸は麻布①のB面側をわたっている様子は確認できるが、A面側については不明。旧報告では、この切断はないとする。麻布①のB面に細目（六～七本／五ミリ）の麻布③（図29－8）を貼る。

麻布③のB面を粗目と細目の小麻布で部分的に補強をする。製作時の面の縁がすべて失われているため、他の乾漆製の面のように縁に蔓性植物を沿わせていたかは不明。額の血管は蔓性植物、こめかみの血管は細目の麻布を巻いたものを芯として表わす（図29－10）。額の血管の固定には、竹製とみられる釘を用いる（図29－11）。筋の盛り上げ、血管、目の縁、唇、歯などに少量の漆地粉を用いて塑形し、全体にも薄く塗布のうえ彩色を施す。麻布③のB面に黒漆を塗る。（丸山）

30　伎楽面　波羅門（N－236）

原型は目、鼻、口など完成形に近い形状まで塑土でつくるが、CT画像で塑土の残存は識別できなかった。原型の上に粗目（五本／五ミリ）の麻布①（図30－6）を貼る。麻布①は作品の内面側（以下、作品の表面側をA面、内面側をB面と呼ぶ）に漆が多い。麻布①のA面に細目（九本／五ミリ）の麻布②（図30－7）を貼る。麻布①②が、それぞれ何枚で構成されているかは確認できなかった。麻布を切って原型を除去する。前寄りの端は欠損部前縁に切断箇所とみられる痕跡が認められる。頭頂より後方の切断箇所は目視でも確認できる。除去後、切断箇所両側にあけた小孔を糸で縫い合わせる。B面で斜めに糸（図30－9）がわたるのが確認できる

が、A面側は不明。旧報告では縫合はないと推測する。麻布①のB面に粗目（五本／五ミリ）の麻布③（図30－8）を貼る。

裏面周縁部に帯状に粗目の麻布を貼る。左端は左耳下端の曲線と面縁が交わるあたりから、右端は右耳上縁の曲線と面縁の交わるあたりまでの面の縁に、半截の蔓性植物（図30－10）を沿わせ、糸で留める。ただし、顎にはない。蔓性植物を覆うように縁に粗目の麻布を貼る。歯は木製で（図30－11）、固定に釘は用いない。左下の歯は、その前寄りに歯を固定するためとみられる孔があるので（図30－12）、製作途中で位置の修正をした可能性がある。鼻、唇、頬、皺などは少量の、歯はやや多めの漆地粉で塑形し、全体にも薄く塗布のうえ彩色を施す。麻布③のB面に黒漆を塗る。頭頂部に、別材製の頭髪を貼る。

（丸山）

31　伎楽面　酔胡従（N－235）

原型は目、鼻、口など完成形に近い形状まで塑土でつくるが、CT画像で塑土の残存は識別できなかった。原型の上に粗目（四本／五ミリ）の麻布①（図31－6）を貼る。麻布①は作品の内面側（以下、作品の表面側をA面、内面側をB面と呼ぶ）に漆が多い。麻布①のA面に細目（九～一〇本／五ミリ）の麻布②（図31－7）を貼る。麻布②は仮面全体に及ぶとみられる。麻布①②が、それぞれ何枚で構成されているかは確認できなかった。麻布を切って塑土を除去する。仮面B面の、眉間の瘤の頂上辺から後頭部方向に線状にある盛り上がりが切断箇所とみられる。除去後、切断箇所両側にあけた小孔の間を糸で縫い合わせる（図31－9）。糸は麻布①のB面側をわたっている様子は確認できるが、A面側については不明。旧報告では縫合はないと推測する。麻布①のB面に粗目（四本／五ミリ）の麻布③（図31－8）を貼る。

麻布の鉢周りを上下に切断する。製作時の面の縁が現存するのは右耳後方のみであるが、そこに半截の蔓性植物（図31－10）を沿わせている。粗目の麻布で蔓性植物を覆う。蔓性植物を固定するために麻布に小孔を設け、糸でかがり縫いする。現存する蔓性植物の長さは四七ミリで、糸目は四か所、それとは別に、蔓性植物を貫通する糸も一か所ある。

鉢周りの切除した部分に、鉢の形状に合わせて曲げた一材製の板（高一八ミリ、図31－11）を補う。欠失する左半分は別材製である。板の上縁（現状一三か所）と下縁（現状一四か所、中央付近で孔間一三ミリ）に小孔があり、麻布と糸で固定する（図31－12）。旧報告で指摘する表側の切れ込は認められない。板の裏面に帯状の粗目の麻布を貼る。別材製の頭髪を貼るが、現状では右耳上方に残る。目、鼻、口などに少量の漆地粉を用いて塑形し、鉢周りの板も含め、全体にも薄く塗布のうえ彩色を施す。麻布③のB面に黒漆を塗る。

（丸山）

補1　舞楽面（N－239）

全容をキリとみられる広葉樹竪一材から彫出し、旧報告では「木芯を額中央に籠める」（295頁）とされるが、CTでは前方にはずすことがわかる（図補1－9）。木裏（木心の側）に彫刻を施す。旧報告では「鼻梁付根から両下瞼にかけて黒褐色の漆地粉を薄く盛って整形する」（同頁）とあるが、CTでは彩色下地より厚みのある物質は確認できない。金属釘は残存しない。

（西木）

補2　鬼面（N－240）

上部材（頭頂から上瞼）、中間部材（両目から鼻および頬、上唇）、下部材（両耳を含み上歯から顎先）の三材で構成され、それぞれ広葉竪一材から彫出する。いずれも木質が共通するため、同一材から木取りした可能性がある。上部材と中間部材は中央後方に（図補2－10、12）、下部材は左後方に木心を込め（図補2－14）、内刳りにより取り除く。三材とも木表

に彫刻を施す。角、上下の牙はすべてヒノキとみられる別材製で、枘穴に挿込む（図補２－８）。角は二本とも根本で別材を矧ぐ。下歯列右方の牙は枘穴を開け直しており、牙の角度を変更したとみられる（図補２－16）。眉や眉間、頬、血管などの隆起はすべて主材から彫出する。両目および上下歯列は概形を彫り、その上に金属板を嵌める（図補２－６、９、11、13、17）。両目はともに上下二本の金属釘で固定する（右眼下方分は亡失）。上下歯列は、中央と左右に各三本の金属釘で固定する。面裏の額中央に三材を連結する紐を吊るための環金具をつける（図補２－17）。

旧報告で「右頬は材の表面剥離（別材の可能性もある）を防ぐため、木釘四本を打って留める」（２９７頁）とある部分は、ＣＴで確認すると別材と判断できる（図補２－９、12）。また、「右眼孔部裏面の上方に二本の釘を打込む」（２９６頁）とあるのは、ＣＴで確認すると鎹とわかる（図補２－15）。用途は当時推測されたとおり「割れ止め」とみられ、さらに埋木を施して木釘で固定する。同様の処置が上歯列右上方にも認められる。鼻下左方に干割れがあり、裏面から埋木を木釘で固定して割れ止めにしたとみられる。

（西木）

法隆寺献納宝物仮面作品一覧

列品番号	指定	作品名	材質技法	法量	制作年	掲載番号
N-208	重要文化財	伎楽面 師子児	クスノキ製、彩色	全長 26.8 最大幅 19.1	飛鳥時代・7 世紀	1
N-209	重要文化財	伎楽面 治道	クスノキ製、彩色	全長 30.5 最大幅 22.3	飛鳥時代・7 世紀	2
N-210	重要文化財	伎楽面 呉公	クスノキ製、彩色	全長 29.9 最大幅 25.6	飛鳥時代・7 世紀	3
N-211	重要文化財	伎楽面 呉女	クスノキ製、彩色	全長 37.7 最大幅 32.8	飛鳥時代・7 世紀	7
N-212	重要文化財	伎楽面 金剛	クスノキ製、彩色	全長 33.9 最大幅 22.8	飛鳥時代・7 世紀	4
N-213	重要文化財	伎楽面 金剛	キリ製、彩色	全長 37.7 最大幅 21.7	奈良時代・8 世紀	21
N-214	重要文化財	伎楽面 崑崙	クスノキ製、彩色	全長 33.9 最大幅 26.7	飛鳥時代・7 世紀	6
N-215	重要文化財	伎楽面 迦楼羅	クスノキ製、彩色	全長 28.6 最大幅 22.0	飛鳥時代・7 世紀	5
N-216	重要文化財	伎楽面 太孤父	クスノキ製、彩色	全長 29.8 最大幅 22.3	飛鳥時代・7 世紀	10
N-217	重要文化財	伎楽面 太孤児	クスノキ製、彩色	全長 25.7 最大幅 19.0	飛鳥時代・7 世紀	11
N-218	重要文化財	伎楽面 太孤児	クスノキ製、彩色	全長 26.0 最大幅 18.0	飛鳥時代・7 世紀	12
N-219	重要文化財	伎楽面 酔胡王	クスノキ製、彩色	全長 32.6 最大幅 19.8	飛鳥時代・7 世紀	13
N-220	重要文化財	伎楽面 酔胡従	クスノキ製、彩色	全長 31.5 最大幅 21.7	飛鳥時代・7 世紀	14
N-221	重要文化財	伎楽面 酔胡従	クスノキ製、彩色	全長 29.6 最大幅 22.8	飛鳥時代・7 世紀	15
N-222	重要文化財	伎楽面 酔胡従	クスノキ製、彩色	全長 28.4 最大幅 22.1	飛鳥時代・7 世紀	16
N-223	重要文化財	伎楽面 酔胡従	クスノキ製、彩色	全長 30.0 最大幅 23.0	飛鳥時代・7 世紀	17
N-224	重要文化財	伎楽面 師子児	キリ製、彩色	全長 22.5 最大幅 17.0	飛鳥～奈良時代・8 世紀	20
N-225	重要文化財	伎楽面 呉女	キリ製、彩色	全長 33.9 最大幅 20.5	飛鳥～奈良時代・8 世紀	24
N-226	重要文化財	伎楽面 迦楼羅	キリ製、彩色	全長 32.0 最大幅 18.0	飛鳥～奈良時代・8 世紀	23
N-227	重要文化財	伎楽面 力士	クスノキ製、彩色	全長 36.7 最大幅 24.5	飛鳥時代・7 世紀	8
N-228	重要文化財	伎楽面 力士	キリ製、彩色	全長 26.6 最大幅 22.0	飛鳥～奈良時代・8 世紀	25
N-229	重要文化財	伎楽面 金剛	キリ製、彩色	全長 25.9 最大幅 21.4	飛鳥～奈良時代・8 世紀	22
N-230	重要文化財	伎楽面 波羅門	クスノキ製、彩色	現存長 27.7 最大幅 22.6	飛鳥時代・7 世紀	9
N-231	重要文化財	伎楽面 酔胡王	キリ製、彩色	全長 42.5 最大幅 24.5	飛鳥～奈良時代・8 世紀	26
N-232	重要文化財	伎楽面 酔胡従	キリ製、彩色	全長 29.6 最大幅 22.8	飛鳥～奈良時代・8 世紀	27
N-233	重要文化財	伎楽面 酔胡従	キリ製、彩色	全長 27.7 現存最大幅 20.2	飛鳥～奈良時代・8 世紀	28
N-234	重要文化財	伎楽面 力士	乾漆製、彩色	全長 26.0 最大幅 26.5	奈良時代・8 世紀	29
N-235	重要文化財	伎楽面 酔胡従	乾漆製、彩色	全長 25.8 最大幅 20.0	飛鳥～奈良時代・8 世紀	31
N-236	重要文化財	伎楽面 波羅門	乾漆製、彩色	全長 25.9 最大幅 18.4	奈良時代・8 世紀	30
N-237	重要文化財	伎楽面 酔胡従（未完成）	クスノキ製	全長 30.7 最大幅 21.2	飛鳥時代・7 ～ 8 世紀	18
N-238	重要文化財	伎楽面 酔胡従（未完成）	クスノキ製	全長 29.2 最大幅 22.3	飛鳥時代・7 ～ 8 世紀	19
N-239		舞楽面	キリ製、彩色	全長 27.1 最大幅 19.2	奈良時代・8 世紀	補 1
N-240		鬼面	木製、漆塗	全長 40.5 最大幅 29.0	鎌倉時代・永仁 4 年（1296）	補 2

凡例　掲載番号は旧報告と共通である（東京国立博物館編集『法隆寺献納宝物　伎楽面』東京国立博物館、1984 年）

作品番号	作品名	列品番号	実施日
CT 撮影条件			
19	伎楽面 酔胡従（未完成）	N-238	2023 年 8 月 22 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
20	伎楽面 師子児	N-224	2023 年 7 月 31 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
21	伎楽面 金剛	N-213	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
22	伎楽面 金剛	N-229	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
23	伎楽面 迦楼羅	N-226	2023 年 7 月 31 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
24	伎楽面 呉女	N-225	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
25	伎楽面 力士	N-228	2023 年 7 月 31 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
26	伎楽面 酔胡王	N-231	2023 年 8 月 23 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			

作品番号	作品名	列品番号	実施日
CT 撮影条件			
27	伎楽面 酔胡従	N-232	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
28	伎楽面 酔胡従	N-233	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
29	伎楽面 力士	N-234	2023 年 7 月 5 日
装置：エクスロン社製微小部撮影用 CT X 線管：FXE 225.48-3 電圧：220［kV］、電流：0.4［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 416［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 1055［mm］、画像再構成解像度：約 0.15［mm］			
30	伎楽面 波羅門	N-236	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製微小部撮影用 CT X 線管：FXE 225.48-3 電圧：200［kV］、電流：0.45［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 436［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 1055［mm］、画像再構成解像度：約 0.15［mm］			
31	伎楽面 酔胡従	N-235	2023 年 7 月 31 日
装置：エクスロン社製微小部撮影用 CT X 線管：FXE 225.48-3 電圧：220［kV］、電流：0.4［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 416［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 1055［mm］、画像再構成解像度：約 0.15［mm］			
補 1	舞楽面	N-239	2023 年 8 月 23 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
補 2	鬼面	N-240	2023 年 8 月 23 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			

＊撮影者は宮田将寛（東京国立博物館保存修復課）。

X 線断層（CT）撮影データ

作品番号	作品名	列品番号	実施日
CT 撮影条件			
1	伎楽面 師子児	N-208	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
2	伎楽面 治道	N-209	2023 年 7 月 5 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
3	伎楽面 呉公	N-210	2023 年 8 月 22 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
4	伎楽面 金剛	N-212	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
5	伎楽面 迦楼羅	N-215	2023 年 8 月 22 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
6	伎楽面 崑崙	N-214	2023 年 7 月 3 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：500［kV］、電流：1.4［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
7	伎楽面 呉女	N-211	2023 年 7 月 5 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
8	伎楽面 力士	N-227	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
9	伎楽面 波羅門	N-230	2023 年 8 月 1 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			

作品番号	作品名	列品番号	実施日
CT 撮影条件			
10	伎楽面 太孤父	N-216	2023 年 7 月 5 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
11	伎楽面 太孤児	N-217	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
12	伎楽面 太孤児	N-218	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
13	伎楽面 酔胡王	N-219	2023 年 7 月 5 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
14	伎楽面 酔胡従	N-220	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
15	伎楽面 酔胡従	N-221	2023 年 7 月 4 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
16	伎楽面 酔胡従	N-222	2023 年 7 月 31 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
17	伎楽面 酔胡従	N-223	2023 年 8 月 22 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			
18	伎楽面 酔胡従（未完成）	N-237	2023 年 8 月 22 日
装置：エクスロン社製大型 CT X 線管：Y.TU600-D02 電圧：450［kV］、電流：1.55［mA］、インテグレーションタイム：500［ms］、フレームビニング：1 プロジェクション数：2070、撮影対象～ X 線管球間距離：約 1617［mm］、受光部～ X 線管球間距離：約 2360［mm］、画像再構成解像度：約 0.26［mm］			

法隆寺献納宝物特別調査概報および研究図録等一覧

昭和54年度　法隆寺献納宝物特別調査概報1　伎楽面
昭和55年度　法隆寺献納宝物特別調査概報2　鏡鑑
昭和56年度　法隆寺献納宝物特別調査概報3　漆皮箱
昭和57年度　法隆寺献納宝物特別調査概報4　押出仏
昭和58・59年度　法隆寺献納宝物特別調査概報5　金銅仏1
昭和60年度　法隆寺献納宝物特別調査概報6　金銅仏2
昭和61年度　法隆寺献納宝物特別調査概報7　金銅仏3
昭和62年度　法隆寺献納宝物特別調査概報8　金銅仏4
昭和63年度　法隆寺献納宝物特別調査概報9　金銅仏5
平成元年度　法隆寺献納宝物特別調査概報10　金銅仏6
平成2年度　法隆寺献納宝物特別調査概報11　灌頂幡
平成3年度　法隆寺献納宝物特別調査概報12　金銅小幡
平成4年度　法隆寺献納宝物特別調査概報13　水瓶
平成5年度　法隆寺献納宝物特別調査概報14　楽器
平成6年度　法隆寺献納宝物特別調査概報15　木漆工1
平成7年度　法隆寺献納宝物特別調査概報16　木漆工2
平成8年度　法隆寺献納宝物特別調査概報17　木漆工3
平成9年度　法隆寺献納宝物特別調査概報18　仏画写経貼交屏風1（仏画）
平成10年度　法隆寺献納宝物特別調査概報19　仏画写経貼交屏風2（写経）
平成11年度　法隆寺献納宝物特別調査概報20　書跡1（経典）
平成12年度　法隆寺献納宝物特別調査概報21　書跡2（古記録・古文書）
平成13年度　法隆寺献納宝物特別調査概報22　計量器
平成14年度　法隆寺献納宝物特別調査概報23　武器・武具・馬具
平成15年度　法隆寺献納宝物特別調査概報24　供養具1
平成16年度　法隆寺献納宝物特別調査概報25　供養具2
平成17年度　法隆寺献納宝物特別調査概報26　聖徳太子絵伝下貼文書1
平成18年度　法隆寺献納宝物特別調査概報27　聖徳太子絵伝下貼文書2
平成19年度　法隆寺献納宝物特別調査概報28　聖徳太子絵伝1
平成20年度　法隆寺献納宝物特別調査概報29　聖徳太子絵伝2
平成21年度　法隆寺献納宝物特別調査概報30　聖徳太子絵伝3
平成22年度　法隆寺献納宝物特別調査概報31　聖徳太子絵伝4
平成23年度　法隆寺献納宝物特別調査概報32　聖徳太子絵伝5
平成24年度　法隆寺献納宝物特別調査概報33　聖徳太子絵伝（四幅本）1
平成25年度　法隆寺献納宝物特別調査概報34　聖徳太子絵伝（四幅本）2
平成26年度　法隆寺献納宝物特別調査概報35　古今目録抄1
平成27年度　法隆寺献納宝物特別調査概報36　古今目録抄2
平成28年度　法隆寺献納宝物特別調査概報37　古今目録抄3
平成29年度　法隆寺献納宝物特別調査概報38　古今目録抄4
平成30年度　法隆寺献納宝物特別調査概報39　文王呂尚・商山四皓図屏風1
平成31（令和元）年度　法隆寺献納宝物特別調査概報40　文王呂尚・商山四皓図屏風2
令和2年度　法隆寺献納宝物特別調査概報41　染織1　刺繍
令和3年度　法隆寺献納宝物特別調査概報42　竜首水瓶
令和5年度　法隆寺献納宝物特別調査概報43　伎楽面X線断層（CT）調査

研究図録等

『法隆寺献納宝物　伎楽面』一九八四年
『法隆寺献納宝物　染織Ⅰ—幡・褥—』一九八六年
『法隆寺献納宝物　金銅仏Ⅰ』一九九六年
『法隆寺献納宝物銘文集成』一九九九年

令和 6 年 3 月 29 日発行

法隆寺献納宝物特別調査概報 43
伎楽面X線断層（CT）調査

編集・発行　東京国立博物館
〒 110-8712
東京都台東区上野公園 13-9
電話　03-3822-1111
印　　刷　株式会社　アイワード

©2024 Tokyo National Museum